令和 3 年度
修士論文

日本の近現代住宅の和室空間にみる内法上装置の省略化傾向に関する研究
雑誌『新建築』および『建築文化』を資料として

指導教員
浅野　聡　　教授
大井　隆弘　助教

三重大学大学院工学研究科建築学専攻
中島宏徳

目次

1 章　序章
1-1　研究背景と目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p.1
1-2　章構成・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p.2
1-3　近世における開放的な内法上装置について・・・・・・・・・・・・・・p.3

2 章　近現代における開放的な内法上装置について
2-1　雑誌資料について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p.5
2-2　分析方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p.6
2-3　室名称・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p.11
2-4　時期（出現、一般化）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p.16
2-5　設計者・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p.20
2-6　小括・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p.41

3 章　開放的な内法上装置の詳細
3-1　分析方法 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p.44
3-2　天井・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p.46
3-2-1　天井（廻縁ナシ）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p.46
3-2-2　天井（目地連続）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p.48
3-2-3　天井（その他）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p.53
3-3　小壁・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p.54
3-3-1　小壁（ナシ）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p.54
3-3-2　小壁（アリ下端）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p.57
3-3-2　小壁（アリ上端、構造体）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p.59
3-4　吊束ナシ（鉄材）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p.61
3-5　建具 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p.67
3-5-1　建具（ナシ）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p.67
3-5-2　建具（ガラス）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p.69
3-6　記述分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p.74
3-6-1　空間・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p.77
3-6-2　天井・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p.79
3-6-3　吊束・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p.82
3-6-4　建具・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p.84
3-7　小括・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p.87

4 章　　結論・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p.90

5 章　　資料・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p.93

第１章　　序章

1-1　研究背景と目的
1-2　章構成
1-3　近世における開放的な内法上装置について

1章　序章

1-1　　研究背景と目的

近代和風建築については、1980 年代から各都道府県において「近代和風建築総合調査」が行われ、大きな成果を上げてきた。しかし、「近代」という用語が指すように、それは明治期から昭和戦前期までを対象としたものであり、昭和戦後期に建設された和風建築については、未だ検討の余地を多く残している。本研究では、そうした戦後期の和風建築の実態や、戦前期から戦後期にかけての変化を探ることを目的として、対象を和室空間の内法上装置に絞って分析を試みた。内法上装置に注目したのは、戦後の和室空間の変化を象徴するのが、天井面の連続性にあると考えたからだ。

ここで、内法上装置とは、図 1-1 に示す長押や鴨居上の部分を指す用語である。上の写真は長押や吊束があり、小壁や薄板を用いた欄間があり、座敷間はここで一旦途切れる。しかし、昭和戦後期の雑誌資料を概観すると、下の写真に示すように、長押がなく、吊束も細い鉄材を用いて天井面が隣室と連続するような、極めて「開放的な内法上装置」が数多く見られるようになる。

そこで本研究では、こうした潮流を端的に把握するために、雑誌『新建築』『建築文化』を資料として分析を行う。

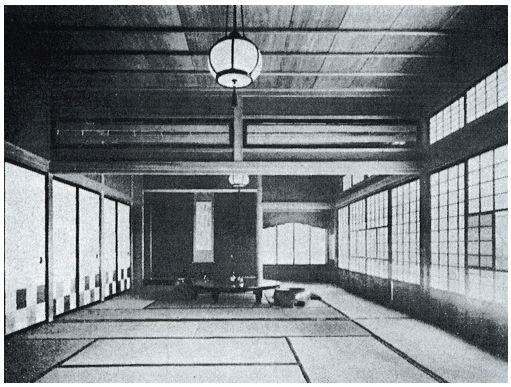
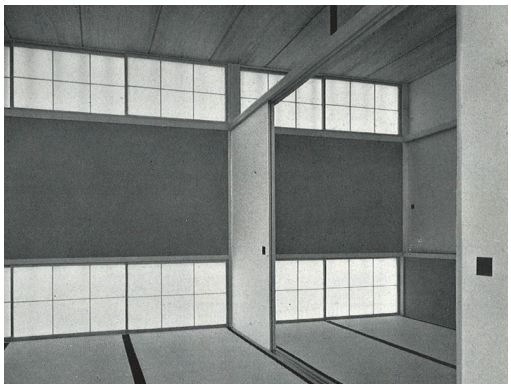


図 1-1　伝統的な内法上装置の例



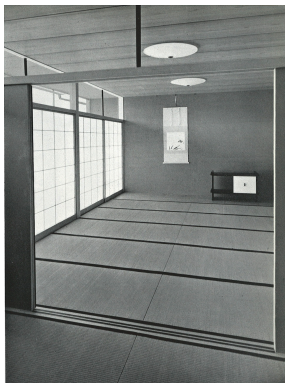


図 2-2　現代の内法上装置の例

1-2　　章構成

本論ではまず、近現代の内法上装置の基礎となる近世までの日本建築において、開放的な内法上装置が存在したのか、存在したとすれば、それはどのようなものであったかを先行研究や文献等で整理する。それを踏まえ本研究では、2 章から近現代における開放的な内法上装置についてその発生時期や一般化した時期について明らかにする。内法上を開放的に扱うと、鴨居が垂れ下がるなど、大きな問題が生じ、それなりの工夫が必要になる。そこで、3 章では、開放的な内法上装置を実現するための細部を確認する。最後に 4 章では、近世と近代の開放的な内法上装置の違い、近現代を通した内法上装置の変化についてまとめる。

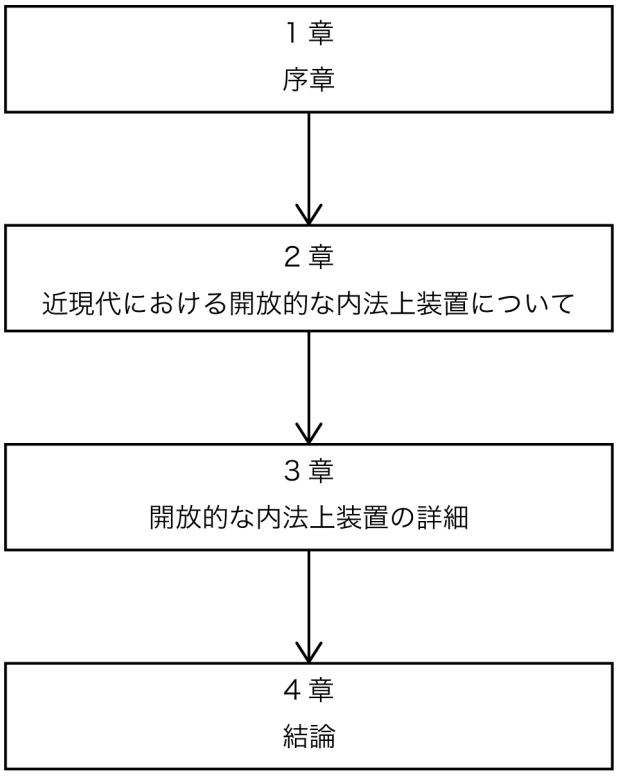


図 1-3　章構成

1-3　　近世における開放的な内法上装置について

それではまず近世までの日本建築でみられる、開放的な内法上装置の特徴を確認する。図 1-4 で示すように、近世の内法上では、そのほとんどが小壁で埋められ、閉鎖的な空間となっている。その中でみられた開放的な内法上をみる。

図 1-5 は、18 世紀に建設された旧工藤家住宅である。一般に古い民家は天井を貼らず、座敷の発生などと連動して徐々に天井が導入されるようになる。このように、古い民家の内法上は、天井がないため小屋組も見えた開放的な空間になることがわかる。図 1-6 は、桂離宮の笑意軒である。ここでは全ての居室で竿縁天井が貼られていることがわかる。内法上は鴨居を支えるために中央に吊束があるが、同じように内法上が抜けた開放的な意匠を持っている。

図 3-4　修学院離宮,楽只軒

図 1-5　旧工藤家住宅

図 1-5　桂離宮 笑意軒

内法上装置を扱った研究として、東京藝術大学の光井渉らによる論文がある。ここでは、17 世紀までに建設された書院造建築や方丈建築の空間、特に内部の室がどのように連続、分断しているのかを、内法上装置と天井に着目して分析している。内法上は行動を直接規制しないことで、複数の室を空間的・意識的に連続させる存在である。分析によって、こうして作られる室の並びは、座敷飾りを有する室を上位とした空間的な上下関係を有していることが確認できた。また、そこで使用される内法上装置は、座敷飾りを持つ室を最上位として、隣接する室は近い位置から、落し掛け－彫刻欄間－筬欄間－竹の節欄間、という階層ができる傾向があることが確認できた。図は、近世の方丈建築として玉林院の平面図と写真である。これをみると、まず天井は竿縁天井が隣室ともに連続して貼られていることがわかる。鴨居は中央で吊束によって支えられ、竹の節欄間を置かれた開放的な内法上空間が作られていることがわかる。

このように近世では、内法上装置を開放的に扱った作品はわずかであり、その中で開放的な内法上装置は、様式や構造、材料による制約があることがわかる。

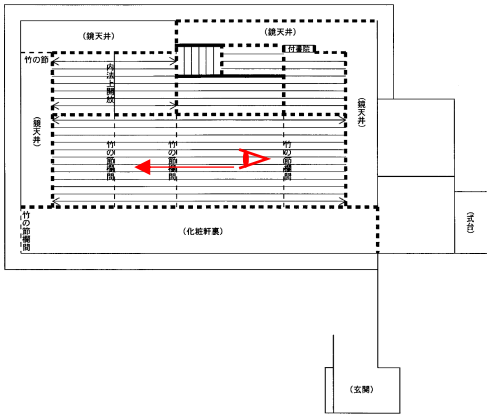


図 1-6　玉林院 本堂、1621 年

第 2 章　　近現代における開放的な内法上装置について

2-1　雑誌資料について
2-2　分析方法
2-3　室名称
2-4　時期
2-5　設計者
2-6　小括

2章　　近現代における開放的な内法上装置について

1章では、近世までの日本建築において、内法上装置を開放的に扱った例を確認した。では、近現代の内法上装置は、近世とはどのような違いがあるのか。続いて2章では、近現代の建築物における開放的な内法上装置について、まずその発生時期や一般化した時期について明らかにする。また、内法上装置を開放的に扱った作品の設計者についても確認する。

2-1　　雑誌資料について

本研究の目的は、昭和戦前期から戦後期にかけて内法上にみられる意匠の変化を明らかにすることである。そこでこうした潮流を把握するために、月ごとに刊行される建築雑誌を用いた。

『新建築』は1925年に新建築社によって大阪で刊行された。戦前は1944年の12月まで刊行され、戦後は1946年の1月から再開し現在まで続く。このように戦前から戦後を通して多数の住宅作品を見ることができる雑誌は他になく、今回の対象資料として選定した。また、戦後期の変化をより詳しくみるため『建築文化』を対象作品に加えた。『建築文化』は、戦後1946年に彰国社によって刊行され、2000年まで月刊誌として、2004年12月までは隔月刊として刊行された。

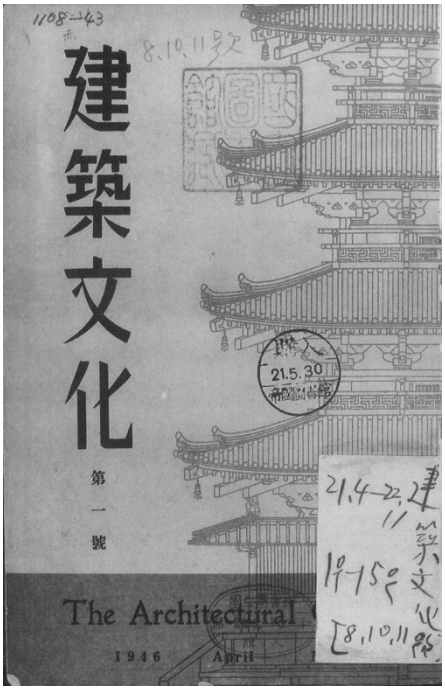


図 2-1：対象資料（左：『新建築』　右：『建築文化』）

2 -2　分析方法

分析する年代の範囲として、戦前は『新建築』が創刊された 1925 年を起点とし 1945 年の終戦までとした。また戦後は、戦前からの流れを把握するため 1945～1960 年代前半を範囲とした。そこで今回は社会的に大きな出来事であった、東京オリンピックの開催された 1964 年までを範囲とした。これより『新建築』では図面および写真が掲載されている住宅作品は 911 作品であることが確認できた。同様に、1946 年に創刊された『建築文化』は 1964 年までに 603 作品の住宅作品が確認できた。ただし、本研究で扱う住宅作品は国内で建設された戸建住宅を対象とし、集合住宅やゲストハウスのように不特定多数が利用する建物については除いた。別荘や山荘についても不特定多数が使用する場合は除いた。また、増築や改築についても除いた。さらに、設計競技による作品のように、掲載時に竣工していない住宅作品についても対象から除いた。これらを母数として、図面または写真から内法上装置の様子が確認できる作品を抽出し、さらにこれを和室である場合に限ると、『新建築』では 297 作品、『建築文化』では 173 作品を得ることができた。本研究では、これら住宅の和室にある内法上装置を対象として分析した。また、本研究で扱う“和室”とは、居室に畳、障子、襖、床の間のいずれかが室内に存在する空間とした。

内法上装置の設置される場所は 2 つに整理できる。まず、座敷と次の間の境界に作られる内法上装置のように、建物内部における室同士の境界に作られるものがある。次に縁側のように建物の外周部に作られる内法上装置がある。これらは設置される環境や性格が異なると考え、それぞれ別に分析することとした。これより、『新建築』では内部にある内法上装置が 261 箇所、外部にある内法上装置が 124 箇所であった。同様に『建築文化』では、内部にある内法上装置が 127 箇所、外部にある内法上装置が 113 箇所であった。

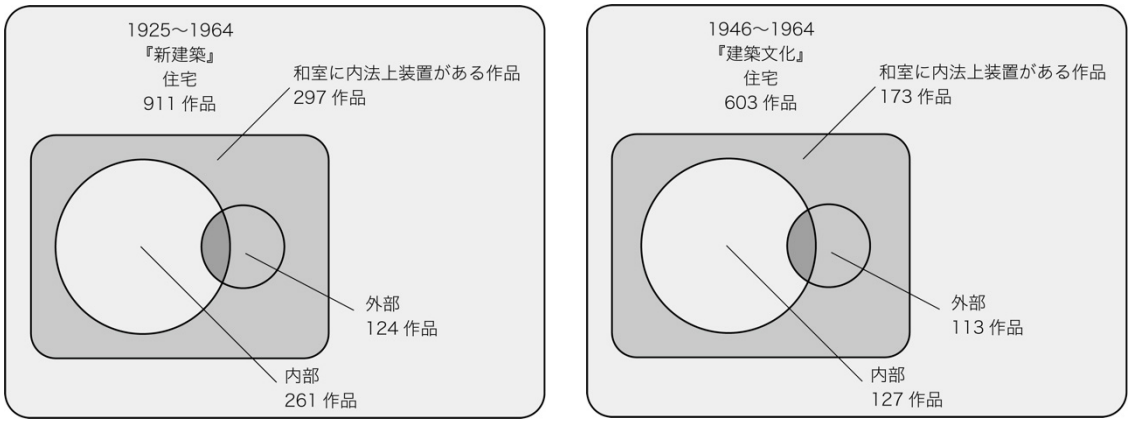


図 2-2：対象作品について左：『新建築』　右：『建築文化』

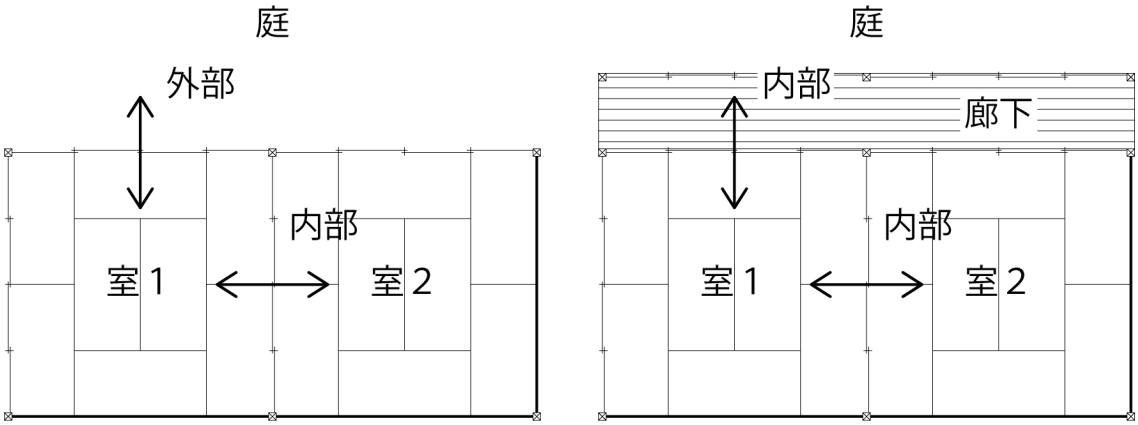


図 2-3：分析する場所

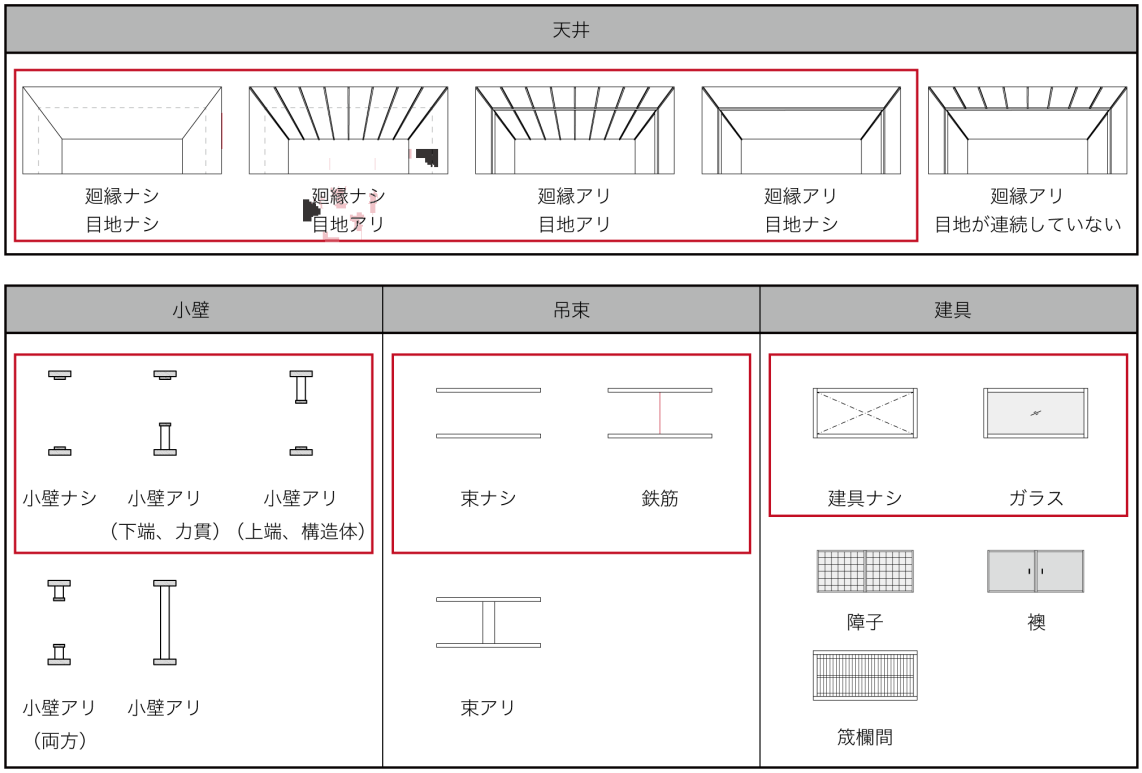


図 2-4：内法上装置の要素

続いて、内法上装置の要素についてみる。伝統的な内法上装置をみると、主に 4 つの要素で構成されていると確認できた。構成要素はそれぞれ天井、小壁、吊束、建具、天井である。図 2-4 は、4 つの要素とその主な意匠を表している。ここで天井は、内法上装置そのものではないが、廻縁の有無や竿縁天井や目透かし天井の連続性を捉えるために要素として加えた。この中で、赤枠で囲われた意匠は、各要素が省略あるいは連続性を強調するような意匠であることが確認できる。これらの要素の組み合わせによってどのような内法上装置が構成されるのか。いくつかの例を示す。

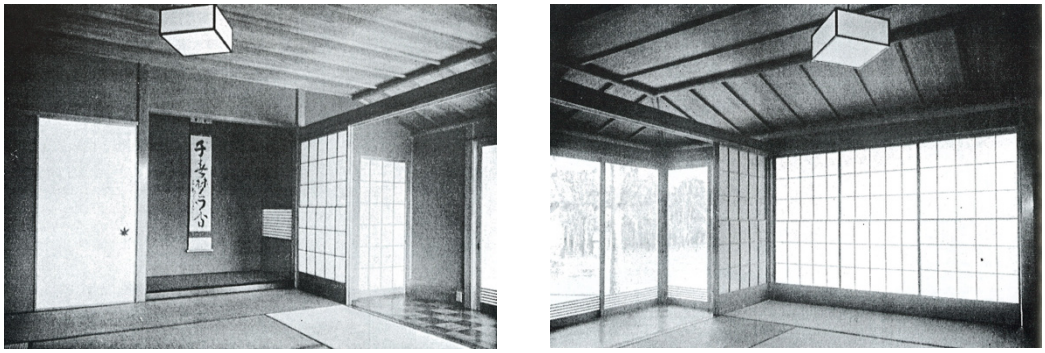
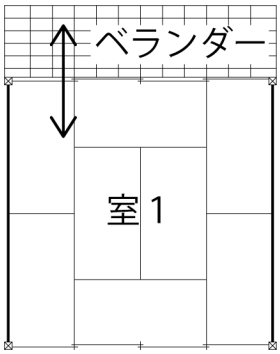


図 2-5：開放的な内法上装置の例

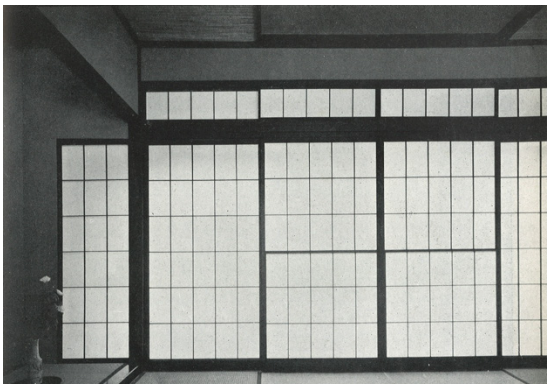
	省略化	備考欄
天井	●	竿縁が連続する
小壁	●	小壁がなく、下端に力貫があるのみ
吊束	●	力貫によって吊束を省略する
建具	●	建具がなく、抜けている

2-6：各要素の省略状況



2-7：内法上装置の位置

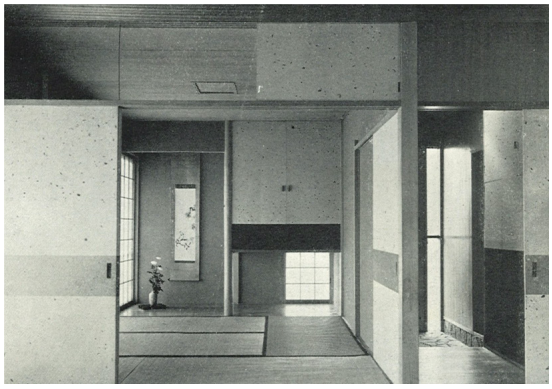
図 2-5 は吉田五十八による山口画伯邸の客間からベランダを見た写真である。この部分の内法上をみると、力貫を置くことで吊束を省略し、さらに上部の建具の省略や竿縁を連続させていることがわかる。これより、山口画伯邸の内法上装置は 4 つの要素全てに省略化の傾向がみられることが分かる。さらに、2 つの作品をみる。図 2-8 は吉家光夫による老夫婦の家の内法上装置とその要素ごとの省略状況である。図 2-10 は双栗舎建築事務所による A.A 氏邸の内法上装置とその要素ごとの省略状況である。老夫婦の家では小壁があり、天井の連続性はみられず建具も障子となっている。それに対して、A.A 邸をみると、小壁は全くなく、吊束が細い鉄材に代わり、内法上が開放的に扱われている。このように内法上の要素のうち少なくとも 2 つ省略されていれば内法上は開放的な意匠にみえることがわかる。そこで内法上装置の要素が 2 以上省略されたものを“開放的な内法上装置”とし、各部の省略箇所から内法上装置の変化を分析することとした。



2-8：開放的な内法上装置の例

	省略・連続	備考欄
天井	×	
小壁	×	
吊束	●	吊束がみられない
建具	×	

2-9：各要素の省略状況



2-10：開放的な内法上装置の例

	省略化	備考欄
天井	×	
小壁	●	小壁が全く無い
吊束	●	鉄材の吊束が使われている
建具	×	

2-11：各要素の省略状況

2-3　室名称

まず、内法上装置が建物のどこにあるのかを把握するために、室名称による分析を行う。対象作品は、建物の内部に着目し、外部に隣接しない内法上装置とした。室名称は平面図または掲載写真の説明文から収集した。次に、これらの室名称を次の 6 つの群、家族団らん系、通路系、玄関、接客系、水回り、私室系に分類した。ここで“和室”や“8 帖”、“板の間”といった室名称は、雑誌中の説明文から家族団らん系または接客系、私室系のいずれかに分類した。ただし説明文から判断できない室名称は“和室（不明）”のように不明なグループとして分類した。さらに、室名称が“居間兼食堂”や“居間寝室”、“居間兼応接”など兼用を表した室名称の場合は対象作品から除いた。また、稽古場、椅子場、予備室、納戸など 6 つの群に分類できないものも対象作品から除いた。なお、隣接する 2 室のどちらかが本論で定義する和室であれば分析対象としている。

図 2-12 は、『新建築』において内法上装置がどの室の間にあるのかを示したものである。内法上装置がある隣室同士は線で結んでいる。線の太さは、組み合わせの数量を表している。さらに、図 2-13 は『新建築』において要素の省略数が 2 以上の内法上装置がどの室の間にあるのかを示したものである。

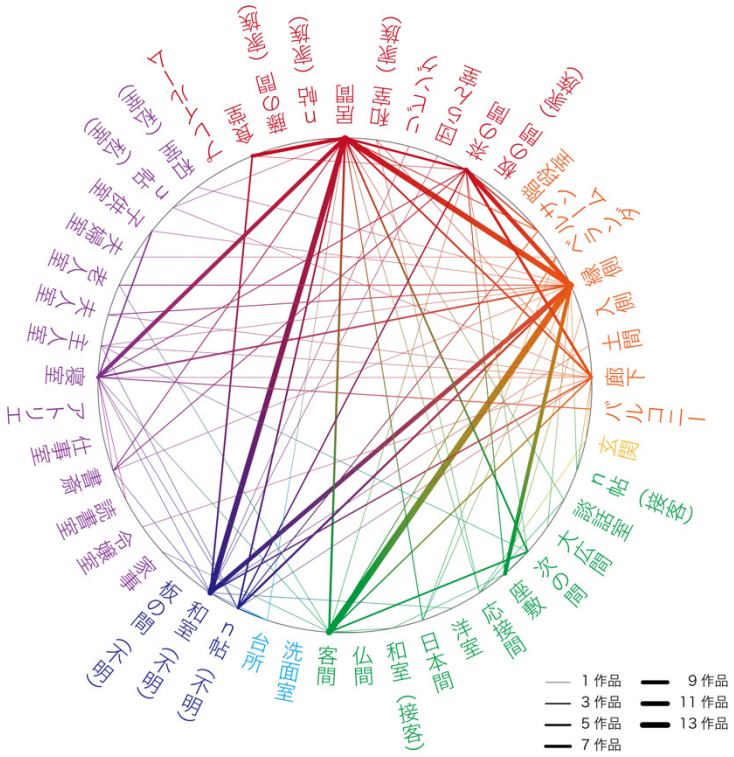


図 2-12：内法上装置のある室の関係図（新建築）

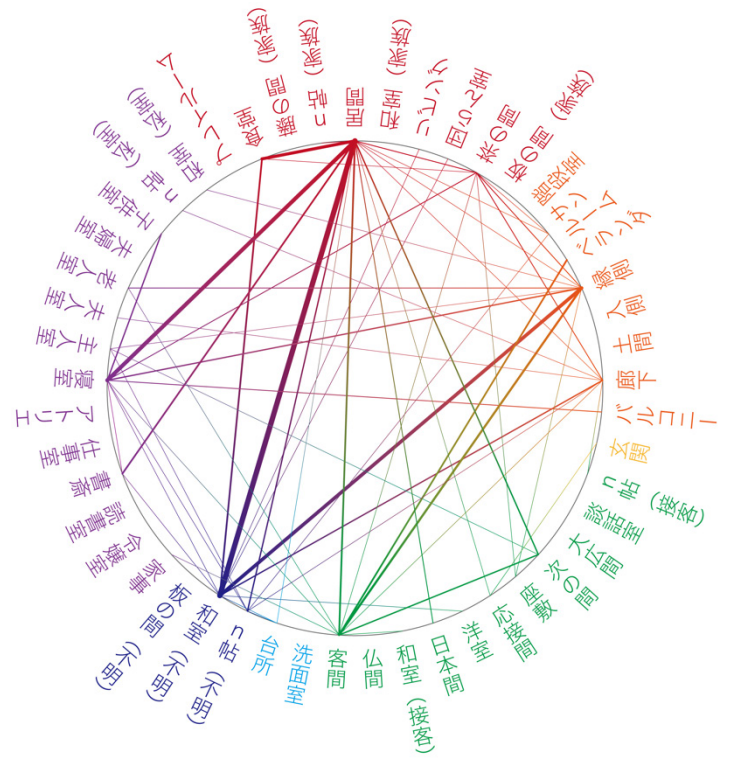


図 2-13：要素の省略数 2 以上の内法上装置のある室の関係図（新建築）

まず図 2-12 を見ると、『新建築』では、通路系に隣接する居室との境界に内法上装置が多くみられることがわかる。その中で、家族団らん系の居間や茶の間、接客系の客間や和室で数多くみられる。また、家族団らん系の居間においても、縁側の他に接客系の客間や次の間、私室系の寝室、また和室（不明）と隣接する居室との境界で内法上装置が多くあることがわかる。私室系に隣接する内法上装置は他の郡に比べると少ないが、寝室と居間が隣接する居室との境界で内法上装置が数多くみられる。

続いて、開放的な内法上装置がみられる場所として図 2-13 をみる。通路系との境界では、多くの居室との境界でみられるものの、図 2-12 から大きく減少していることがわかる。この中で、家族団らんの居間と隣接する居室との境界では数多くの開放的な内法上装置をみることができる。

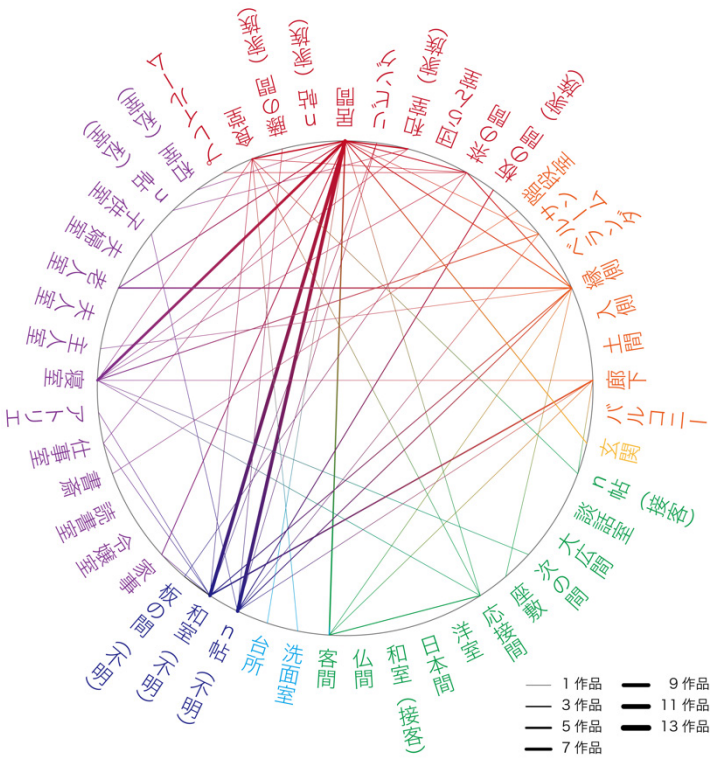


図 2-14：内法上装置のある室の関係図（建築文化）

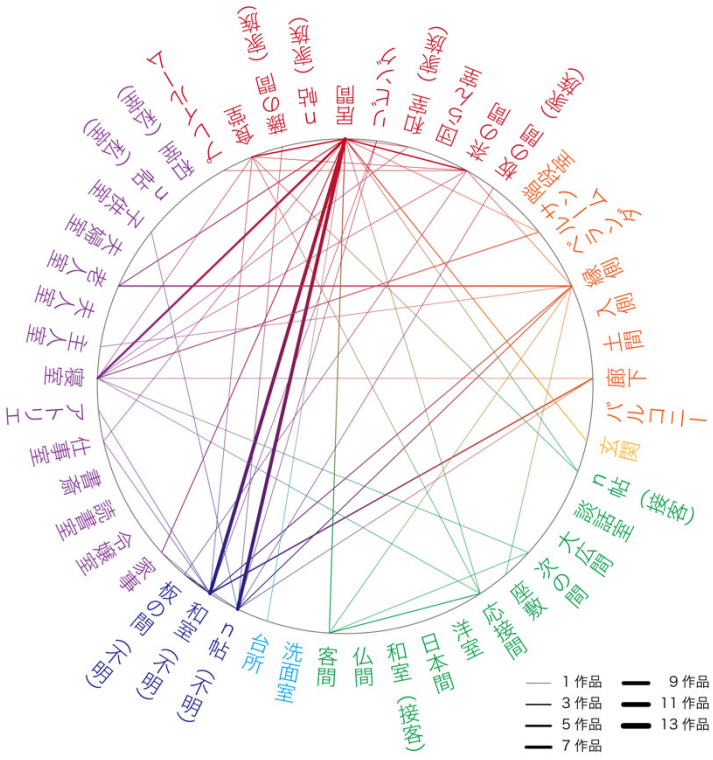


図 2-15：要素の省略数 2 以上の内法上装置のある室の関係図（建築文化）

次に雑誌を『建築文化』にして同様の分析を行う。

図 2-14 は、内法上装置がどの室の間にあるのかを示したものである。内法上装置がある隣室同士は線で結んでいる。線の太さは、組み合わせの数量を表している。さらに、図 2-15 は要素の省略数が 2 以上の内法上装置がどの室の間にあるのかを示したものである。

まず図 2-14 をみると、家族団らん系の居間との境界で内法上装置が数多くみられることがわかる。その中で、接客系の客間、私室系の寝室、その他和室（不明)、n 帖（不明）との境界で内法上装置が数多くみられる。

続いて、開放的な内法上装置がみられる場所として図 2-15 をみる。図 2-14 と比較してわずかに減少した場所もみられるが、居間と隣接する境界で開放的な内法上装置が数多くみられることがわかる。

2-4　　時期（出現、一般化）

前節では、室名称から内法上装置が建物内部のどこにあるのかを確認した。続いては、内法上にある 4 つの要素の組み合わせが時間軸でどのように現れるかを確認する。そこでまず要素の省略が 2 以上の内法上装置を“開放的な内法上装置”として扱い、1 以下の作品と分けた。図 2-16 は要素の省略数ごとにみられる意匠の例を示している。図 2-17 は、『新建築』における建物内部にある内法上装置について、年ごとに要素の省略数が 1 以下と 2 以上の作品の割合をみた。図は横軸が年、縦軸は割合を示している。

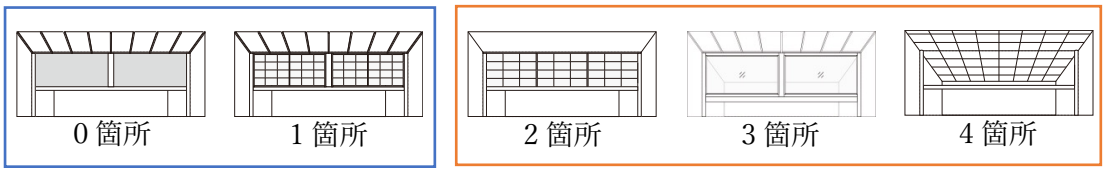


図 2-16：要素の省略箇所ごとにみられる意匠の例

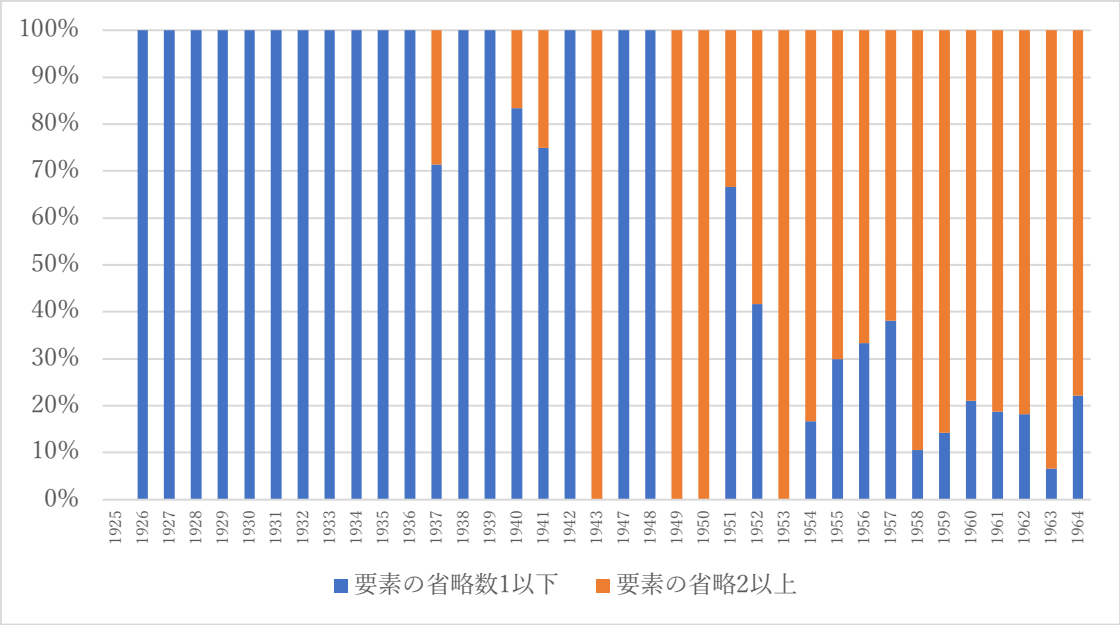


図 2-17：内部空間の要素の省略化傾向（新建築）

図より、昭和戦前には青色で示された要素の省略数が 1 以下の作品が一般的である。これに対して、戦後はオレンジ色で示された要素の省略数が 2 以上の作品の割合が高くなっていくことがわかる。また、要素の省略数が 2 以上の作品は、1937 年にはじめて見ることができる。特に 1940 年から続けて作品が見られる。戦後は、1949 年から要素の省略数が 2 以上の作品を見ることができ、徐々にその割合が高くなっていくことがわかる。

次に外部空間の省略化傾向について同様に分析を行った。図 2-18 は、『新建築』における建物外部にある内法上装置について、要素の省略数を 1 以下と 2 以上に分けて年ごとの割合をみた。

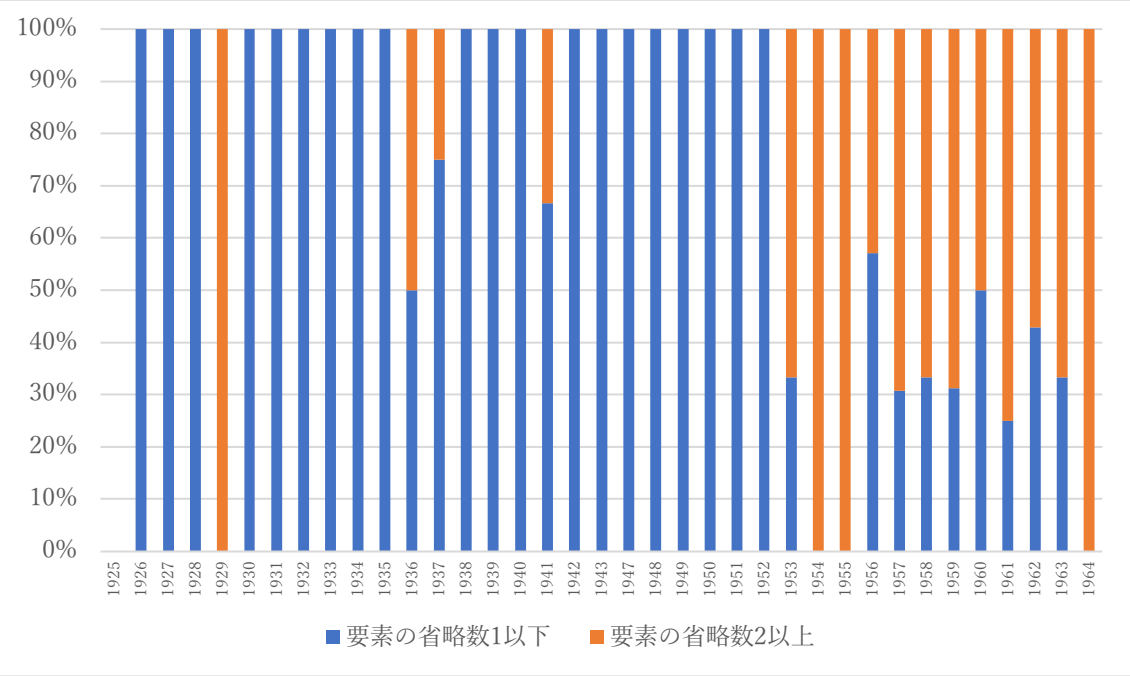


図 2-18：外部空間の要素の省略化傾向（新建築）

図 2-18 より、昭和戦前には青色で示された要素の省略数が 1 以下の作品が一般的である。これに対して、戦後はオレンジ色で示された要素の省略数が 2 以上の作品の割合が高くなっていくことがわかる。また、要素の省略数が 2 以上の作品は、1929 年にはじめて見ることができる。特に 1936 年から続けて作品が見られる。戦後は、1953 年から要素の省略数が 2 以上の作品を見ることができる。

ここで、先に示した内部空間の内法上装置の省略か傾向と比べると、戦後の要素の省略数が 2 以上の作品の割合が内部空間の方が高いことがわかる。また、戦後の要素の省略数が 2 以上の作品の発生時期も内部の方が外部よりも早いことがわかる。

続いて、『建築文化』でも同様に分析を行なった。図 2-19 は、『建築文化』における建物内部にある内法上装置について、要素の省略数を 1 以下と 2 以上に分けて年ごとの割合をみた。

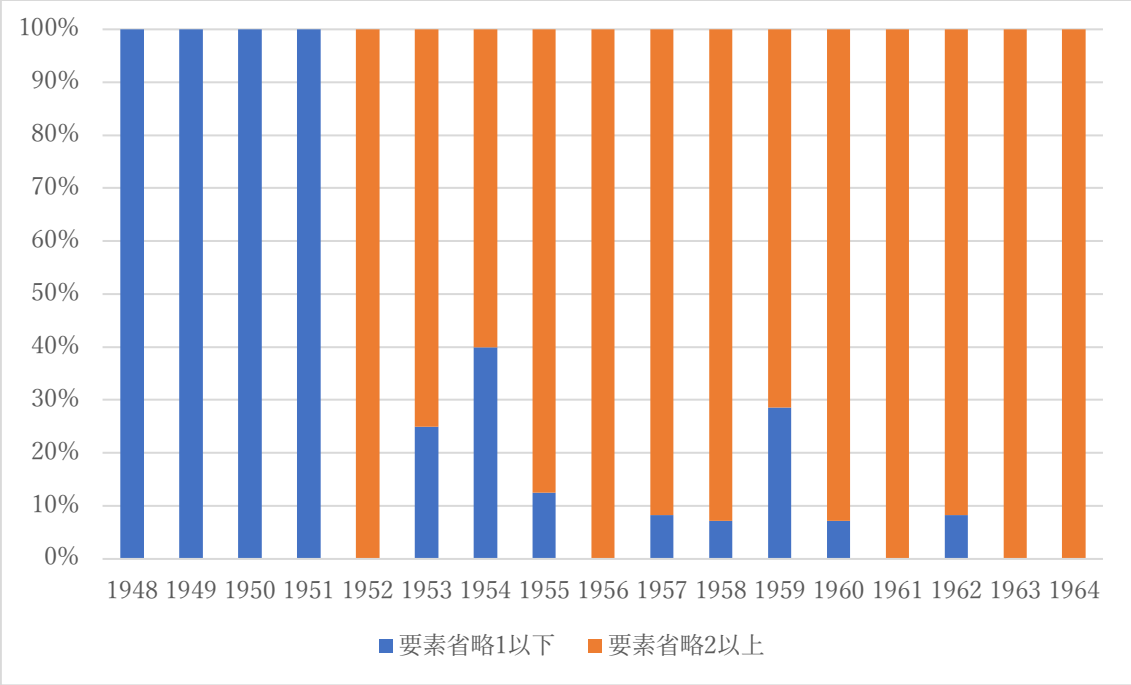


図 2-19：内部空間の要素の省略化傾向（建築文化）

図より、戦後はオレンジ色で示された要素の省略数が 2 以上の作品が一般的であることがわかる。また、要素の省略数が 2 以上の作品は、1952 年にはじめて見ることができる。

次に外部空間の省略化傾向について同様に分析を行った。図 2-20 は、『建築文化』における建物外部にある内法上装置について、要素の省略数を 1 以下と 2 以上に分けて年ごとの割合をみた。

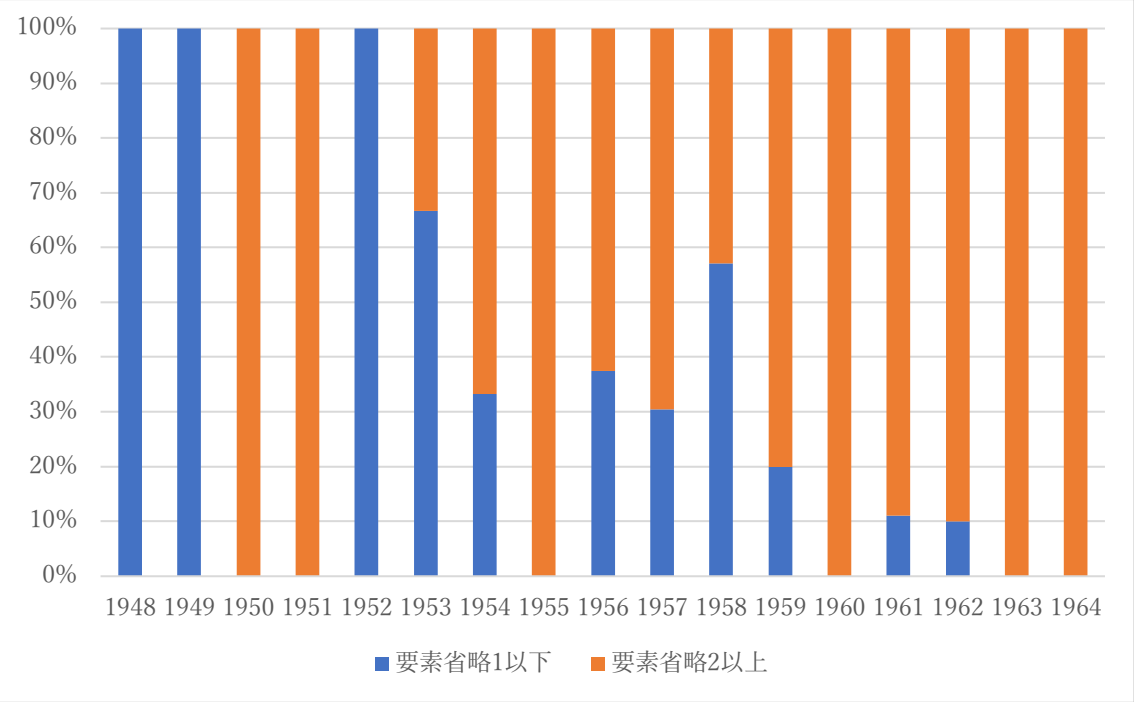


図 2-20：外部空間の要素の省略化傾向（建築文化）

図より、戦後はオレンジ色で示された要素の省略数が 2 以上の作品が一般的であることがわかる。また、要素の省略数が 2 以上の作品は、1950 年にはじめて見ることができる。

ここで、先に示した内部空間の内法上装置の省略化傾向と比べると、戦後の要素の省略数が 2 以上の作品の割合は内部空間の方が高いことがわかる。また、戦後の要素の省略数が 2 以上の作品は同じくらいに発生していることがわかる。

2-5　設計者

前節では、開放的な内法上装置の発生時期と一般化する時期について確認することができた。では、このような要素を省略化した内法上装置は誰によって設計されたのか。続いて、要素の省略された内法上装置を設計者について分析する。

まず、内法上装置の中から要素の省略数が 2 以上の“開放的な内法上装置”を取り出した。続いて雑誌からそれらの設計者を収集した。図 2-21 は、『新建築』における内部の内法上装置のうち要素の省略数が 2 以上の作品を設計者ごとに見た。横軸は年、縦軸は設計者を表している。設計者は掲載作品数の多い者から順に表している。図中の数字は、作品数を表している。ここで、それぞれの作品の中には複数の内法上装置をもつ場合がある。この分析では作品の中で 1 箇所でも要素の省略数が 2 以上の内法上装置があれば該当する作品として加えている。

設計者〈内部〉	1925			1937	1938	1939	1940	1941	1942	1943	1947	1948	1949	1950	1951	1952	1953	1954	1955	1956	1957	1958	1959	1960	1961	1962	1963	1964
大熊喜英																		1	1		1		1			2		
清家清															1	1	1					1	0			1	1	
田中清																						1	2	1				
彦谷建築設計事務所																							1	1			1	1
吉田五十八							1	1		1											1							
篠原一男																							2		1			
大林組																						1			1		1	
柳英男																		1	1		1							
池亀建築設計事務所																						1		1	1			
坂倉準三建築事務所																						1		1	1			
佐倉大有																2			1									
奈良信建築設計事務所																					1	1			1			
信建築事務所																							1		1			
大成建設																									1	1		
阿久井喜孝																											1	1
深谷浩一																							1				1	
船越徹																						1		1				
三橋真三																						1		1				
RIA建築綜合研究所																			1						1			
稲田建築設計研究所																					1		1					
臼倉健之																					1		1					
創和建築設計事務所																							1					
中村建築研究所																			2									
レーモンド建築事務所				1													1											
吉村順三設計事務所																							1					
子安晴彦																						1						
東畑建築事務所																											1	
INA新建築研究所																												1
池上彰一																								1				
高菅晋																							1					
高瀬隼彦																											1	
武基雄研究室																				1								
谷口吉郎																						1						
永松亘																		1										
藤本武男																											1	
山脇建築研究室																									1			
沖種夫																	1											
伴弘好																					1							
芦原義信建築設計研究所																				1								
網戸武夫				1																								
安東勝男																				1								

図 2-21：内部空間の要素の省略数 2 以上の設計者（新建築）

設計者（内部）	1925		1937	1938	1939	1940	1941	1942	1943	1947	1948	1949	1950	1951	1952	1953	1954	1955	1956	1957	1958	1959	1960	1961	1962	1963	1964
生田勉																					1						
石間桂造																				1							
巌建築事務所																			1								
美建設計事務所																									1		
海老原建築設計事務所																							1				
大江宏研究室																			1								
大島功一																						1					
小川正																			1								
加倉井昭夫建築事務所												1															
笠井由雄																				1							
金子勇次郎																			1								
久米建築設計事務所																					1						
倉田康男																							1				
御端真三																									1		
佐藤秀工務店																							1				
鹿山富士夫																									1		
柴岡亥佐雄建築設計事務所																						1					
清水一																										1	
清水建設株式會社															1												
杉山長道																				1							
台原信																			1								
高矢晋																										1	
竹中工務店																						1					
田村博																1											
丹下健三																		1									
茶谷正洋																									1		
戸尾任宏																				1							
富田陽一郎　梶川一夫															1												
中村登一建築研究所																											1
波多江健郎																						1					
樺沢敏郎																							1				
橋本嘉夫																	1										
長谷川富二郎																											
林雅子																					1						
平子勝																				1							
平松建築事務所																							1				
広瀬鎌二建築事務所																						1					
藤村博英																						1					
不明																											
槇一郎																1											
牧野清設計事務所																								1			

図 2-21：内部空間の要素の省略数 2 以上の設計者（新建築）

設計者（内部）	1925		1937	1938	1939	1940	1941	1942	1943	1947	1948	1949	1950	1951	1952	1953	1954	1955	1956	1957	1958	1959	1960	1961	1962	1963	1964
増沢洵建築設計事務所																					1						
増田友也																											1
水沢工務店																					1						
三苫正光													1														
山口芳泰																			1								
山田水城																			1								
山田雅子															1												
鷲塚建築設計事務所															1												

図 2-21：内部空間の要素の省略数 2 以上の設計者（新建築）

図 2-21 より、要素の省略が 2 以上の作品を設計しているのは、掲載数の多い順に大熊喜英、清家清、田中清、彦谷建築設計事務所、吉田五十八らがあげられる。発生時期の早い作品を見ると、戦前にはアントニン・レーモンド、網戸武夫、吉田五十八らによって設計されていることがわかる。特に吉田は、戦前に 3 つの作品を設計していることがわかる。戦後に最も早くみられるのは、1949 年の加倉井昭夫の作品である。その後、1950 年代になって多くの建築家による作品が見られるようになる。

では、要素の省略数を多くし、より開放的な内法上装置を設計した設計者をみる。図 2-22 は、要素の省略数を 4 箇所ある作品の設計者にして再び年ごとに作品数を表した。図より、要素の省略が 4 箇所の作品を設計しているのは、掲載数の多い順に田中清、吉田五十八、大熊喜英らがあげられる。発生時期の早い作品を見ると、戦前にはアントニン・レーモンド、吉田五十八らによって設計されていることがわかる。特に吉田は、戦前に 3 つの作品を設計していることがわかる。

設計者（内部）	1925		1937	1938	1939	1940	1941	1942	1943	1947	1948	1949	1950	1951	1952	1953	1954	1955	1956	1957	1958	1959	1960	1961	1962	1963	1964
田中清																					1	2	1				
吉田五十八						1	1		1											1							
大熊喜英																		1		1		1					
彦谷建築設計事務所																							1			1	
池亀建築設計事務所																							1	1			
大林組																					1			1			
佐倉大有															2												
清家清																					1				1		
船越徹																					1		1				
レーモンド建築事務所			1													1											
信建築事務所																						1					
武基雄研究室																			1								
谷口吉郎																					1						
藤本武男																										1	
吉村順三設計事務所																						1					
RIA建築綜合研究所																								1			
芦原義信建築設計研究所																			1								
安東勝男																			1								
生田勉																					1						
池上彰一																							1				
石間桂造																				1							
稲田建築設計研究所																						1					
臼倉健之																				1							
美建設計事務所																									1		
大江宏研究室																			1								
大島功一																						1					
小川正																			1								
金子勇次郎																			1								
御端真三																									1		
子安晴彦																					1						
坂倉準三建築事務所																							1				
鹿山富士夫																									1		
篠原一男																						1					
大成建設																									1		
高菅晋																						1					
高矢晋																										1	
竹中工務店																						1					
田村博																1											
丹下健三																		1									
東畑建築事務所																										1	
富田陽一郎　梶川一夫															1												

図 2-22：内部空間の要素の省略数 4 箇所の設計者（新建築）

設計者（内部）	1925		1937	1938	1939	1940	1941	1942	1943	1947	1948	1949	1950	1951	1952	1953	1954	1955	1956	1957	1958	1959	1960	1961	1962	1963	1964
生田勉																					1						
石間桂造																				1							
巌建築事務所																			1								
美建設計事務所																									1		
海老原建築設計事務所																							1				
大江宏研究室																			1								
大島功一																						1					
小川正																			1								
加倉井昭夫建築事務所												1															
笠井由雄																				1							
金子勇次郎																			1								
久米建築設計事務所																					1						
倉田康男																							1				
御端真三																									1		
佐藤秀工務店																							1				
鹿山富士夫																									1		
柴岡亥佐雄建築設計事務所																						1					
清水一																										1	
清水建設株式會社															1												
杉山長道																				1							
台原信																			1								
高矢晋																										1	
竹中工務店																						1					
田村博																1											
丹下健三																		1									
茶谷正洋																									1		
戸尾任宏																				1							
富田陽一郎　梶川一夫															1												
中村登一建築研究所																											1
波多江健郎																						1					
榛沢敏郎																							1				
橋本嘉夫																	1										
長谷川富二郎																											
林雅子																					1						
平子勝																				1							
平松建築事務所																							1				
広瀬鎌二建築事務所																						1					
藤村博英																						1					
不明																											
槇一郎																1											
牧野清設計事務所																								1			

図 2-22：内部空間の要素の省略数 4 箇所の設計者（新建築）

以上より、『新建築』における内部にある開放的な内法上装置について、設計者ごとに確認できた。次に、外部の内法上装置の設計者についても同様に見る。図 2-23 は、『新建築』における外部の内法上装置のうち要素の省略数が 2 以上の作品を設計者ごとに見た。横軸は年、縦軸は設計者を表している。設計者は掲載作品数の多い者から順に表している。図中の数字は、作品数を表している。

図 2-23 より、要素の省略が 2 以上の作品を設計しているのは、掲載数の多い順に竹中工務店、大江修、大熊喜英、坂倉準三らがあげられる。発生時期の早い作品を見ると、戦前には藤井厚二、久米建築設計事務所、RIA 建築設計事務所の山口文象らによって設計されていることがわかる。戦後に最も早くみられるのは、吉村順三、田中清らがあげられる。

設計者（外部）	1925	1929	1936	1937	1938	1939	1940	1941	1942	1943	1947	1948	1949	1950	1951	1952	1953	1954	1955	1956	1957	1958	1959	1960	1961	1962	1963	1964
竹中工務店																							1	1		1		
大江修設計事務所																					1	1						
大熊喜英																										1	1	
坂倉準三建築事務所																					1						1	
船越徹																						1		1				
佐藤秀工務店																							1					
阿久井喜孝																											1	
早大武研究室																									1			
三橋貞三																						1						
MATO同人研究室																										1		
稲田建築設計研究所																							1					
岩本建築事務所																										1		
大江宏																					1							
織田愈史																							1					
久米建築設計事務所			1																									
建築綜合研究所																							1					
齋藤英彦																							1					
鈴木久弥																				1								
曾原國蔵																		1										
田中清																						1						
坪谷熊平								1																				
東京建築設計事務所																					1							
東京工業大学清家研究室																										1		
長倉康彦																					1							
中村建築研究所																									1			
林昌二																					1							
藤井厚二		1																										
藤本武男																											1	
前川國男建築事務所																				1								
増田友也																												1
水沢工務店																									1			
RIA建築綜合研究所				1																								
山梨清松																			1									
山脇建築研究室																								1				
吉村順三																	1											

図 2-23：外部空間の要素の省略数 2 以上の設計者（新建築）

では、要素の省略数を多くし、より開放的な内法上装置を設計した設計者をみる。図 2-24 は、要素の省略数が 4 箇所の作品にして再び年ごとに作品数を表した。図より、要素の省略が 4 箇所の作品を設計しているのは、8 人で掲載数はすべて同じ 1 作品であることがわかる。発生時期を見ると、1958 年にはじめて大江修、田中清、船越徹によって設計されていることがわかる。

設計者（外部）	1925				1936	1937	1938	1939	1940	1941	1942	1943	1947	1948	1949	1950	1951	1952	1953	1954	1955	1956	1957	1958	1959	1960	1961	1962	1963	1964
阿久井喜孝																													1	
大江修設計事務所																								1						
齋藤英彦																									1					
佐藤秀工務店																									1					
田中清																								1						
藤本武男																													1	
船越徹																								1						
水沢工務店																											1			

図 2-24：外部空間の要素の省略数 4 以上の設計者（新建築）

以上より、『新建築』における“開放的な内法上装置”の設計者について確認できた。さらに、『建築文化』についても同様に設計者ごとにみた。図 2-25 は、『建築文化』における内部の内法上装置のうち要素の省略数が 2 以上の作品を設計者ごとに見た。横軸は年、縦軸は設計者を表している。設計者は掲載作品数の多い者から順に表している。図中の数字は、作品数を表している。

設計者（内部）	1948	1949	1950	1951	1952	1953	1954	1955	1956	1957	1958	1959	1960	1961	1962	1963	1964
連合設計社										1		1			2	1	
西川驍							2	1		1				1			
RIA建築総合研究所								1	1		2					1	
吉田五十八									2	1	1		1				
生田勉											1		1			1	
平松建築設計事務所												1			1		1
アントニン・レーモンド					1	1											
清水建設						1		1									
柴田陽三							2										
台原信							1				1						
高田秀三								1	1								
安藤組									1	1							
竹中工務店									1				1				
国方秀男										2							
福田良一										2							
伴弘好										1						1	
柴岡亥佐雄														1			
長倉康彦													1		1		
小川建築設計事務所													1	1			
堀田英二建築設計													1	1			
山田水城建築設計事務所									1					1			
稲田建築設計事務所															1		1
小野薫						1											
内井康夫							1										
丹下健三								1									
T.GOH								1									
半沢重信									1								
山下樹郎設計事務所									1								
佐藤保隆									1								
合田信雄										1							
宮島春樹										1							
森田茂介										1							
関原繁										1							
清瀬永										1							

図 2-25：内部空間の要素の省略数 2 以上の設計者（建築文化）

設計者（内部）	1948	1949	1950	1951	1952	1953	1954	1955	1956	1957	1958	1959	1960	1961	1962	1963	1964
双栗舎建築事務所										1							
上田恒太郎										1							
佐野正一										1							
不明										1							
佐藤武夫設計事務所										1							
現代建築研究所										1							
林昌二											1						
福島勲											1						
土屋勉											1						
坂倉順三建築研究所											1						
大成建設											1						
増沢洵建築設計事務所											1						
石田建築研究所												1					
小林威												1					
山脇巌												1					
森京介建築研究所													1				
永松亘													1				
圓建築設計事務所													1				
有田和夫建築研究所													1				
柳建築設計事務所													1				
日新設計														1			
佐藤仁														1			
佐藤秀工務店															1		
伊藤喜三郎建築研究所															1		
馬場建築事務所																	
余川和夫																	
横河工務所																	
武基雄研究室																	
吉中建築設計事務所																	
中島建築事務所																	
林雅子																	
杉坂建築事務所																	

図 2-25：内部空間の要素の省略数２以上の設計者（建築文化）

図より、要素の省略が 2 以上の作品を設計しているのは、掲載数の多い順に連合設計社、西川驍、RIA 建築総合研究所、吉田五十八、生田勉らがあげられる。発生時期の早い作品を見ると、1952 年にアントニン・レーモンドによって設計されていることがわかる。その後、続けて多くの建築家による作品が見られるようになる。

では、要素の省略数を多くし、より開放的な内法上装置を設計した設計者をみる。図 2-26 は、要素の省略数を 4 箇所ある作品の設計者にして再び年ごとに作品数を表した。図より、要素の省略が 4 箇所の作品を設計しているのは、掲載数の多い順に西川驍、吉田五十八、アントニン・レーモンドらがあげられる。発生時期の早い作品を見ると、1952 年にアントニン・レーモンドによって設計されていることがわかる。その後、続けて多くの建築家による作品が見られるようになる。

設計者（内部）	1948	1949	1950	1951	1952	1953	1954	1955	1956	1957	1958	1959	1960	1961	1962	1963	1964
西川驍								1		1				1			
吉田五十八									1	1			1				
アントニン・レーモンド					1	1											
伴弘好										1						1	
山田水城建築設計事務所									1					1			
高田秀三								1	1								
連合設計社															1	1	
丹下健三								1									
佐藤保隆									1								
合田信雄										1							
宮島春樹										1							
森田茂介										1							
国方秀男										1							
関原繁										1							
福田良一										1							
上田恒太郎										1							
安藤組										1							
RIA建築総合研究所											1						
生田勉											1						
坂倉順三建築研究所											1						
大成建設											1						
増沢洵建築設計事務所											1						
石田建築研究所												1					
小林威												1					
山脇巌												1					
森京介建築研究所													1				
永松亘													1				
有田和夫建築研究所													1				
柴岡亥佐雄														1			
堀田英二建築設計														1			
小川建築設計事務所														1			
武基雄研究室																1	
吉中建築設計事務所																1	
林雅子																1	
稲田建築設計事務所																	1
平松建築設計事務所																	1

図 2-26：内部空間の要素の省略数 4 箇所の設計者（建築文化）

以上より、『建築文化』における内部にある開放的な内法上装置について、設計者ごとに確認できた。次に、外部の内法上装置の設計者についても同様に見る。

図 2-27 は、『建築文化』における外部の内法上装置のうち要素の省略数が 2 以上の作品を設計者ごとに見た。横軸は年、縦軸は設計者を表している。設計者は掲載作品数の多い者から順に表している。図中の数字は、作品数を表している。

図より、要素の省略が 2 以上の作品を設計しているのは、掲載数の多い順に西川驍、連合設計社、福田良一らがあげられる。発生時期の早い作品を見ると、1950 年に佐藤武夫によって設計されていることがわかる。その後、続けて多くの建築家による作品が見られるようになる。

設計者（外部）	1948	1949	1950	1951	1952	1953	1954	1955	1956	1957	1958	1959	1960	1961	1962	1963	1964
西川驍								1		1			1	1		1	
連合設計社										1	1				2		
福田良一							1			2				1			
長倉康彦										1	1		2				
山田水城建築設計事務所									1					1	1		
福永建築設計事務所				1				1									
坂倉順三建築研究所										1						1	
大江宏										1				1			
生田勉													1			1	
GAD設計事務所																	2
堀田英二建築設計														1			
日新設計														1			
菊竹清則																	1
伴弘好																1	
横河工務所																1	
森田茂介										1							
村田政眞建築設計事務所							1										
宮本忠長								1									
堀口捨巳										1							
不明										1							
船越徹															1		
平松建築設計事務所																	1
半沢重信										1							
林雅子																1	
馬場建築事務所									0						1		
榛沢敏郎									1								
中島建築事務所																1	
都市建築研究所								1									
丹下健三								1									
武基雄研究室																1	
滝沢健児															1		
高田秀三							1										
大成建設															1		

図 2-27：外部空間の要素の省略数 2 以上の設計者（建築文化）

設計者（外部）	1948	1949	1950	1951	1952	1953	1954	1955	1956	1957	1958	1959	1960	1961	1962	1963	1964
創和建築設計事務所																	1
関原繁										1							
鈴木伸一																1	
図師嘉彦								1									
杉坂建築事務所												1					
柴田陽三												1					
佐藤武夫			1														
佐藤仁														1			
佐藤武夫設計事務所										1							
佐藤秀工務店															1		
齋藤英彦													1				
小林威												1					
現代建築研究所											1						
国方秀男										1							
加倉井昭夫									1								
小野薫						1											
岡田哲郎建築設計事務所									1								
太田利彦																1	
大江修設計事務所														1			
海田昌則									1								
内井康夫							1										
稲田建築設計事務所																	1
石田建築研究所												1					
石塚組								1									
有田和夫建築研究所																1	
網戸建築設計事務所														1			
阿久井喜孝													1				
合田信雄										1							
T.GOH								1									
RIA建築総合研究所																1	
I.N.A.新建築研究所													1				
圓建築設計事務所													1				

図 2-27：外部空間の要素の省略数 2 以上の設計者（建築文化）

では、要素の省略数を多くし、より開放的な内法上装置を設計した設計者をみる。図 2-28 は、要素の省略数を 4 箇所ある作品の設計者にして再び年ごとに作品数を表した。図より、要素の省略が 4 箇所の作品を設計しているのは、山田水城建築設計事務所が 2 作品あり、残り 12 人が 1 作品であることがわかる。発生時期を見ると、1955 年に図師嘉彦、丹下健三によって設計されていることがわかる。

設計者（外部）	1948	1949	1950	1951	1952	1953	1954	1955	1956	1957	1958	1959	1960	1961	1962	1963	1964
山田水城建築設計事務所														1	1		
合田信雄										1							
阿久井喜孝													1				
生田勉													1				
佐藤武夫設計事務所										1							
図師嘉彦								1									
武基雄研究室																1	
丹下健三								1									
長倉康彦													1				
中島建築事務所																1	
西川驍													1				
榛沢敏郎									1								
林雅子																1	

図 2-28：外部空間の要素の省略数 4 以上の設計者（建築文化）

2-6　小括

以上より、3 章では近現代の建築物における開放的な内法上装置について、その発生時期や一般化した時期について明らかにすることができた。まずその設置される場所について確認すると、『新建築』では居間や客間、寝室といった居室の他、これらを繋ぐ通路として縁側との境界で数多くの開放的な内法上装置をみるとこができた。『建築文化』では、居間を中心として数多くの開放的な内法上装置をみるとこができた。つまり、内法上を開放的に扱うことで、家族の空間を開放的に扱うことがわかる。またそれに伴い、隣接する居室も開放的に扱うことがわかる。

続いて開放的な内法上装置が発生する時期と一般化した時期について確認した。要素の省略箇所が 2 以上の開放的な内法上装置は、『新建築』において戦前にわずかにみられることがわかった。それらが戦後 1950 年あたりになると作品数が増加し、一般的な意匠になることがわかる。『建築文化』についても同様に、戦後 1950 年を超えると、開放的な内法上装置の作品数が増加し一般的な意匠になることがわかる。

さいごこれら開放的な内法上装置の設計者を確認すると、戦前は、吉田五十八、アントニン・レーモンドらによって設計されていることが確認できた。また、戦後は数多くの建築家によって設計されていることが確認できた。

つまり、開放的な内法上装置は戦前にはわずかしかみられず、戦後 1950 年頃から一般化していく。それらを牽引したのは吉田五十八とアントニン・レーモンドである。

	戦前	戦後
内部	吉田五十八 アントニン・レーモンド 網戸武夫	大熊喜英、清家清、田中清、吉田五十八 彦谷建築、篠原一男、坂倉準三、柳英男 大林組、池亀建築、佐倉大有
外部	久米建築、藤井厚二 山口文象、坪谷熊平	竹中工務店、大江修建築、大熊喜英、 坂倉準三、船越徹、佐藤秀工務店 阿久井喜孝、早大武研究室

図 2-29：開放的な内法上装置の主な設計者（新建築）

	戦後
内部	連合設計社、西川驍、RIA、吉田五十八 生田勉、平松建築、清水建設、柴田陽三 アントニン・レーモンド
外部	西川驍、連合設計社、福田良一、長倉康彦 山田水城設計、福永建築、坂倉準三 大江宏、生田勉

図 2-30：開放的な内法上装置の主な設計者（建築文化）

第 3 章　　開放的な内法上装置の詳細

3-1　　分析方法
3-2　　天井
　3-2-1　　天井（廻縁ナシ）
　3-2-2　　天井（目地連続）
　3-2-3　　天井（その他）
3-3　　小壁
　3-3-1　　小壁（ナシ）
　3-3-2　　小壁（アリ下端）
　3-3-2　小壁（アリ上端、構造体）
3-4　　吊束ナシ（鉄材）
3-5　　建具
　3-5-1　　建具（ナシ）
　3-5-2　　建具（ガラス）
3-6　　記述分析
　3-6-1　　空間
　3-6-2　　天井
　3-6-3　　吊束
　3-6-4　　建具
3-7　　小括

3 章　　開放的な内法上装置の詳細

前章より、開放的な内法上装置の発生時期や一般化した時期、その設計者について明らかとなった。図 3-1 は、雑誌ごとに内法上における各要素の省略化がみられた作品の数量をあらわしている。ここで各要素をみると、材料の違いや素材の有無でさらに細かくみることができる。図 3-2 では、それらの意匠の例を示している。このように、開放的な内法上装置は、作品ごとに異なった意匠を持つことがわかる。3 章では、詳細図および写真を用いて内法上装置を開放的に扱った作品の詳細についてみる。また、それらの設計意図として記載されている作品解説についても確認する。

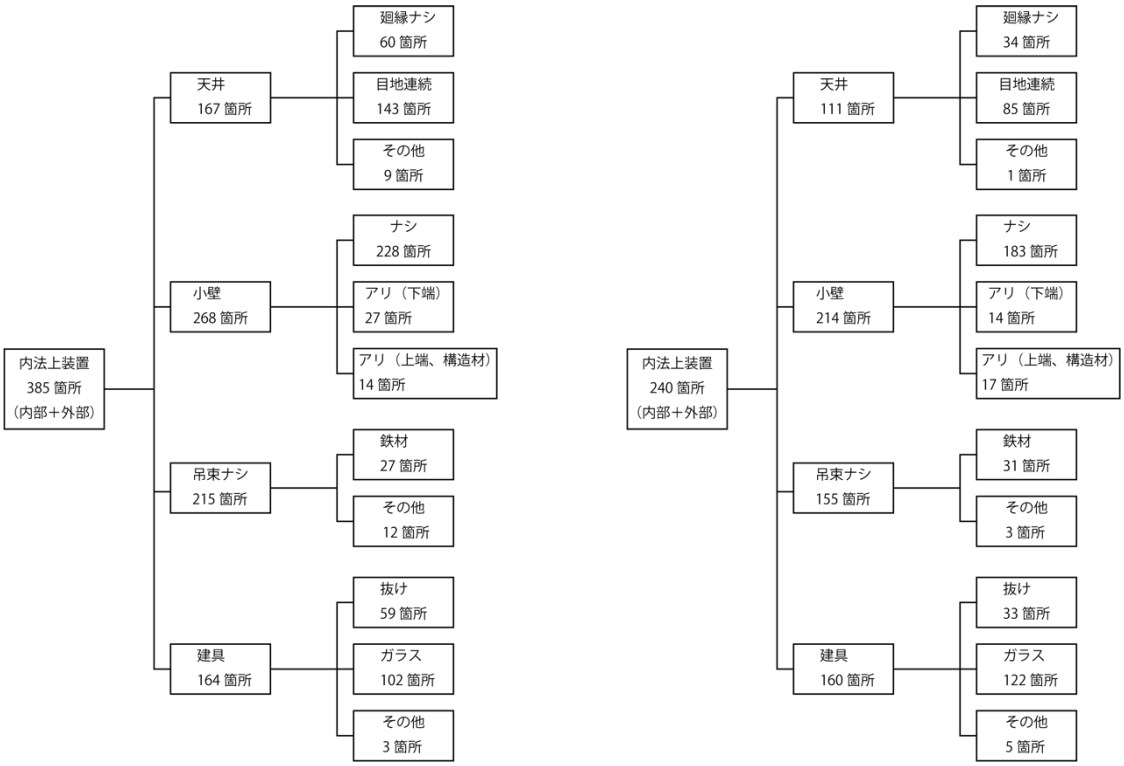


図 3-1：　要素ごとにみる省略化がみられる作品の数量（左：『新建築』　右：『建築文化』）

図 3-2： 要素が省略した内法上装置の例

3-1　　分析方法

まず、対象作品の中から内法上装置に関する詳細図及び内法上装置に関する記述がみられる作品を抽出する。表 3-1 および表 3-2 は、それぞれ『新建築』『建築文化』において詳細図のある作品および記述の見られる作品のリストである。3 章ではこれらの詳細図と記述から内法上の意匠を詳細にみる。ここで詳細図のある開放的な内法上装置をみると、内法上を開放的に扱った意匠は 3 つの項目にわけることができる。

それらは、要素が省略するもの、内法上の要素が他の装置に代用するもの、そして要素が追加するものである。詳細図分析では、各詳細をこれらの項目に分けながら、各要素の材料や寸法、吊束や建具の取り付け位置やその方法について確認する。記述分析では、詳細図分析で確認できなかった内法上の材料や寸法について確認する。また、内法上を開放的に扱う意図やその背景について確認する。各節は図 3-1 の要素ごとに確認する。

表 3-1：内法上に関する詳細図及び記述のある作品リスト（新建築）

番号	出版年		作品名	設計者	内法上の詳細図	内法上に関する記述
	西暦	月				
1	1937	8	小林氏邸	山口蚊象	●	
2	1941	1	山口書伯邸	吉田五十八		●
3	1951	9	森博士の家	清家清		●
4	1952	8	K氏邸	清水建設株式會社		●
5	1952	10	O氏邸	佐倉大有		●
6	1953	4	S氏邸	槇一郎		●
7	1953	7	齋藤邸	沖種夫		●
8	1953	7	ブロワー邸	レーモンド建築事務所	●	●
9	1953	9	三人姉妹の家	稲田尚之		●
10	1953	11	木造試作小住宅	田村博	●	
11	1955	1	住居	丹下健三		●
12	1955	7	PSコンクリート梁を用いた家	柳英男	●	
13	1956	6	T型平面の家	武基雄研究室	●	
14	1956	6	川端の家	安東勝男	●	
15	1957	4	丘の斜面にたつ家	伴弘好		●
16	1958	8	Fさんの家	増沢洵建築設計事務所	●	
17	1958	9	与野の家	三橋真三		●
18	1958	12	千田さんの家	奈良信建築設計事務所	●	
19	1959	5	山下邸	広瀬鎌二建築事務所	●	
20	1959	10	夙川の家	竹中工務店	●	
21	1960	5	鎌倉浄明寺の家	三橋真三	●	
22	1961	1	N氏の小別荘	山脇建築研究室	●	
23	1962	1	佐竹さんの家	清家清	●	
24	1962	11	T氏邸	美建設計事務所	●	
25	1963	6	K氏邸	藤本武男	●	

表 3-2：内法上に関する詳細図及び記述のある作品リスト（建築文化）

番号	出版年		作品名	設計者	内法上の詳細図	内法上に関する記述
	西暦	月				
1	1950	2	K氏邸	佐藤武夫	●	
2	1952	10	レイモンド建築設計事務所	アントニン・レーモンド	●	
3	1953	12	速田邸	アントニン・レーモンド	●	
4	1954	1	A邸	村田政眞建築設計事務所	●	
5	1954	9	S氏邸	柴田陽三		●
6	1956	1	角川邸	加倉井昭夫	●	
7	1956	4	Y氏邸	山下樹郎設計事務所	●	
8	1956	7	S氏邸	高田秀三	●	
9	1956	11	鎌倉のI氏邸	岡田哲郎建築設計事務所	●	
10	1956	12	Iさんのすまい	佐藤保隆	●	●
11	1957	2	若き建築家の自邸	合田信雄	●	
12	1957	3	デザイナーの家	森田茂介	●	
13	1957	6	M氏邸	半沢重信		●
14	1957	5	Kの家	清瀬永	●	
15	1957	9	白幡君の家	福田良一	●	
16	1957	11＊	沓掛の家	連合設計社	●	
17	1958	7	亀甲の家	生田勉		●
18	1959	3	卍プランの家	石田建築研究所	●	
19	1959	3	松尾邸	小林威	●	
20	1959	6	鉄骨住宅試案	柴田陽三	●	
21	1959	8	S小住宅	山脇巌		●
22	1960	7	T別荘	長倉康彦	●	●
23	1960	8	Yさんの家	阿久井喜孝		●
24	1961	7	Y氏邸	山田水城建築設計事務所	●	
25	1962	2	K氏邸	大成建設		●
26	1962	10	K氏邸	山田水城建築設計事務所	●	●
27	1962	12	N氏邸	稲田建築設計事務所		●
28	1963	9	Ko氏邸	西川驍	●	

3-2　天井、屋根裏

それではまず、天井面における意匠について要素ごとに確認する。天井面の要素が省略化した作品は、『新建築』で 167 箇所、『建築文化』で 111 箇所であった。この中で詳細図がある作品は『新建築』では 13 作品、『建築文化』では 14 作品あった。天井面は、内法上装置そのものではないが、天井面の廻縁を省略することや竿縁を連続することで隣室間が連続することがわかる。ここでは、天井面だけでなく、屋根裏にも着目し、内法上を開放的に扱う意匠の詳細をみる。

3-2-1　天井（廻縁ナシ）

通常、隣室間の天井面は室ごとに廻縁がつけられる。または、内法上の建具のために鴨居や枠が天井面につけられる。ここでは、隣室間にあえて廻縁をなくした作品をみることで、その意匠の効果を確認する。

まず、図 3-3 と図 3-4 は『新建築』から 1955 年の柳英男による“PS コンクリート梁を用いた家”の寝室から居間を見た写真とその詳細図である。図 3-3 および 3-4 より隣室間には廻縁がなく、同材料の天井面が連続していることがわかる。こうした天井面の廻縁や鴨居を省略した作品は、『新建築』で 9 作品、『建築文化』では 6 作品であった。

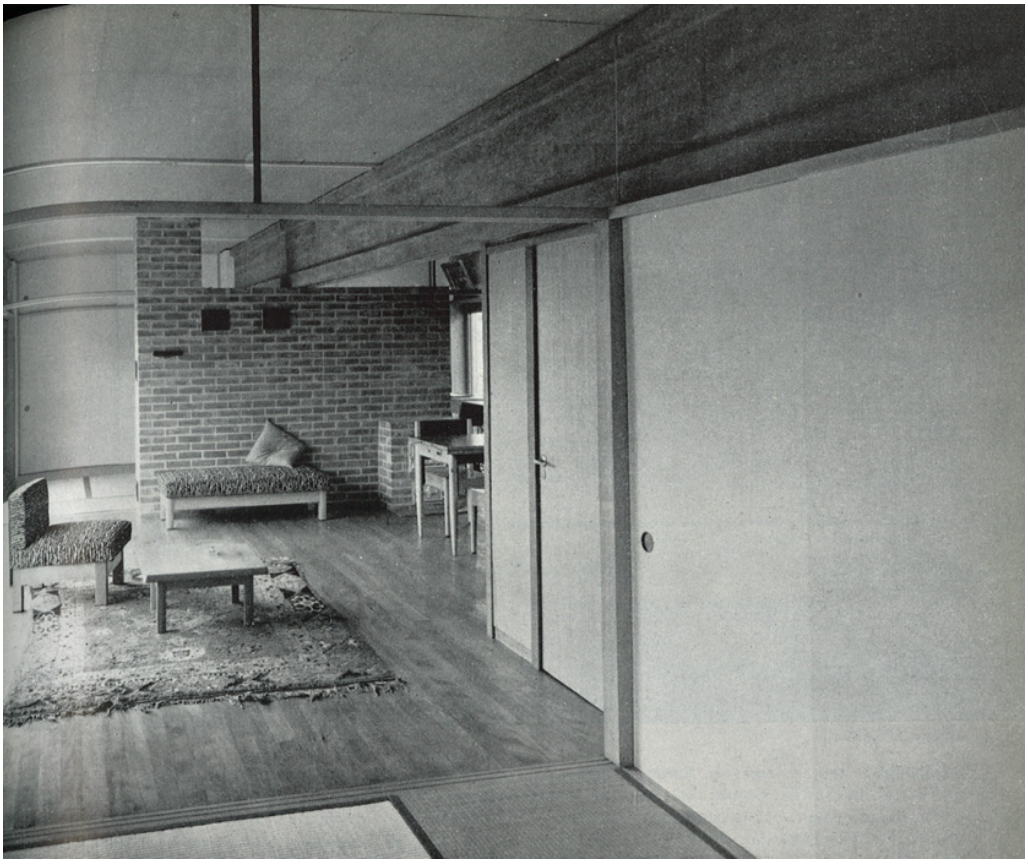


図 3-3：　柳英男：PS コンクリート梁を用いた家

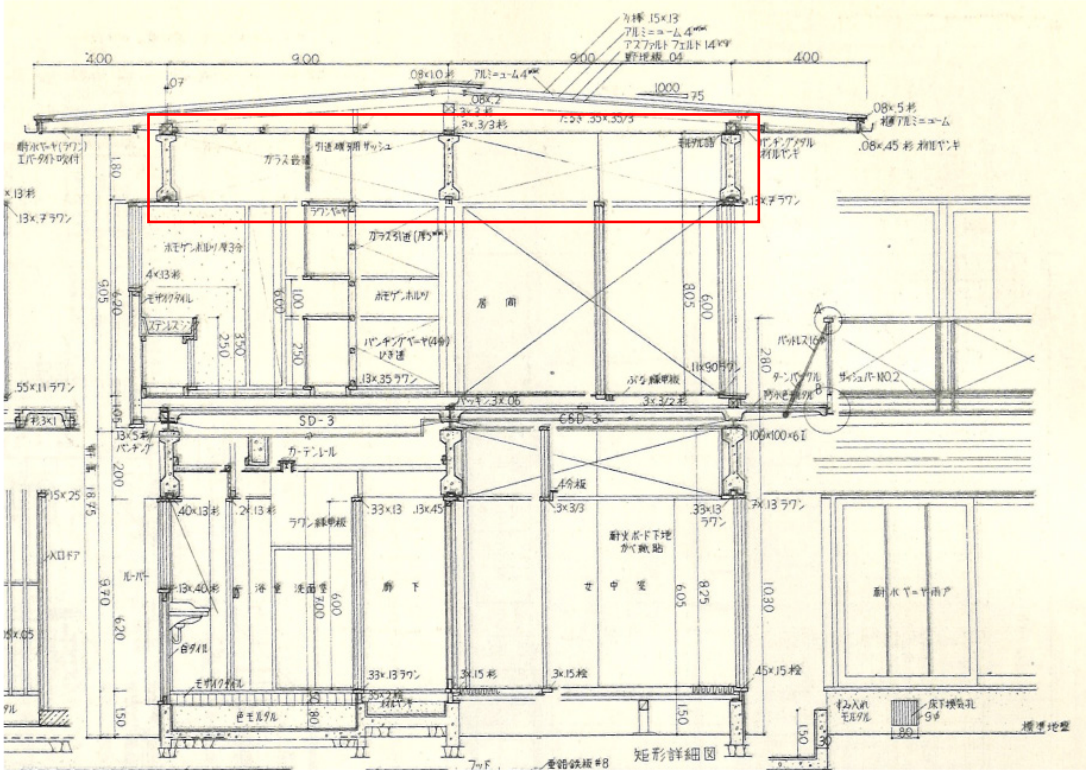


図 3-4： 柳英男：PS コンクリート梁を用いた家

3-2-2　天井（目地連続）

天井には竿縁やボードの目地ように、一定の間隔で目地ができる。ここでは、目地によって内法上にどのような効果があるのかを確認する。

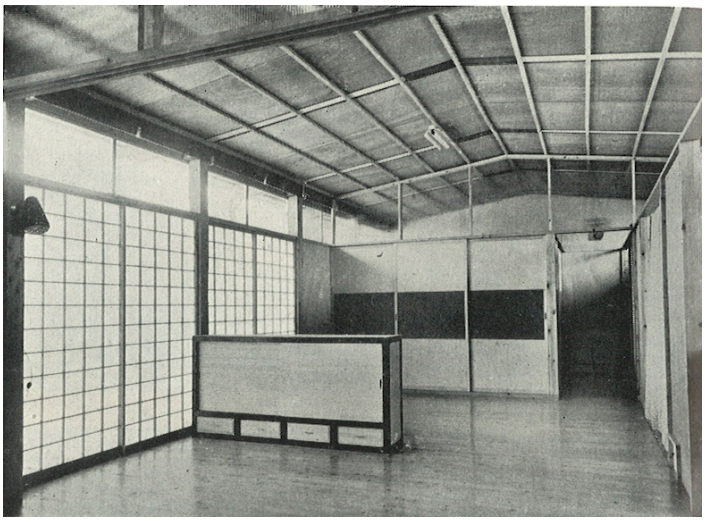


図 3-5：田村博：木造試作小住宅

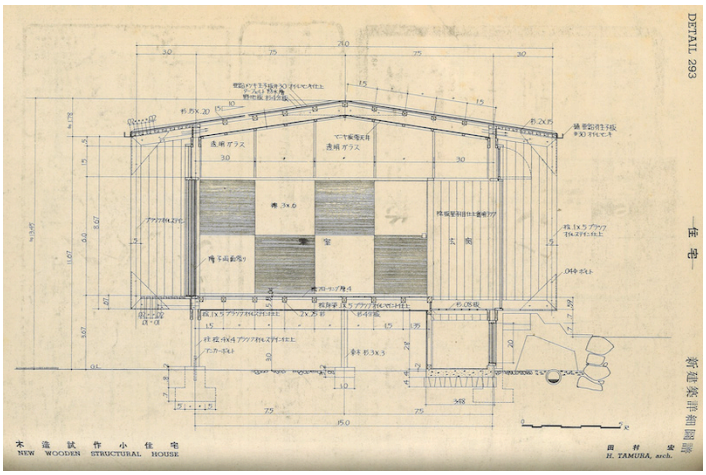


図 3-6：田村博：木造試作小住宅

図 3-5、図 3-6 は、『新建築』から 1953 年の田村博による“木造試作小住宅”の居間兼食堂から和室を見た写真とその詳細図である。天井面の竿縁が隣室にも連続していることがわかる。これにより内法上の連続性が強調されていることがわかる。図 3-7、図 3-8 は、『建築文化』から 1956 年の高田秀三による“S 氏邸”の和室から居間を見た写真とその詳細図である。図 3-7 の左側に見える内法上装置は目透かし天井の目地が横方向に連続していることがわかる。このような天井の竿縁や目地によって隣室間の連続性が強調された作品は、『新建築』では 12 作品、『建築文化』では、13 作品であった。また、図 3-7 では、天井の目地が床の間に向かっていることがわかる。このような床挿は、『新建築』で 1 作品、『建築文化』でも 1 作品であった。

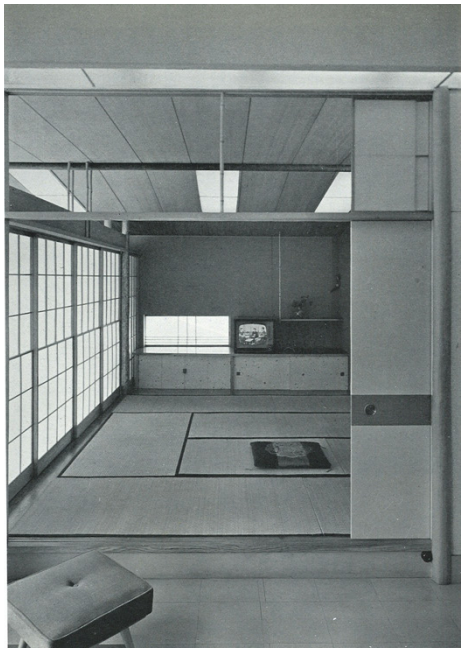


図 3-7：高田秀三：S 氏邸

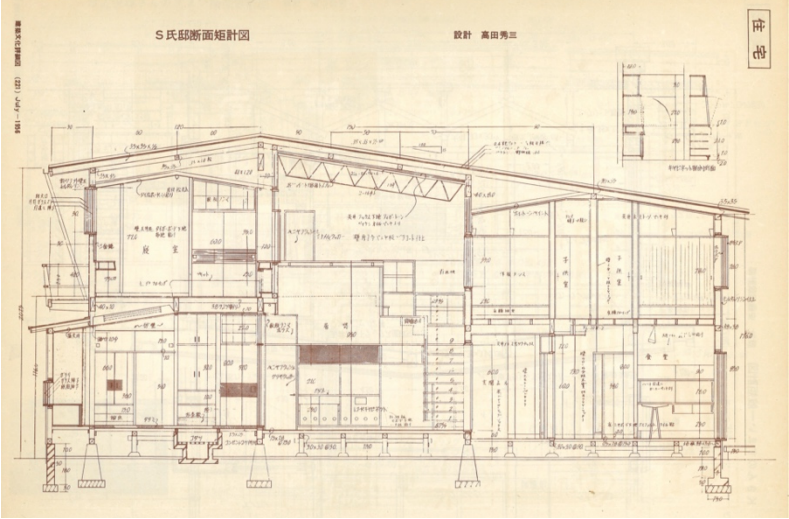


図 3-8：高田秀三：S 氏邸

さらに、この中で特徴的な作品をみる。図 3-9、図 3-10 は、『建築文化』から 1960 年の長倉康彦による“T 別荘”の 6 帖からリビングルームを見た写真とその詳細図である。図 3-9 をみると、建物外部の軒天の高さを内部の天井に合せていることがわかる。図 3-10 をみると、これによって室の内外で天井が連続していることがわかる。また、その材料をみると外部は石膏フレキシブルシート、内部はナラ合板と異なることがわかる。しかし、それぞれの目地は室の内外で揃っているため連続性が強調されていることがわかる。このように建物の内部と外部の天井高を合せた作品は、『新建築』で 1 作品、『建築文化』で 1 作品であった。

図 3-9：長倉康彦：T 別荘

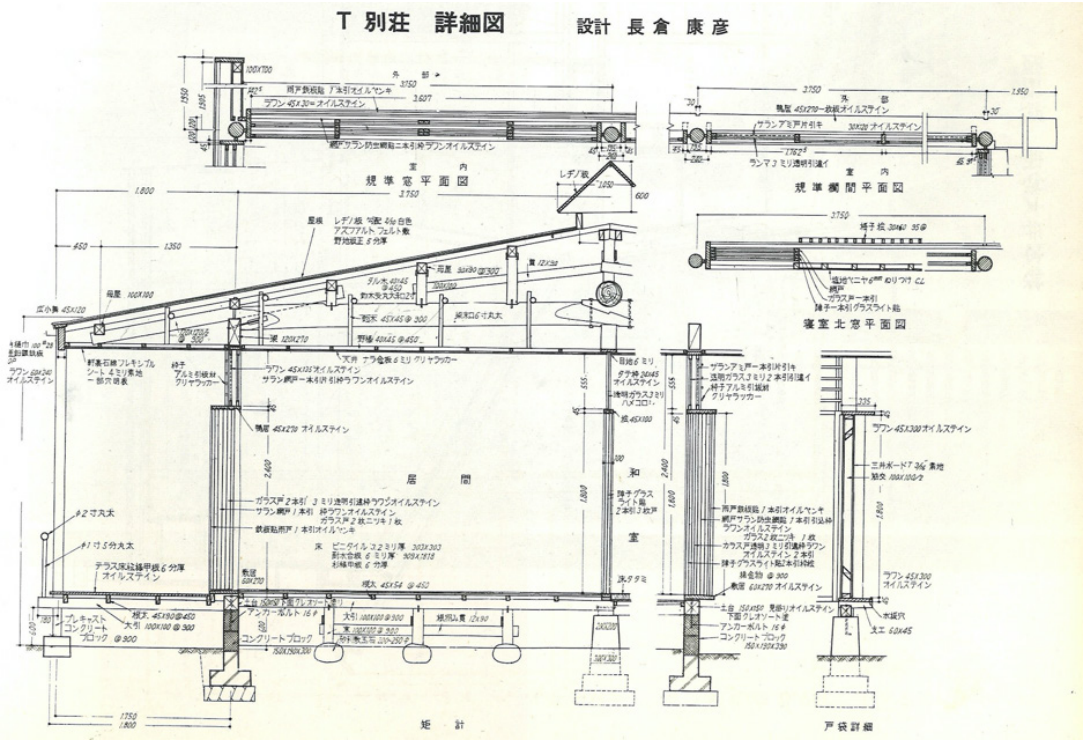


図 3-10：長倉康彦：T 別荘

続いて、作品の中には天井を貼らないものが確認できた。図 3-11、図 3-12 は、『新建築』から 1953 年のレーモンド建築事務所による“ブロワー邸”の居間兼食堂から仕事室を見た写真とその詳細図である。天井を貼らないため、屋根の構造体が室内から見えた状態になっている。構造体は居室に関係なく建物全体に架けられるため、隣室に連続していることがわかる。これより天井の連続性が強調されていることがわかる。このような作品は『新建築』では 2 作品、『建築文化』では 3 作品見ることができた。

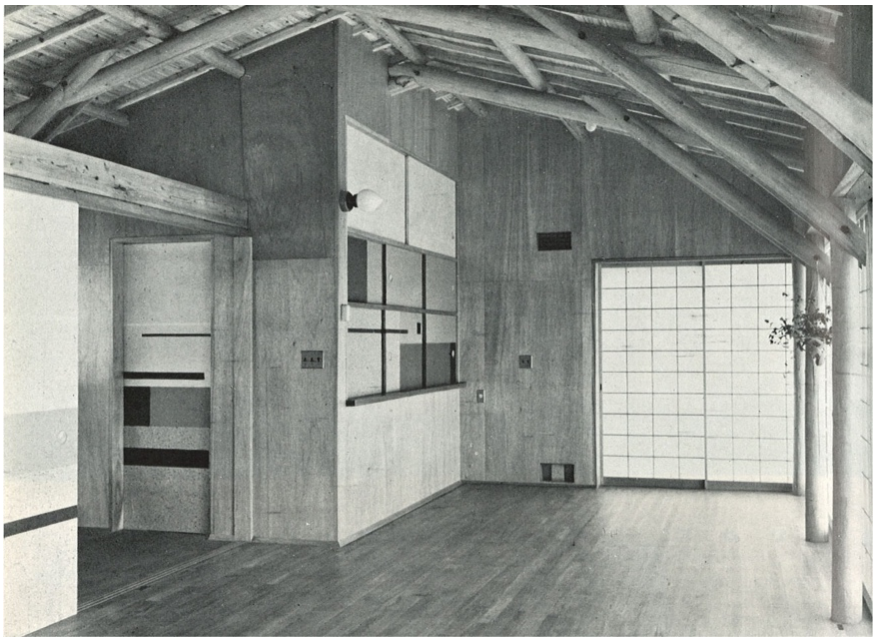


図 3-11：レーモンド建築事務所：ブロワー邸

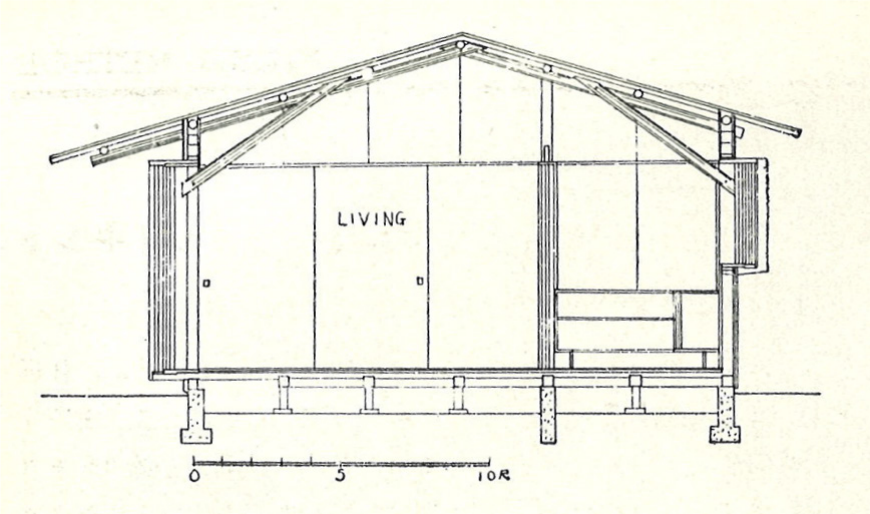


図 3-12：レーモンド建築事務所：ブロワー邸

3-2-3　天井（その他）

ここでは天井の意匠の中から、前節とは異なる意匠の作品を取り上げる。図 3-13、図 3-14 は、『建築文化』から 1953 年のレーモンド建築事務所による“速田邸”の 8 帖から 6 帖を見た写真とその詳細図である。写真から室内に見える棟木の位置がその下にある襖の位置とずれていることがわかる。図 3-14 をみると、この棟は室内の意匠をして作られたもので、建物全体の棟の位置ともずれていることがわかる。このずれによって内法上で隣室間との境界があいまいになっていることがわかる。このような作品はこれ以外に見られなかった。

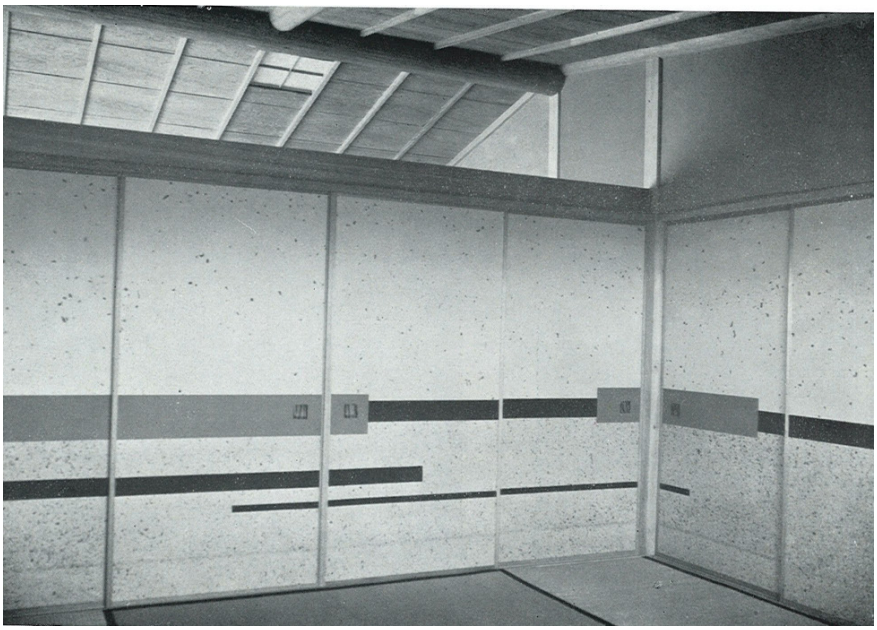


図 3-13：レーモンド建築事務所：速田邸

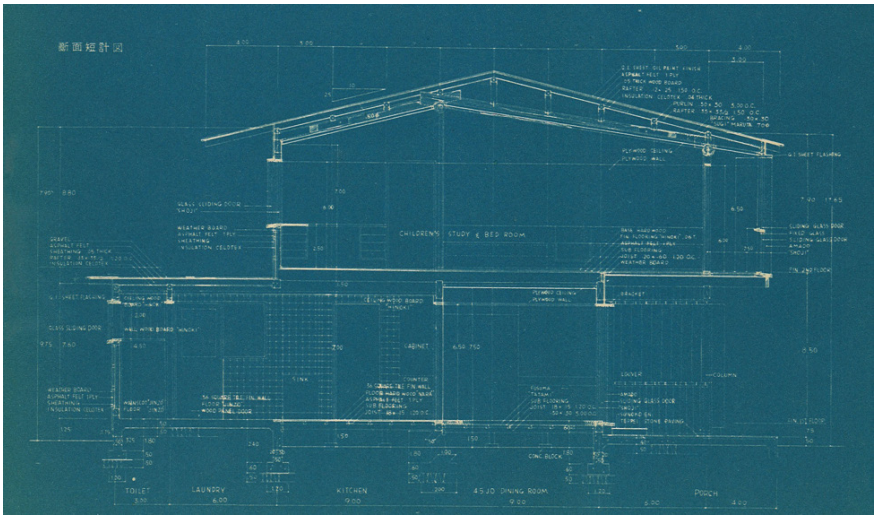


図 3-14：レーモンド建築事務所：速田邸

3-3　　小壁

次に小壁における意匠について要素ごとに確認する。小壁の要素が省略化した作品は、『新建築』で 268 箇所、『建築文化』で 214 箇所であった。この中で詳細図がある作品は『新建築』では 14 作品、『建築文化』では 21 作品あった。小壁を開放的に扱った作品として、小壁が全くない意匠のほか、力貫や桁のように内法上の下端や上端に一部だけ壁ができるものがある。ここでは、小壁の有無と位置に着目してその詳細をみる。

3-3-1　小壁（ナシ）

まず、小壁を全てなくした事例について確認する。図 3-15 および図 3-16 は、『建築文化』から 1957 年の合田信雄による“若き建築家の自邸”の居間から和室を見た写真とその詳細図である。図 3-15 を見ると、小壁が全く無いことがわかる。内法上に小壁がなくなると、隣室の天井まで見ることができる。このような作品は、『新建築』では 10 作品、『建築文化』では 17 作品であった。

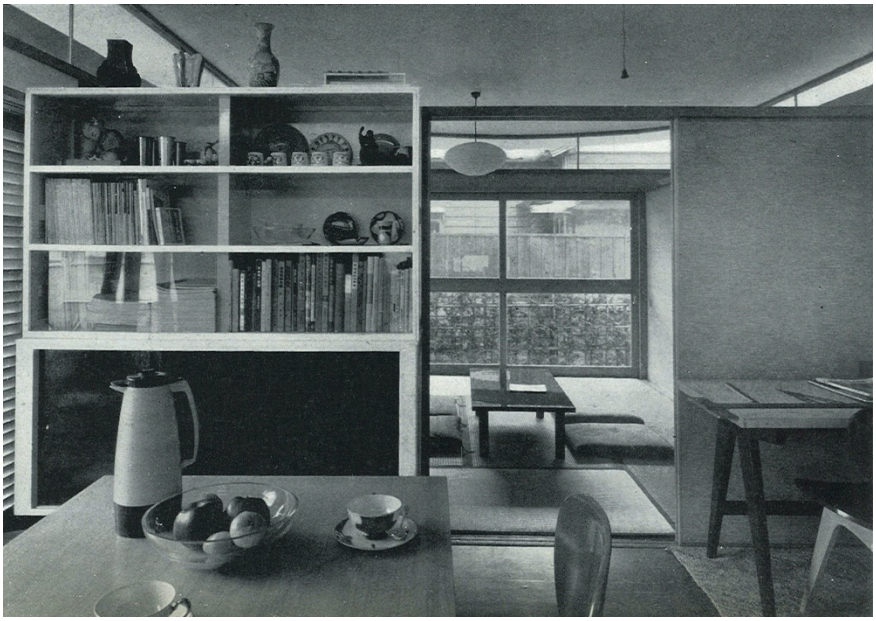


図 3-15：合田信雄：若き建築家の自邸

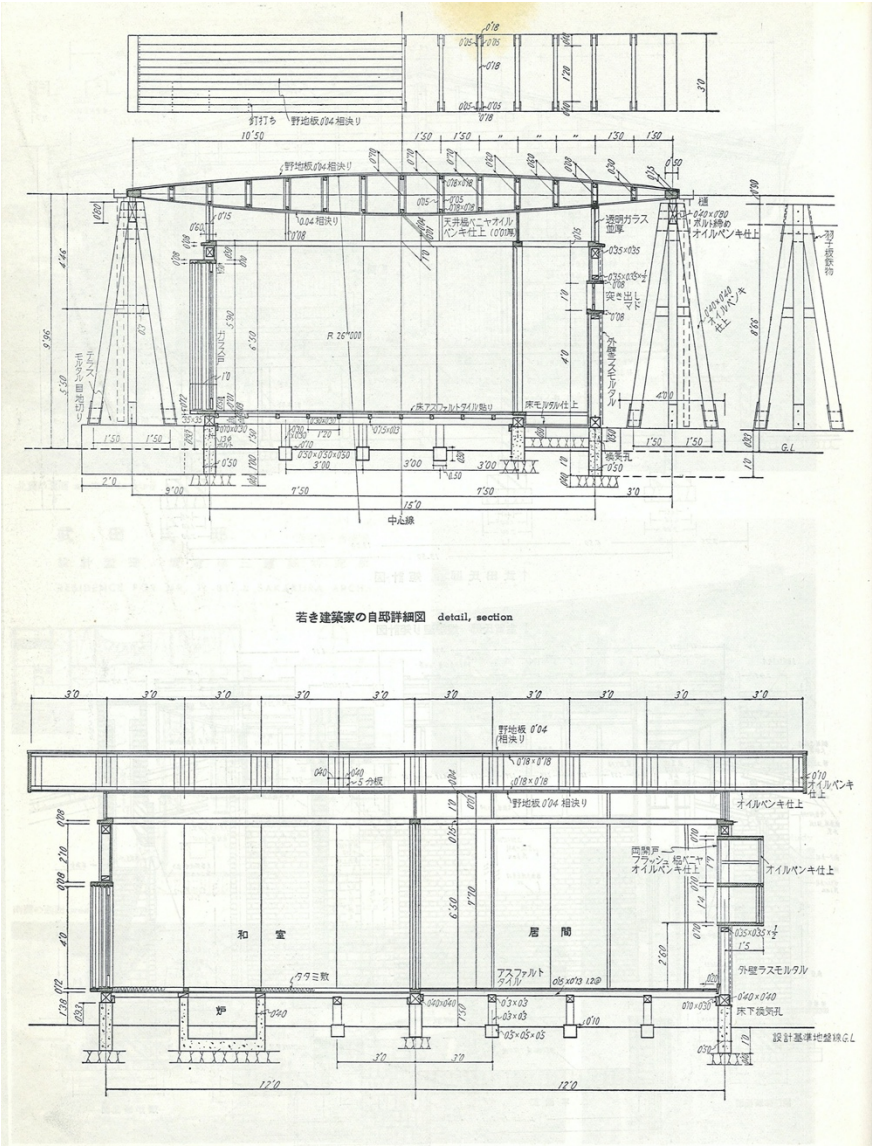


図 3-16：合田信雄：若き建築家の自邸

さらに、この中で特徴的な作品をみる。図 3-17、図 3-18 は、『建築文化』から 1961 年の山田水城建築設計事務所による“Y 氏邸”の居間から 8 帖を見た写真とその詳細図である。図 3-17 より、構造体と構造体の隙間である面戸に面戸板のような壁がなく、ガラスがはめられ抜けていることがわかる。このように内法上の面戸が抜けている作品は、『建築文化』では、2 作品見ることができた。

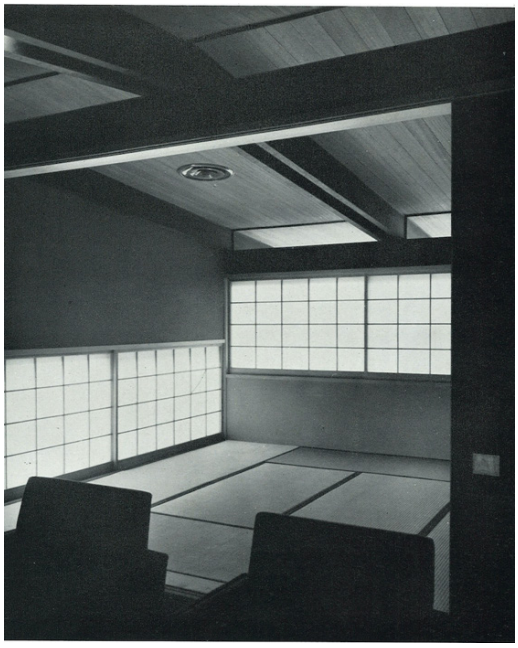


図 3-17：山田水城建築設計事務所:Y 氏邸

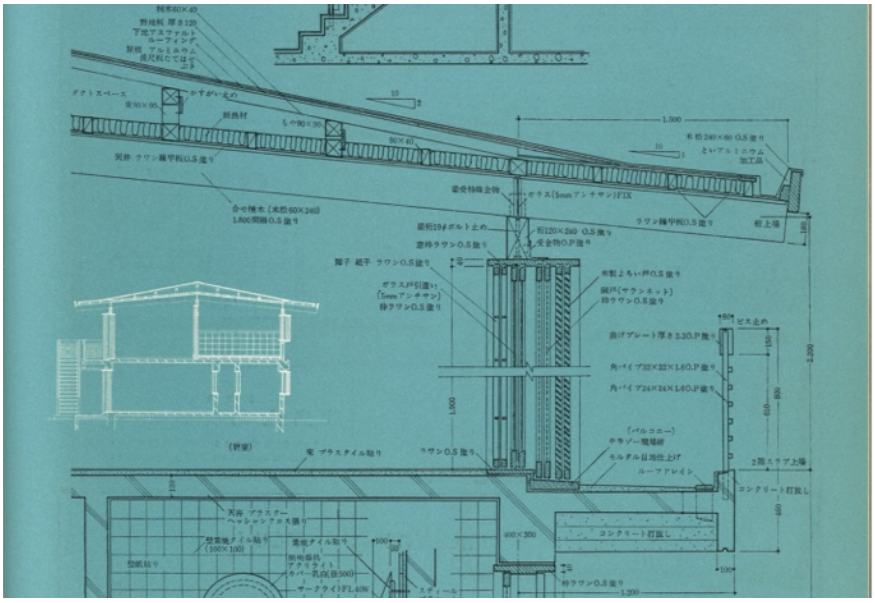


図 3-18：山田水城建築設計事務所:Y 氏邸

3-3-2　小壁（下端）

内法上に壁はないものの鴨居を支えるために力貫や板状の欄間が入った作品がある。図3-19、図3-20は、『新建築』から1959年の竹中工務店による“夙川の家”の和室から縁側を見た写真とその詳細図である。力貫によって内法上の下端は塞がっているが、吊束を省略することができるため上部は開放的になっていることがわかる。ここではさらに天井面が隣室に連続して貼られていることがわかる。図3-11のレーモンド建築事務所によるブロワー邸も同様に、力貫によって吊束が省略され内法上の上部が開放的になっている。このような作品は、『新建築』では3作品、『建築文化』では2作品であった。

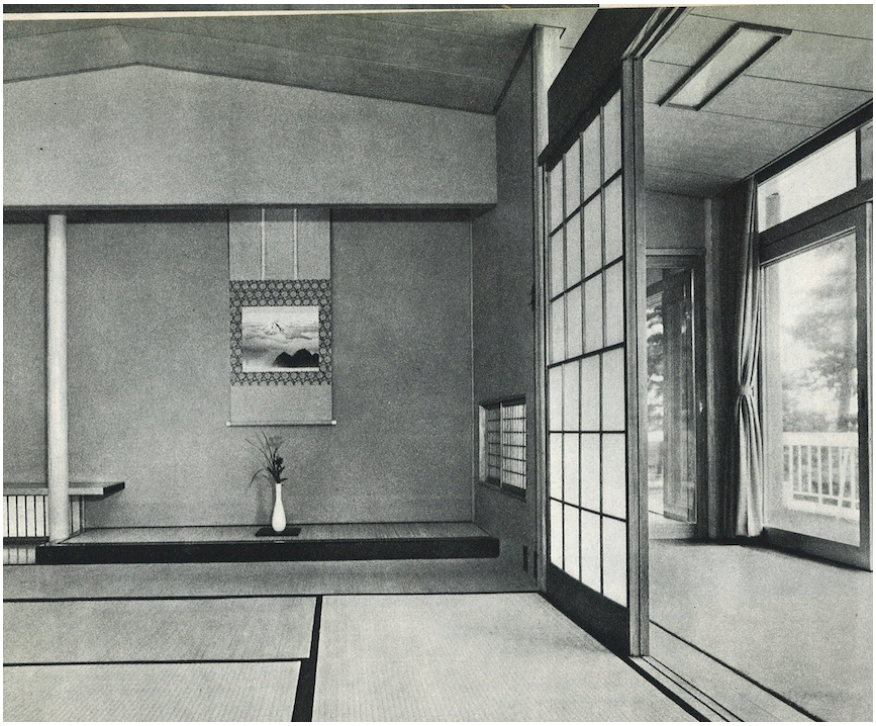


図3-19：竹中工務店：夙川の家

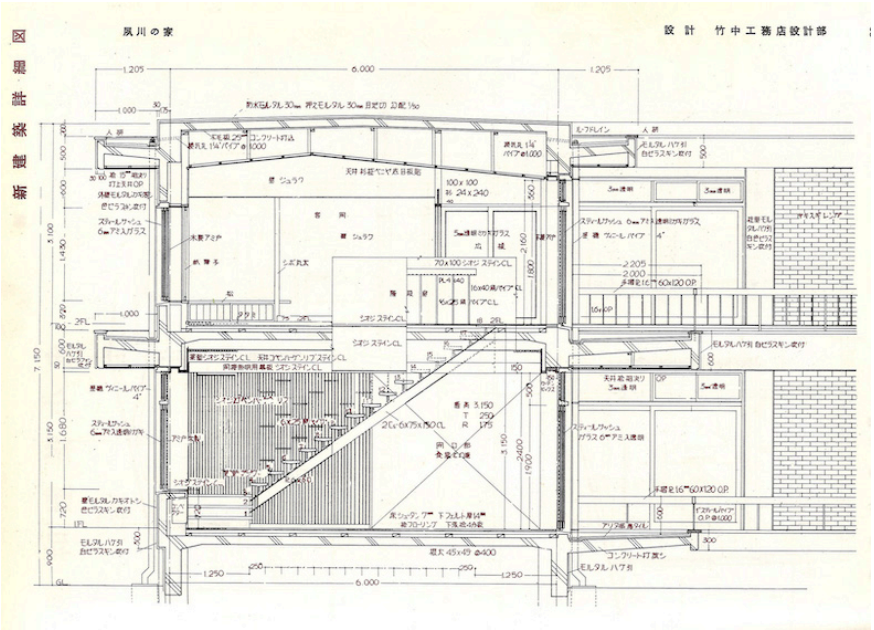


図 3-20：竹中工務店：夙川の家

3-3-3　小壁（上端、構造体）

内法上に壁はないものの上部に梁や垂木が見えるものがある。図 3-21、図 3-22 は、『建築文化』から 1957 年の連合設計者による“沓掛の家”の和室の写真とその詳細図である。詳細図をみると、0.4×0.7 尺の構造体が内法上にあることがわかる。写真より隣室ともに天井材が同一であるが内法上の上端を遮られていることがわかる。これより天井に廻縁が無い作品に比べて連続性が低くなることがわかる。このように内法上の上端が構造体によって遮られているものは『新建築』では 1 作品、『建築文化』では 2 作品であった。

図 3-21：連合設計者：沓掛の家

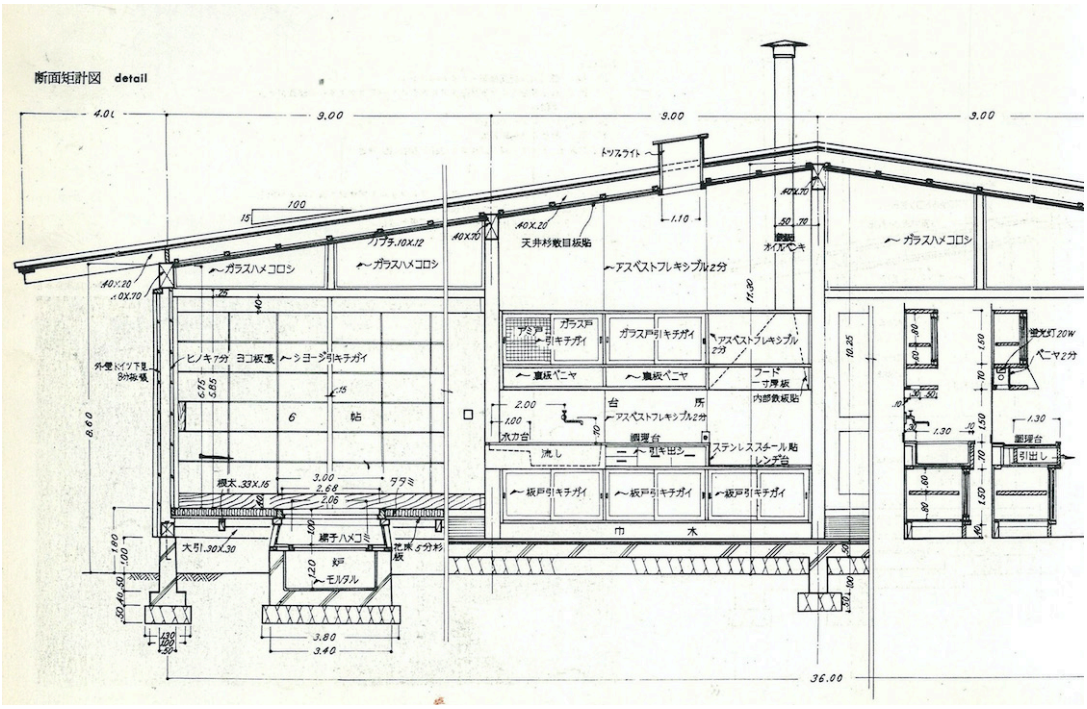


図 3-22：連合設計者：沓掛の家

3-4　　吊束ナシ（鉄材）

次に吊束における意匠について要素ごとに確認する。吊束が省略化した作品は、『新建築』で 215 箇所、『建築文化』で 155 箇所であった。この中で特に吊束が省略され代わりに鉄材のボルトやピアノ線になっている作品を見ることができた。これらの詳細図がある作品は『新建築』では 3 作品、『建築文化』では 6 作品あった。

まずは、鉄材の吊束のバリエーションについてみる。図 3-23、図 3-24 は、『新建築』から 1937 年の RIA 建築総合研究所の山口文象による“小林氏邸”の居間を見た写真とその詳細図である。詳細図を見ると、内法上に釣束プレートが 2 枚あることがわかる。このようなプレート型の吊束は他に見られなかった。

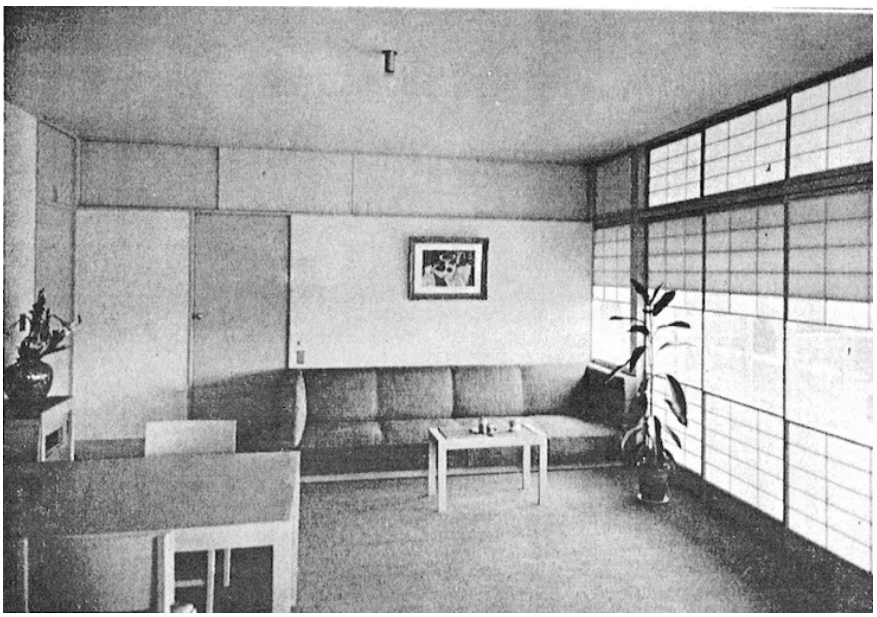


図 3-23：山口文象：小林氏邸

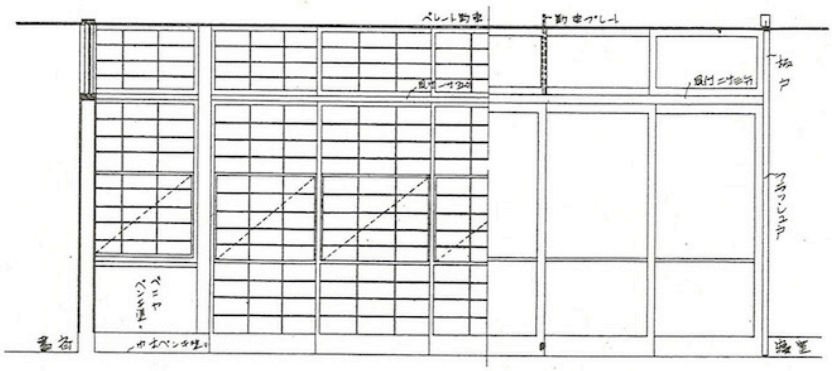


図 3-24：山口文象：小林氏邸

続いて、図 3-25、図 3-26 は、『建築文化』から 1956 年の佐藤保隆による“I さんのすまい”の居間から家事室を見た写真とその詳細図である。詳細図をみると、吊束が 13ϕ釣りボルトと表記されていることがわかる。建具はアキで抜けており、開放的な内法上となっている。このように鉄材の吊束の中でボルトによる作品は、『新建築』で 3 作品、『建築文化』で 4 作品であった。

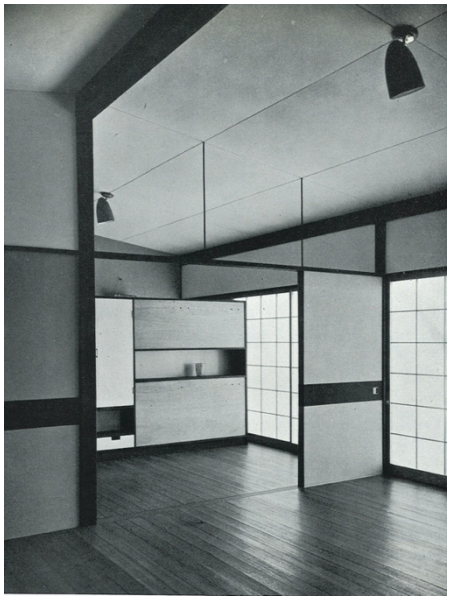


図 3-25：佐藤保隆：I さんのすまい

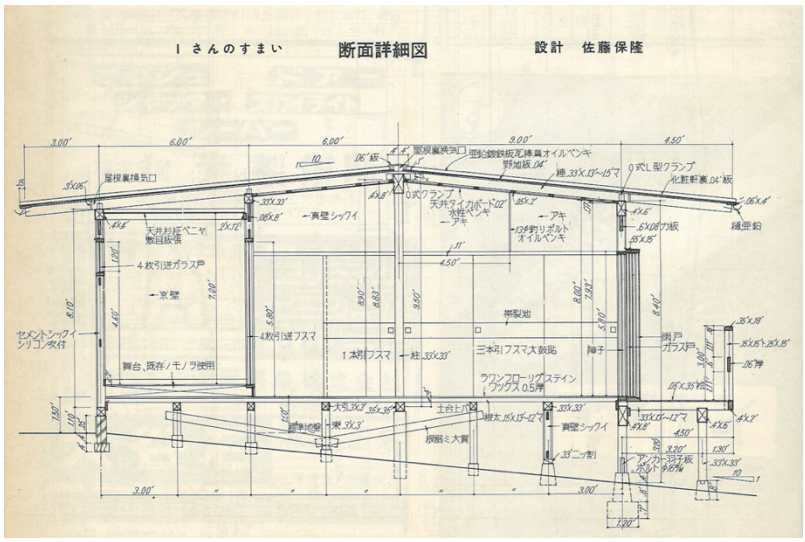


図 3-26：佐藤保隆：I さんのすまい

また、この中で特徴的な作品を見る。図 3-27、図 3-28 は、『建築文化』から 1956 年の高田秀三による“S 氏邸”の和室から居間を見た写真とその詳細図である。写真手前の内法上装置と左手に見える内法上装置は、それぞれ吊束がなく代わりに竹材が取り付けられていることがわかる。ここで竹材の束について詳細にみる。左手の内法上は、間口が 2 間で鴨居の上に力貫がある。これに対して、手前の内法上は、間口が 1.5 間だが鴨居を支えるような部材が見られない。そこでこの竹材の中に鉄のボルトあるいはワイヤーが入っていると考えられる。このような作品は他では見られなかった。

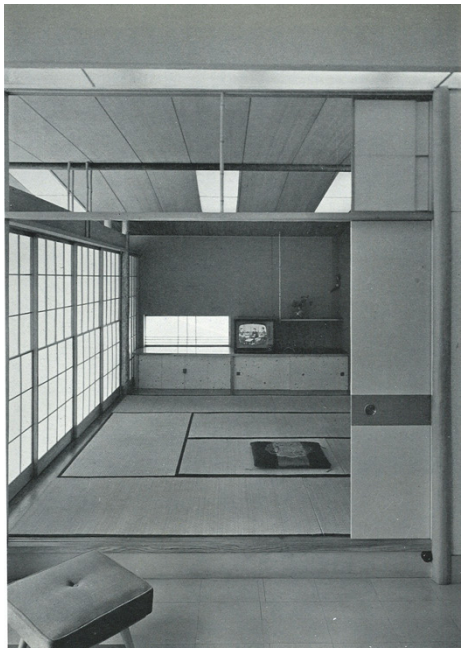


図 3-27：高田秀三：S 氏邸

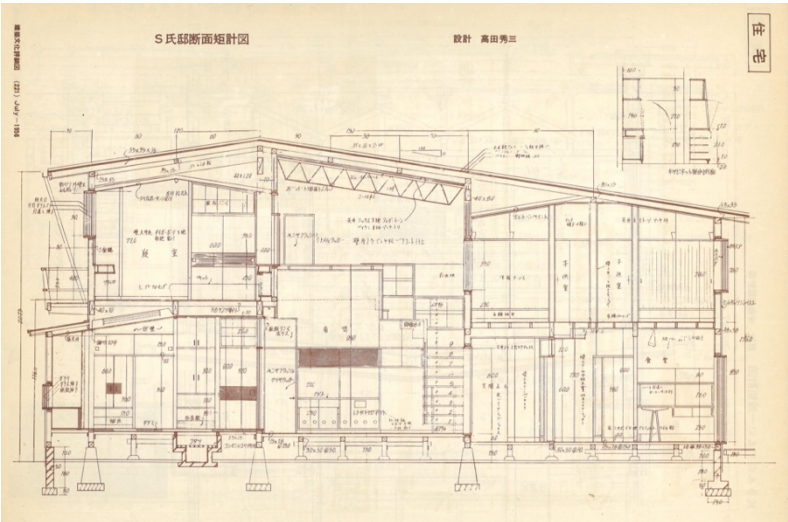


図 3-28：高田秀三：S 氏邸

さいごに、図 3-29、図 3-30 は、『建築文化』から 1962 年の山田水城建築設計事務所による“K 氏邸”の居間を見た写真とその詳細図である。詳細図をみると、吊金物：(角パイプ 40×20) と鉄材の吊束が使用されていることがわかる。このような角パイプによる吊束は他では見られなかった。

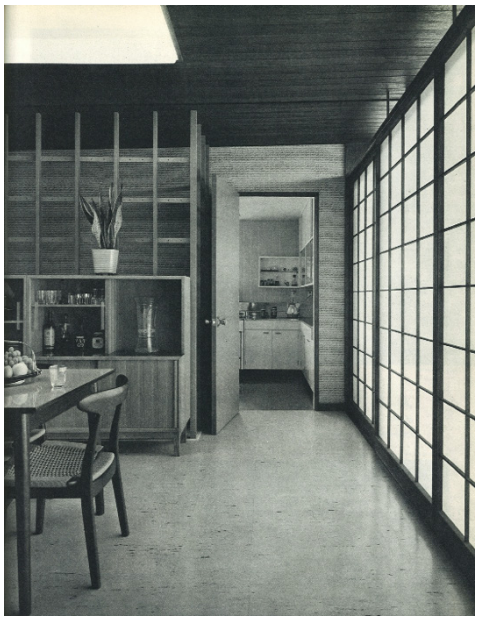


図 3-29：山田水城建築事務所：K 氏邸

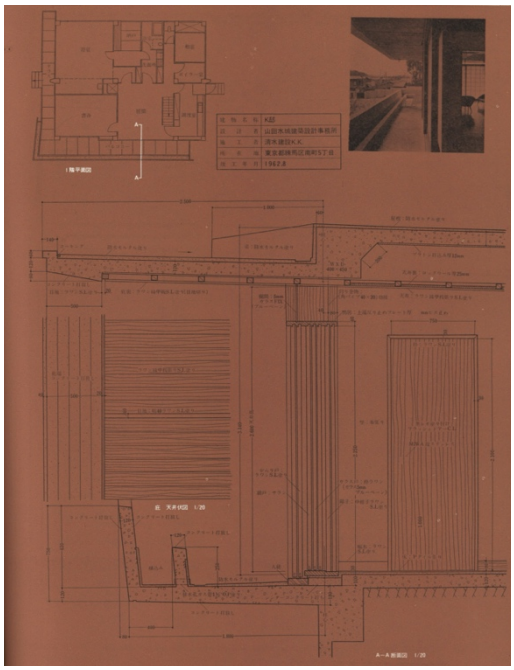


図 3-30：山田水城建築事務所：K 氏邸

次に、鉄材の吊束の位置についてみる。図 3-31、図 3-32 は『新建築』から 1937 年の RIA 建築総合研究所の山口文象による“小林氏邸”の居間を見た写真とその詳細図である。詳細図をみると内法上に釣束プレートが 2 枚あることがわかる。この吊束の位置をみると、内法上にある建具の召し合わせに重なるように置かれていることがわかる。図 3-31 の写真をみると、これによって鉄材の吊束が内部から見えなくなっていることがわかる。

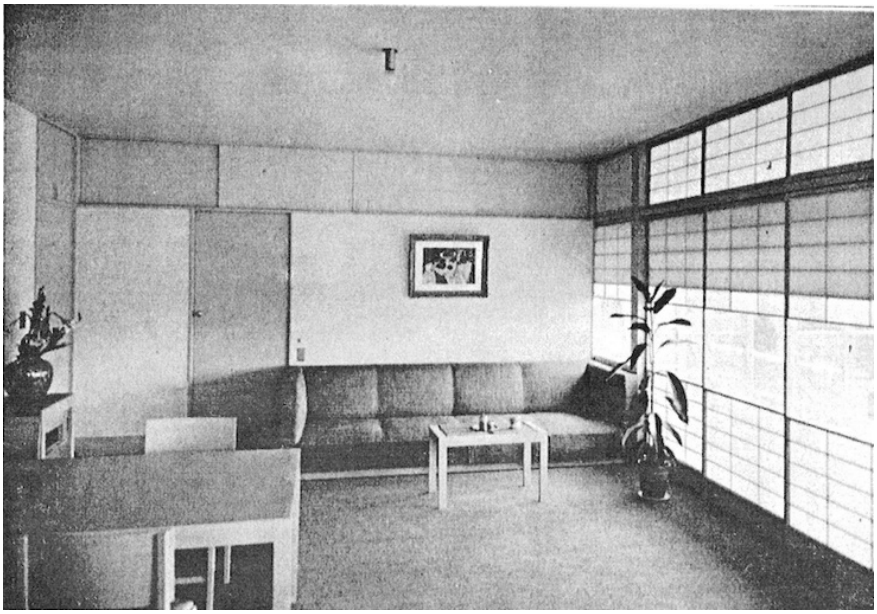


図 3-31：山口文象：小林氏邸

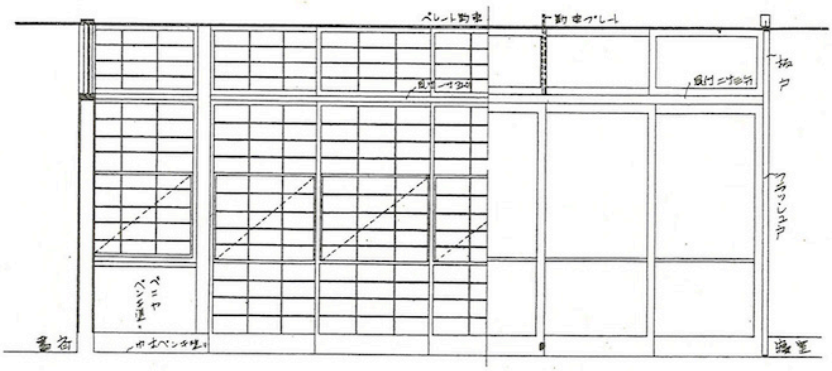


図 3-32：山口文象：小林氏邸

最後に、吊束の寸法についてみる。吊束は鴨居を支えるためにある部材である。そこで鴨居との関係を把握するために鴨居の寸法についてもみる。表 3-3、表 3-4 は内法上の詳細図のある図面の中で吊束と鴨居の寸法がわかる作品をまとめたものである。

表 3-3：吊束および鴨居の寸法について（新建築）

番号	出版年		作品名	設計者	間口	鴨居見付	吊束（材料と寸法）	備考欄
	西暦	月			間	mm		
1	1937	8	小林氏邸	山口蚊象	2.5	45	鉄材　プレート	
12	1955	7	PSコンクリート梁を用いた家	柳英男	1.5	40	鉄材　ボルト	
14	1956	6	川端の家	安東勝男	2	60	鉄材　ボルト6φ	
20	1959	10	夙川の家	竹中工務店	2	40		鴨居の上に板（力貫）240mmがつく
21	1960	5	鎌倉浄明寺の家	三橋真三	2.5	36		鴨居の上に板（力貫）212mmがつく
13	1956	6	T型平面の家	武基雄研究室	2	48	鉄材　ボルト6φ	
18	1958	12	千田さんの家	奈良信建築設計事務所	1.5	40	木製	木製の吊束が1本つく
19	1959	5	山下邸	広瀬鎌二建築事務所	2	90		
22	1961	1	N氏の小別荘	山脇建築研究室	1	151		
23	1962	1	佐竹さんの家	清家清	1.5	61		
24	1962	11	T氏邸	美建設計事務所	1.5	150		
25	1963	6	K氏邸	藤本武男	2	155		

表 3-4：吊束および鴨居の寸法について（建築文化）

番号	出版年		作品名	設計者	間口	鴨居見付	吊束（材料と寸法）	備考欄
	西暦	月			間	mm		
	1956	4	Y氏邸	山下樹郎建築事務所	2	不明	鉄材　ボルト9φ	
10	1956	12	Iさんのすまい	佐藤保隆	1.5	33	鉄材　ボルト13φ	
26	1962	10	K氏邸	山田水城建築設計事務所	2	40	鉄材　角パイプ40×20	
24	1961	7	Y氏邸	山田水城建築設計事務所	2	40		桁240mmの下に鴨居がつく
4	1954	1	A邸	村田政眞建築設計事務所	2	152		
6	1956	1	角川邸	加倉井昭夫	1.5	60		
9	1956	11	鎌倉のI氏邸	岡田哲郎建築設計事務所	2	182	鉄材　ボルト	
14	1957	5	Kの家	清瀬永	2	40		建具はガラスのはめ殺し　中央に桟が入る
16	1957	11＊	沓掛の家	連合設計社	2	76	木製	木製の吊束が2本つく
18	1959	3	卍プランの家	石田建築研究所	1	60		
28	1963	9	Ko氏邸	西川驍	2	363		

表 3-3、表 3-4 は作品ごとに、内法上装置の間口、鴨居の見付寸法、吊束の材料と寸法、その他に力貫や桁、桟といった内法上の特徴について示している。まず、鉄材の吊束の寸法をみると、『新建築』ではφ6 の吊束が 2 作品ある。『建築文化』ではφ9、φ13 の作品がある。これより鉄材による吊束は極めて細い束にすることができていることがわかる。

次に鴨居の見付をみると、『新建築』では最小で 36mm、最大で 155mm であった。『建築文化』では最小で 33mm、最大で 363mm であった。ここで鉄材の吊束が使用されている作品をみると、『新建築』では 40mm、45mm、48mm、60mm あることがわかる。これ以外の作品と比較すると、やや見付が小さくなっているものの一般的な吊束の場合と同程度の寸法であることがわかる。これより鴨居の寸法を変更することなく、鉄材の吊束を使うことが可能であることがわかる。

3-5　建具

次に建具における意匠について要素ごとに確認する。建具が省略化した作品は、『新建築』で 164 箇所、『建築文化』で 160 箇所であった。この中で詳細図がある作品は『新建築』では 14 作品、『建築文化』では 15 作品あった。建具は、を開放的に扱った作品として、建具が全くない意匠のほか、ガラスを用いた作品をみることができる。ここでは、建具が全くない作品とガラスを用いた作品に着目し、その詳細をみる。

3-5-1　建具（ナシ）

まず、建具をなくした事例について確認する。図 3-33、図 3-34 は、『建築文化』から 1957 年の合田信雄による“若き建築家の自邸”の居間から和室を見た写真とその詳細図である。内法上をみると小壁および建具が全くないことがわかる。これにより隣室間が抜けた開放的な意匠となっている。このような作品は、『新建築』では 5 作品、『建築文化』では 5 作品であった。

図 3-33：合田信雄：若き建築家の自邸

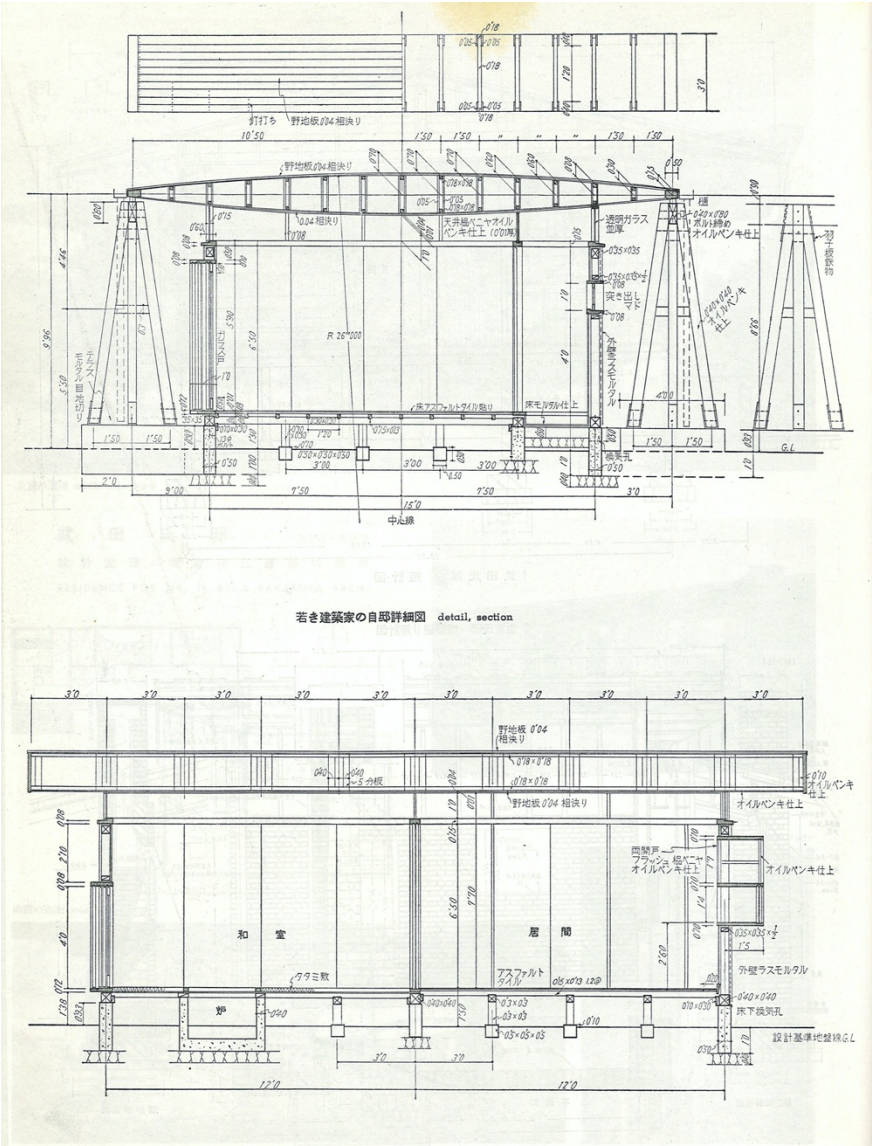


図 3-34：合田信雄：若き建築家の自邸

3-5-2　建具（ガラス）

続いて、建具にガラスが使用された事例について確認する。図 3-35、図 3-36 は、『建築文化』から 1959 年の柴田陽三による“鉄骨住宅試案”の居間の写真とその詳細図である。内法上をみると小壁は全くなく、そこにガラスのはめ殺しがつけられていることがわかる。これによって内法上が開放的になり、建物の内部と外部が連続した意匠になっている。このような作品は『新建築』では 10 作品、『建築文化』では 12 作品であった。

図 3-35：柴田陽三：鉄骨住宅試案

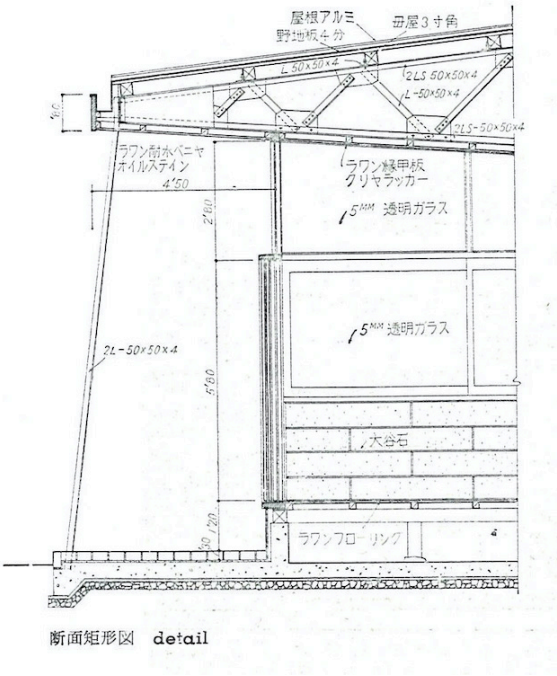


図 3-36：柴田陽三：鉄骨住宅試案

次にガラスのはめ殺しの取り付けについて見る。図 3-37、図 3-38 は、『新建築』から 1960 年の三橋真三による“鎌倉浄明寺の家”の居間から和室を見た写真とその詳細図である。写真をみると、まず鴨居の中央に束があり、天井にある棟木と揃うようについている。これによって内法上の建具は左右に分かれ、鴨居と勾配屋根によってできる三角形の面に対してガラスがはめられていることがわかる。この場合ガラスを一度にはめることは難しいため、真ん中に桟が入りガラスを分けている。このように、内法上が勾配屋根によって矩形でない場合、ガラスを一度にはめることは難しくほとんどの作品で桟が入っている。

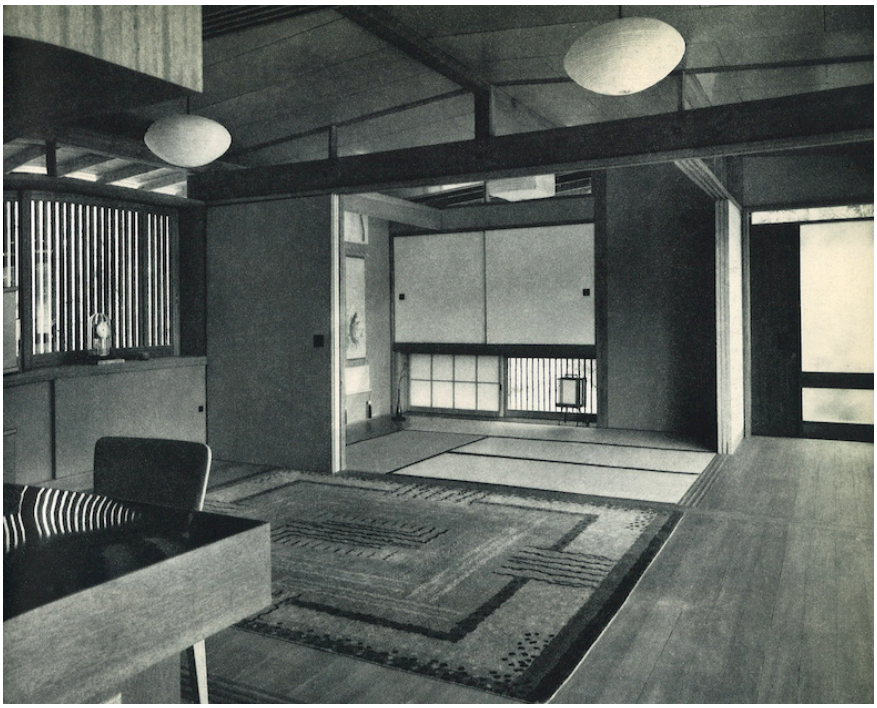


図 3-37：三橋真三：鎌倉浄明寺の家

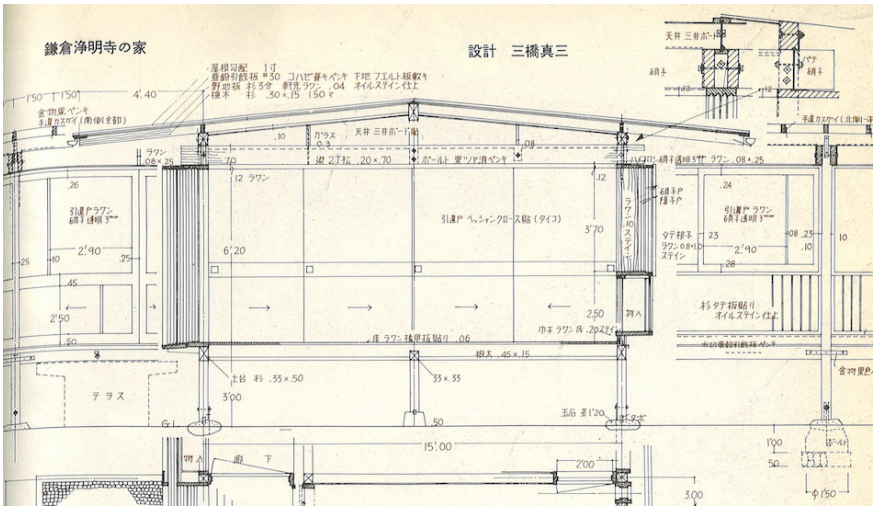


図 3-38：三橋真三：鎌倉浄明寺の家

図 3-39、図 3-40、図 3-41 は、『建築文化』から 1959 年の小林威による“松尾邸”の和室から居間を見た写真とその詳細図である。図 3-33 の奥にみえる内法上装置をみると、先ほどの作品と同様に内法上のガラスに桟が入っていることがわかる。これに対して、図 3-34 をみると内法上が矩形の場合は桟がないことがわかる。

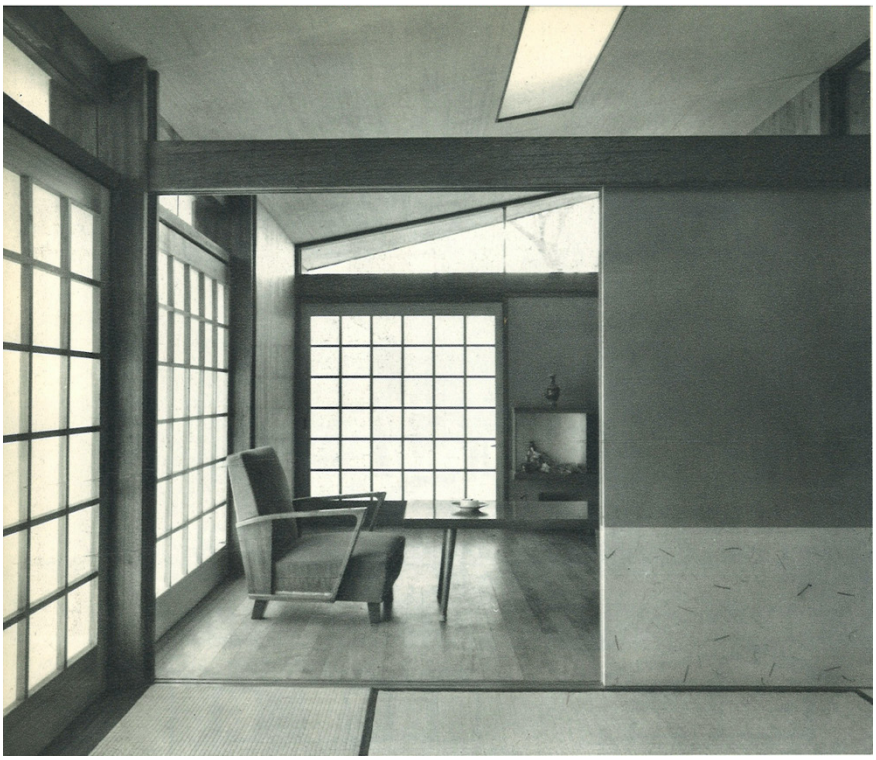


図 3-39：小林威：松尾邸

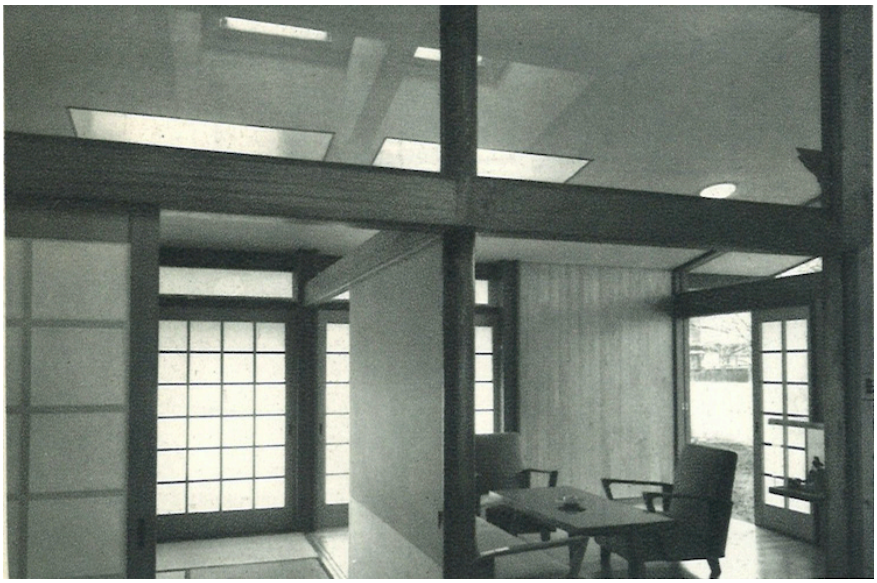


図 3-40：小林威：松尾邸

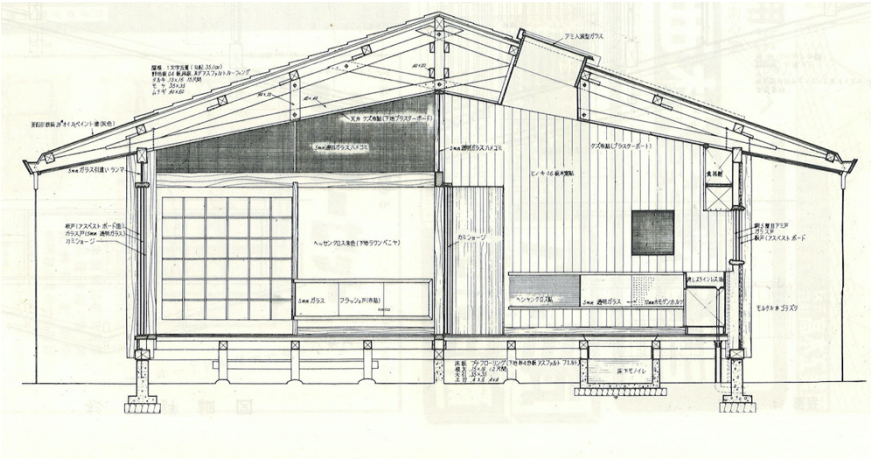


図 3-41：小林威：松尾邸

最後に特徴的な意匠についてみる。図 3-42、図 3-43 は、『新建築』から 1963 年の藤本武男による“K 氏邸”の和室を見た写真とその詳細図である。ここでも内法上に小壁はなく、代わりにガラスのはめ殺しがつけられている。ここで鴨居についてみると、鴨居が箱型になっており、内部に照明器具が取り付けられていることがわかる。これより鴨居が内法上や天井を照らす照明器具として機能していることがわかる。このような作品は他に見られなかった。

図 3-42：藤本武男：K 氏邸

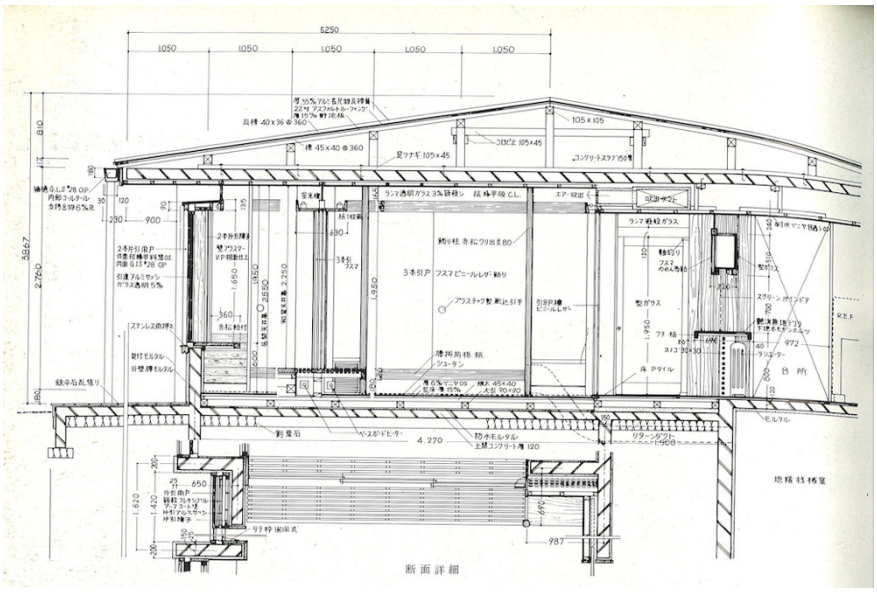


図 3-43：藤本武男：K 氏邸

3-6　記述分析

前節では内法上の各部にある意匠について、詳細図を見ることでさまざまな工夫を確認することができた。次に、設計者による作品説明を見ることで内法上装置の意匠の意図を把握する。まず、表 3-1 および表 3-2 において内法上に関する記述のある作品を収集した。表 3-5 および表 3-6 はそれらの作品に見られた記述をまとめたものである。記述を通読すると、記述を通読すると、天井、吊束、建具といった内法上の各要素に関する記述のほか、これらを統合した空間に関する記述もみられた。表 3-5 および表 3-6 にはそれぞれの記述がどの要素について述べているのかを示している。記述分析ではこの 4 つの要素ごとに内法上装置に関する記述を確認する。

表 3-5:記述リスト（新建築）

番号	西暦	タイトル	設計者	言説	空間	天井	小壁	吊束	建具
No.1	1941	山口画伯邸	吉田五十八	天井が低いため畳敷とベランダとの間仕切を特に吹抜に取扱った。	●	●			
No.2	1951	森博士の家	清家清	障子の鴨居は銅線で釣ってあるが銅線は引違い欄間障子の召合せに入っているから見えない. 撓(たわみ)を止めるだけなら従来の木の釣束は太すぎる				●	
No.3	1951	森博士の家	清家清	縁側　つき當りは令息室の扉, 各室の間仕切を開放すると殆んど一室の空間になる.	●				
No.4	1952	K氏邸	清水建設株式會社	釣束は真鍮製クローム鍍金				●	
No.5	1952	O氏邸	佐倉大有	欄間をすかし天井をとおし，廣々としたつながりをつくつている.	●	●			●
No.6	1953	S氏邸	槇一郎	荷重を壁體にもたせ隅柱を廃し, 障子を開けば畳廊下まで部屋とすることが出来る.	●				
No.7	1953	齋藤邸	沖種夫	C　空間の連続性 壁の上部を透かせることによつて必ず二つ以上の空間が視覚的繋がりをもつている. しかしこの場合にもプライバシイが失われてはならない. 特に暖房の煙や臭気が居間に流れ入るリヴィングキチンの方式は我国では行過ぎの嫌いがある.	●				
No.8	1953	ブロワー邸	レーモンド建築事務所	天井梁は経済的であるためと、空間をより大きく、そして高くみせるため、はだかになっており、この完全な構造によって室内のながめに面白さをあたえている。	●	●			
No.9	1953	三人姉妹の家	稲田尚之	亦狭い空間を廣く感じさせる爲にガラスのランマと色彩の變化による空間の連続性を考慮した.	●	●			●
No.10	1955	住居	丹下健三	襖の上部の欄間に必要がないかぎりガラスもはめていないのは、またその無限定性な表現がほしかったためだといえるだろう。　ここでは低い姿勢で腰掛けたとき目が空間の重心にくるようにしたかったのである。天井の高さや、欄間がガラスになっていること、また、天井と床の明るさの均衡は、そのようなところで決められてのである。	●				●
No.11	1957	丘の斜面にたつ家	伴弘好	日本間の建具は夏全部収納でき、居間はワンルームにすることができます. ランマに最近透明ガラスを嵌殺すのがはやりますが, 一部でも開けることができるように考えておかないと, 夏ばかりでなく一年中困るようです。					●
No.12	1948	与野の家	三橋真三	居間西側出入口及び飾棚をみる　ランマの透明ガラスを通して外部への広がりを持っている	●				●

表 3-6：記述リスト（建築文化）

番号	西暦	タイトル	設計者	言説	空間	天井	小壁	吊束	建具
No.1	1954	S氏邸	柴田陽三	何とかして、空間をかせぐだけかせぎ、室内の細い造作は後廻しにしようという方針で進めた。その結果中央の居間と、東側寝室との天井を連続したものとし、居間の南側に、内法上に屋根裏一杯に開口部をとり、極力大きな建具使って見たが、最初に心配した程日光に不足しないので、その点では成功したと思っている。	●				●
No.2	1956	Iさんのすまい	佐藤保隆	寝室と、和室に高度のプライヴァシイを与えて、居間・家事室・書斎を開放的にし、襖とキャビネットで、視覚的にさえぎることにとどめた	●				●
No.3	1957	M氏邸	半沢重信	中鴨居は6mm鉄角棒、ピアノ線で約5尺間に吊り三角形の板鉄物をこれに溶接して幅広の中鴨居をビス締めし、その水平を保たしめている。				●	
No.4	1958	亀甲の家	生田勉	主な生活空間は、ワンルームシステムの形態をとって、居間と食事室、家事室と仕事室は、家具間仕切として、居間と家事室、食事室と仕事室の間はランマ解放のフスマ間仕切とし、部屋の使途の限定をさけた。　空間的な解放性を強調するため、寝室と予備室を除いて、ふすまは引込になり、ランマは透明ガラス嵌め殺しである。	●				●
No.5	1959	S小住宅	山脇巌	平面の玄関、居間兼客間、畳み敷きの仕事場は厨房・浴室と共に透明ガラスの欄間によって室空間を広く感じさせた。	●				●
No.6	1960	T別荘	長倉康彦	どこから家の中か分からないものという開放的なあつかいを、居間に、日本間に、寝室にさえあたえることになり、冬季たてこむ雨戸の戸袋も外壁からはずし、押入れの部分をのぞくすべてのランマをガラス入とし、四方につきだした深いひさしとグラスライト入の四周にめぐらした障子の陰を木陰になぞらえて、方形のスペースがまとめられた。	●				●
No.7	1960	Yさんの家	阿久井喜孝	プライバシーに重点のかかることによってかなり閉鎖的と思われる室内にできるだけ解放感を与えるべく各室の天井高を揃え、室内空間と外部空間の連続性を強調し、仕上げや家具には明るい原色を積極的にとり入れた。	●	●			
No.8	1962	N氏邸	稲田建築設計事務所	天井のあつかいも、こうしたことの反映として外部の軒天は、居間、子供室の天井につながり、さらに居間の天井は一段ときりかえして下げられた材質をかえて茶の間、厨房の空間にランマでつながる。		●			●
No.9	1962	K氏邸	大成建設	山荘はやはり切妻を豊かに表現するように心がけ、空間を外から内に、また内から外へと自然のつながりを持たせることを生命と考えた。居間を中心に、透明なガラスらんまを通した深い庇と居間の延長のベランダでこれらを求めた。		●			●
No.10	1962	K氏邸（1）	山田水城建築設計事務所	居間の天井はそのまま外部ののき裏に続き、室内外の連続感を強調したものである。		●			

3-6-1　空間

内法上や隣室を含めた居室全体の空間についての記述は他の 3 つの記述の比べ最も多くあった。『新建築』では 9 作品、『建築文化』では 6 作品であった。その中からまず 1958 年の生田勉による“亀甲の家”（建築文化）をみると次のような記述が見られた。

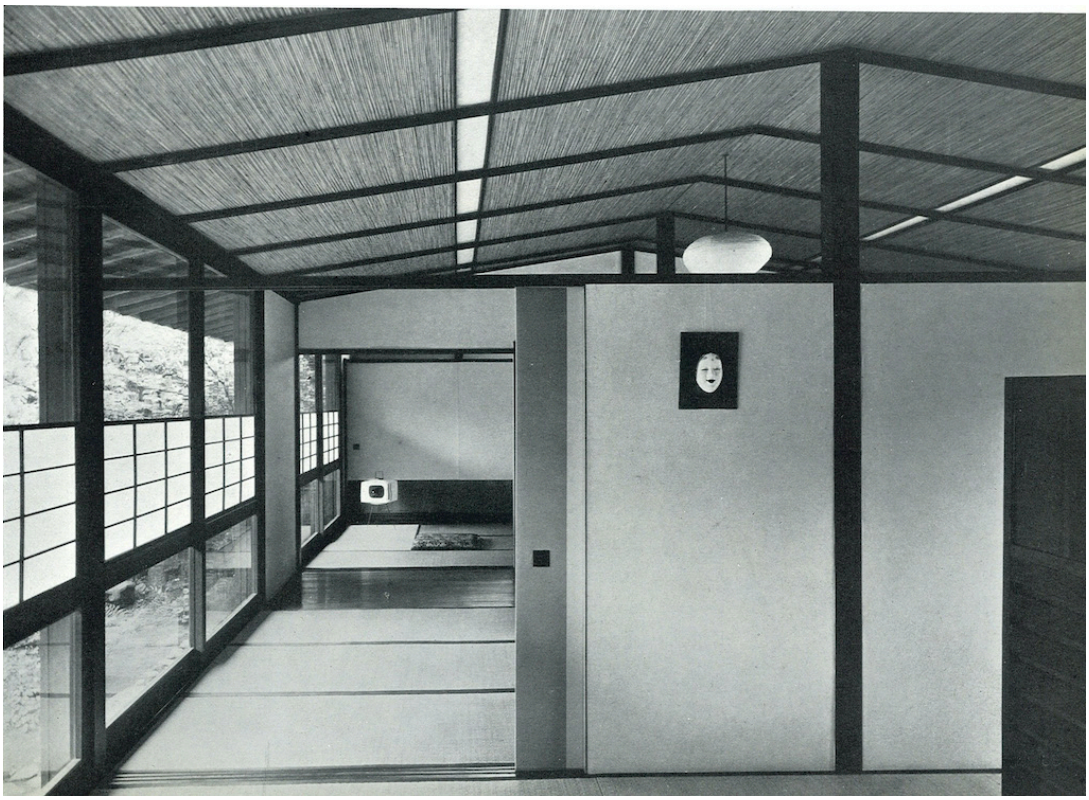


図 3-44：生田勉：亀甲の家

「主な生活空間は、ワンルームシステムの形態をとって、居間と食事室、家事室と仕事室は、家具間仕切として、居間と家事室、食事室と仕事室の間はランマ解放のフスマ間仕切とし、部屋の使途の限定をさけた。　空間的な解放性を強調するため、寝室と予備室を除いて、ふすまは引込になり、ランマは透明ガラス嵌め殺しである。」

このように空間を開放的に扱うことを目的として、内法上の小壁を省略し、建具はガラスによって抜けた意匠にしていることがわかる。このような内法上による居室同士の開放性や連続性による記述は『新建築』および『建築文化』で 5 作品ずつあった。

その他に 1953 年の沖種夫による“齋藤邸”(新建築)をみると次のような記述が見られた。

C　空間の連続性

「壁の上部を透かせることによつて必ず二つ以上の空間が視覚的繋がりをもつている．しかしこの場合にもプライバシイが失われてはならない．特に暖房の煙や臭気が居間に流れ入るリヴィングキチンの方式は我国では行過ぎの嫌いがある.」

齋藤邸では先ほどのように空間の開放性や連続性についての記述が見られる。ここではさらに内法上が開放的になったことで厨房の空気が居室に混入してしまうことについて指摘されている。このような環境面についての記述はこれ以外見られなかった。

以上のように内法上の“空間”に関しては、居室や隣室同士の空間の開放性や連続性についての記述がみられた。ここでは居室や隣室同士の空間の開放的にするために内法上の小壁を省略することや建具にガラスのはめ殺しを用いることが示されている。ただし、開放的に扱う中で居室内の臭気が建物全体に広がらないようにすることが指摘されている。

3-6-2　天井

内法上装置の要素の内、天井についての記述は『新建築』で 3 作品、『建築文化』で 4 作品あった。その中からまず 1952 年の佐倉大有による“O 氏邸”（新建築）をみると次のような記述が見られた。

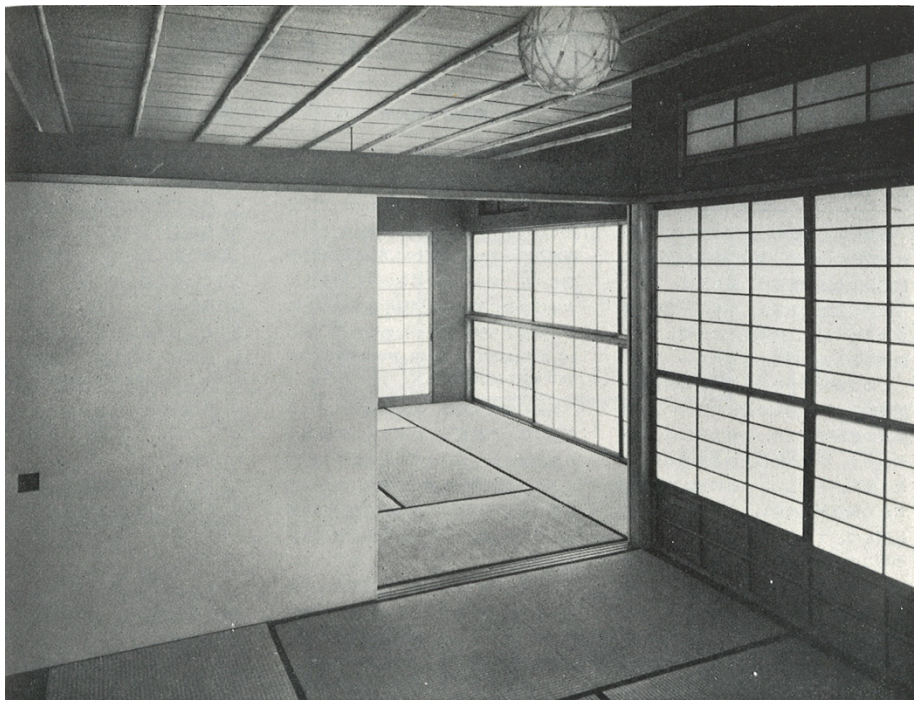


図 3-45：佐倉大有：O 氏邸

「欄間をすかし天井をとおし，廣々としたつながりをつくつている.」

“O 氏邸”では竿縁天井の竿縁を隣室間で連続させることで空間のつながりを強調している。このように天井面の操作によって隣室間や建物の内部と外部の連続性を強調させようとした記述は『新建築』で 2 作品、『建築文化』で 4 作品であった。この中で、1953 年のレーモンド建築事務所による“ブロワー邸”（新建築）をみると次のような記述が見られた。

「天井梁は経済的であるためと、空間をより大きく、そして高くみせるため、はだかになっており、この完全な構造によって室内のながめに面白さをあたえている。」

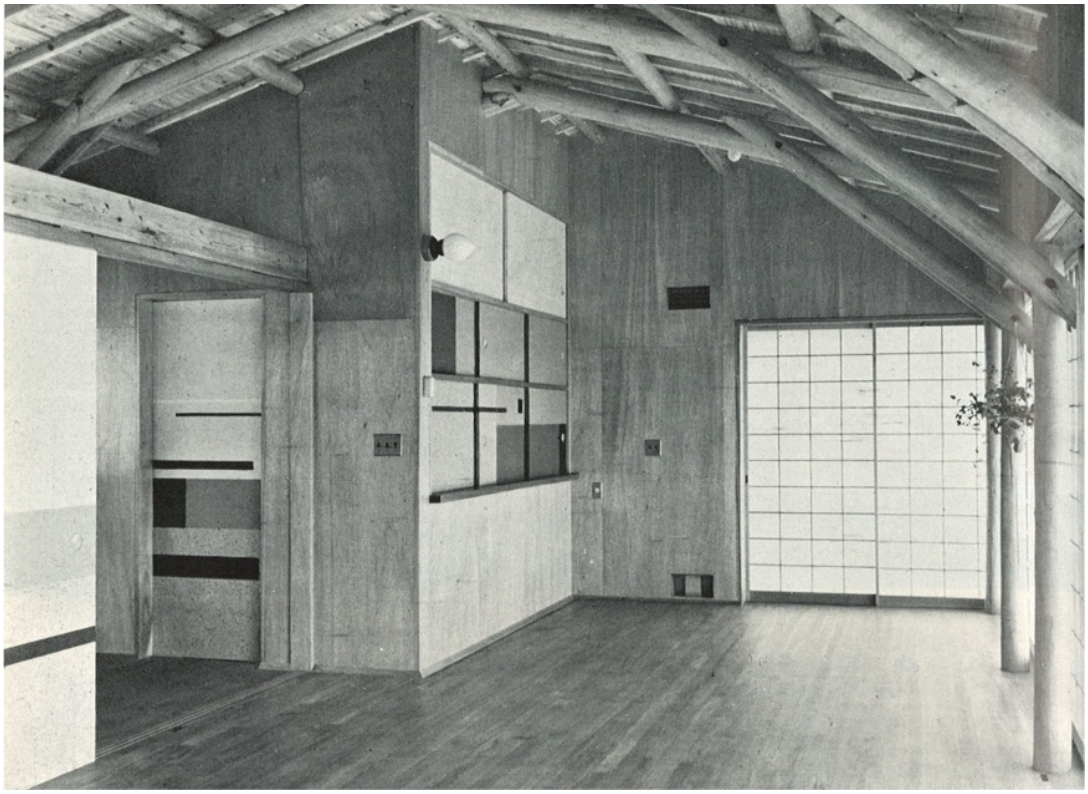


図 3-46：レーモンド建築事務所：ブロワー邸

ここでは、隣室間で連続した天井の梁によって空間の開放性を高めていることが記述されている。建物の内部と外部の連続性を強調させる記述としては、1962 年の山田水城建築設計事務所による“K 氏邸”（建築文化）をみると次のような記述が見られた。

図 3-47：山田水城建築設計事務所：K 氏邸

「居間の天井はそのまま外部ののき裏に続き、室内外の連続感を強調したものである。」

『建築文化』の 4 作品すべてには、このように軒天と天井面の高さをそろえることで室内外の連続を強調することが記述されていた。

以上のように内法上の“天井”に関しては、天井面の竿縁や目地を隣室間で通すことや、建物の内部と外部の天井高をそろえることで連続性を強調することが記述されていた。

3-6-3　吊束

内法上装置の要素の内、吊束についての記述は『新建築』で 2 作品、『建築文化』で 1 作品あった。その中からまず 1957 年の半沢重信による“M 氏邸”（建築文化）をみると次のような記述が見られた。

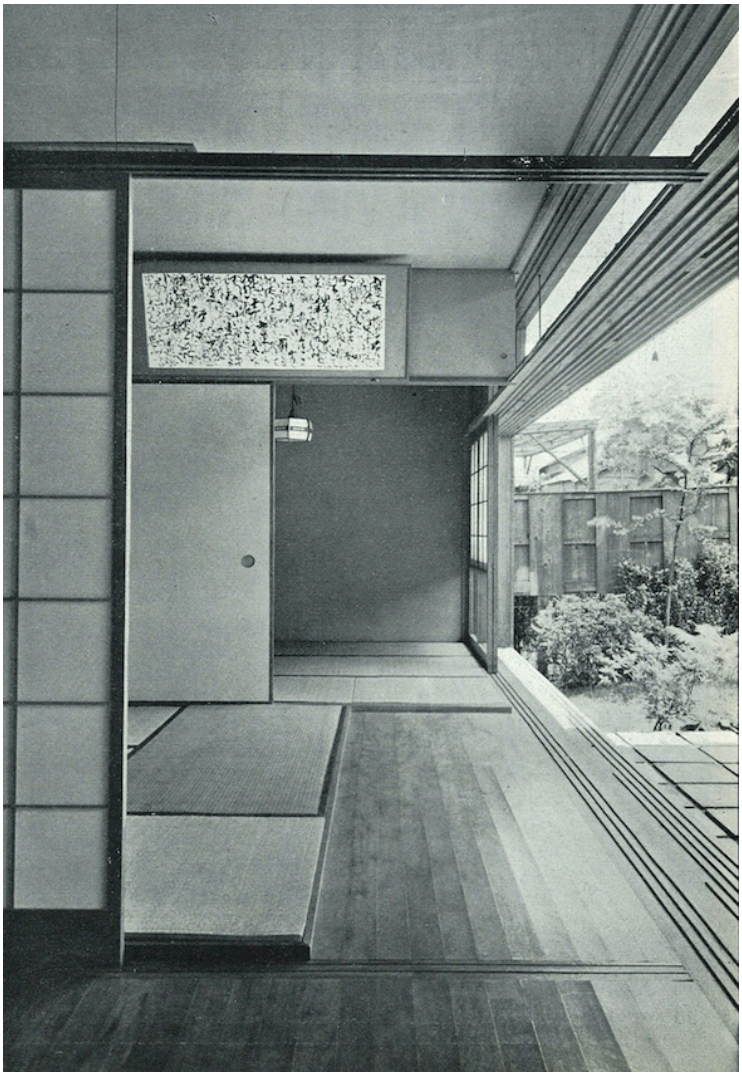


図 3-48：半沢重信：M 氏邸

「中鴨居は 6mm 鉄角棒、ピアノ線で約 5 尺間に吊り三角形の板鉄物をこれに溶接して幅広の中鴨居をビス締めし、その水平を保たしめている。」

このように吊束を鉄や銅によるものにした記述は、3 作品すべてにあった。また、1951 年の清家清による“森博士の家”（新建築）をみると次のような記述が見られた。

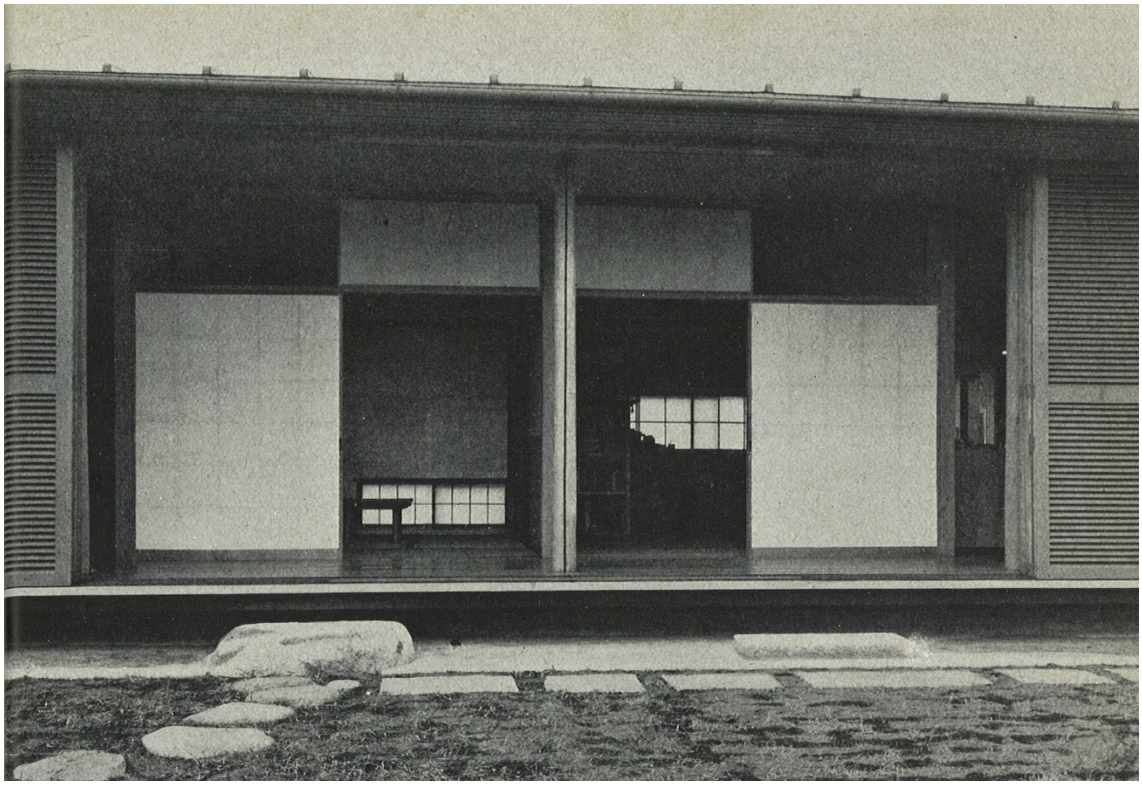


図 3-49：清家清：森博士の家

「障子の鴨居は銅線で釣ってあるが銅線は引違い欄間障子の召合せに入っているから見えない．撓(たわみ)を止めるだけなら従来の木の釣束は太すぎる」

ここでも吊束を銅線にしたことが記述されている。さらに吊束の位置に関して、障子の召合せにすることでより吊束が見えないように工夫している。

以上のように内法上の“吊束”に関しては、吊束を鉄材に変えたこととその位置についての記述が確認できた。

3-6-4　建具

内法上装置の要素の内、建具についての記述は『新建築』で 5 作品、『建築文化』で 8 作品あった。その中からまず 1952 年の佐倉大有による“O 氏邸”（新建築）をみると次のような記述が見られた。

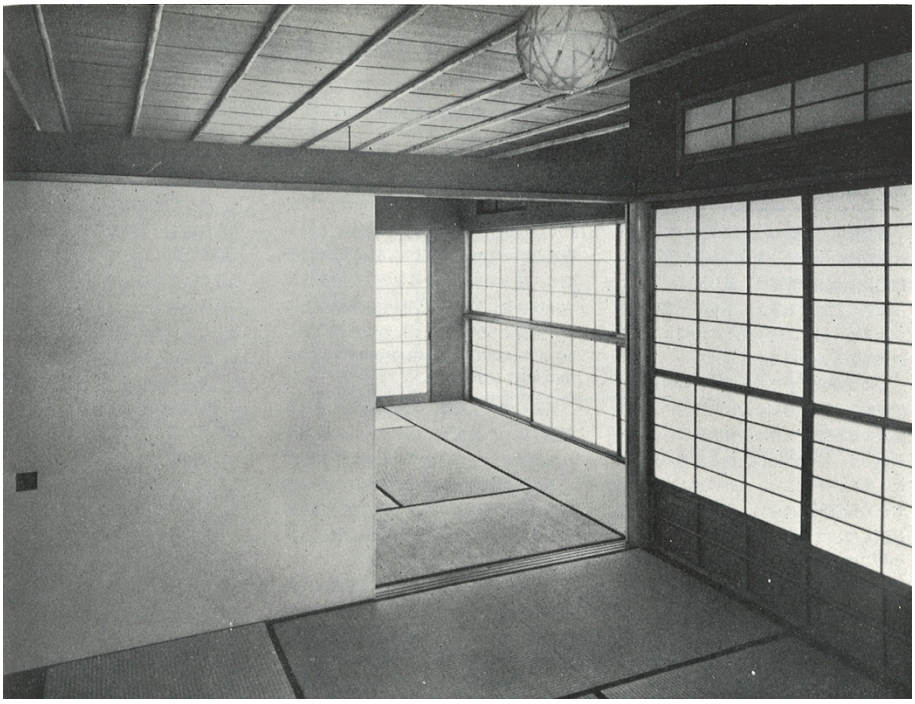


図 3-50：佐倉大有：O 氏邸

「欄間をすかし天井をとおし，廣々としたつながりをつくつている.」

このように、建具を抜いて内法上を開放的に扱うことが記述されたものは、『新建築』では 2 作品、『建築文化』では 2 作品であった。記述の中では建具を抜くことで隣室との開放性や連続性を強調させることが確認できた。また、1959 年の山脇巌による“S 小住宅”（建築文化）をみると次のような記述が見られた。

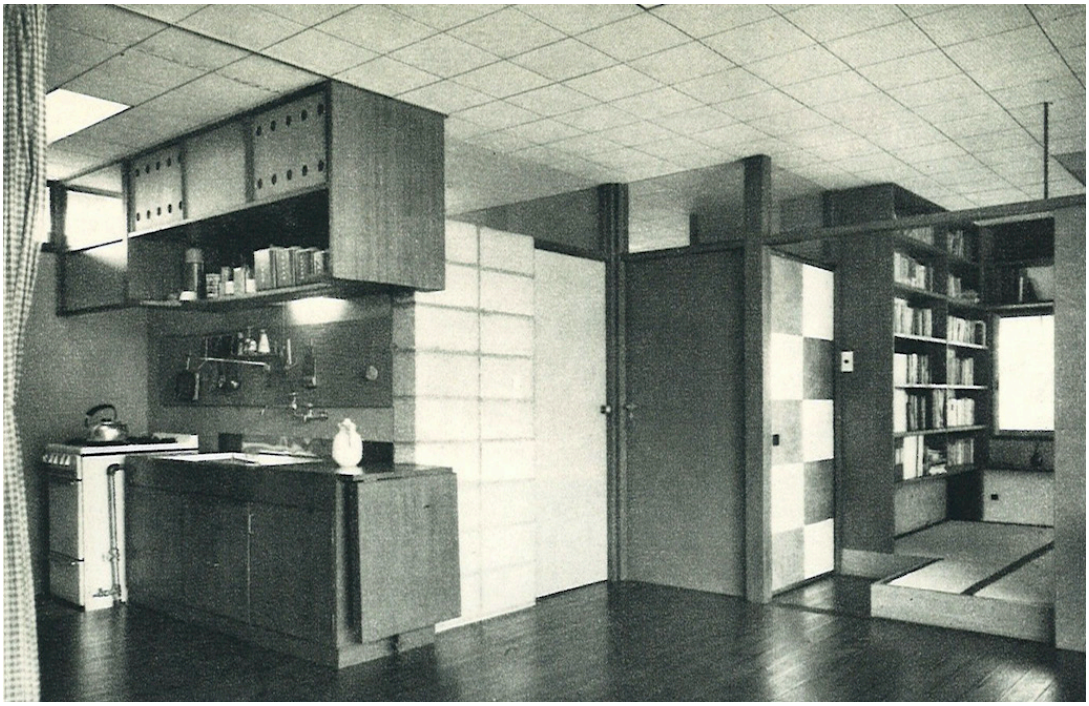


図 3-51：山脇巌：S 小住宅

「平面の玄関、居間兼客間、畳み敷きの仕事場は厨房・浴室と共に透明ガラスの欄間によって室空間を広く感じさせた。」

このように、建具をガラスのはめ殺戸にする記述は、『新建築』で 4 作品、『建築文化』では 6 作品であった。記述の中では建具が無い作品と同様に、ガラスのはめ殺し戸にすることで隣室との開放性や連続性を強調させることが確認できた。建具にはこの他に 1962 年の佐藤秀工務店による“1.2M モジュールによる住宅”（建築文化）をみると次のような記述が見られた。

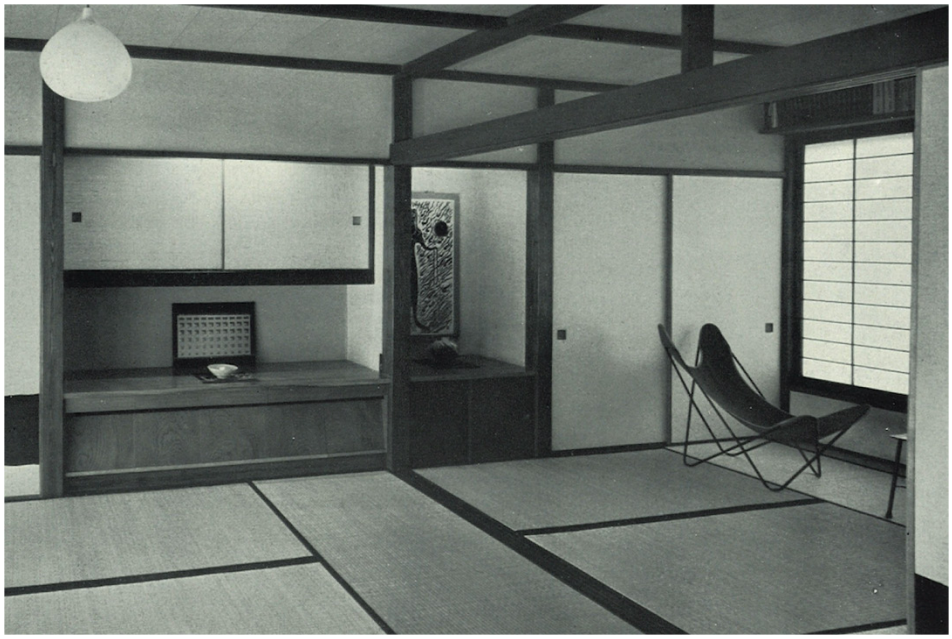


図 3-52：佐藤秀工務店：1.2M モジュールによる住宅

「らん間：ガラスはめ殺し，かもいの中に蛍光灯を入れた」

ここでも建具をガラスのはめ殺しにすることが記述されている。さらに、鴨居に蛍光灯を入れることが記述されている。つまり鴨居が天井や内法上を照らす照明器具として機能していることが記述されている。このような鴨居を照明器具とした記述は他に見られなかった。ただし詳細図分析の中で、藤本武男による“K 氏邸”（図 3-42、図 3-43）では同様に鴨居を照明器具とした例を見ることができた。

以上のように内法上の“建具”に関しては、空間の開放性や隣室との連続性を作るために、建具を抜くまたは建具をガラスのはめ殺しにすることが確認できた。また、鴨居は天井や内法上を照らす照明を設置するための場所としていることが確認できた。

3-7　小括

3 章では、内法上に関する詳細図や記述によって開放的な内法上装置の意匠について分析した。図 3-53 はそれらの特徴を示したものである。

各要素について確認すると、まず要素を省略する意匠は吊束を除いて、全ての要素でみられる。次に他の要素に代用する詳細は、天井では、構造体を表出させるもの、小壁では束の代わりに力貫を用いたもの、吊束では木製の束から鉄製に代わったものをみることができる。最後に、別の要素を追加する意匠は、全てでみられ、ベニヤ天井やガラスのはめ殺し戸といった新しい材料によるものがみられる。天井では、目透かし天井の目地が床挿になる作品をみることができた。

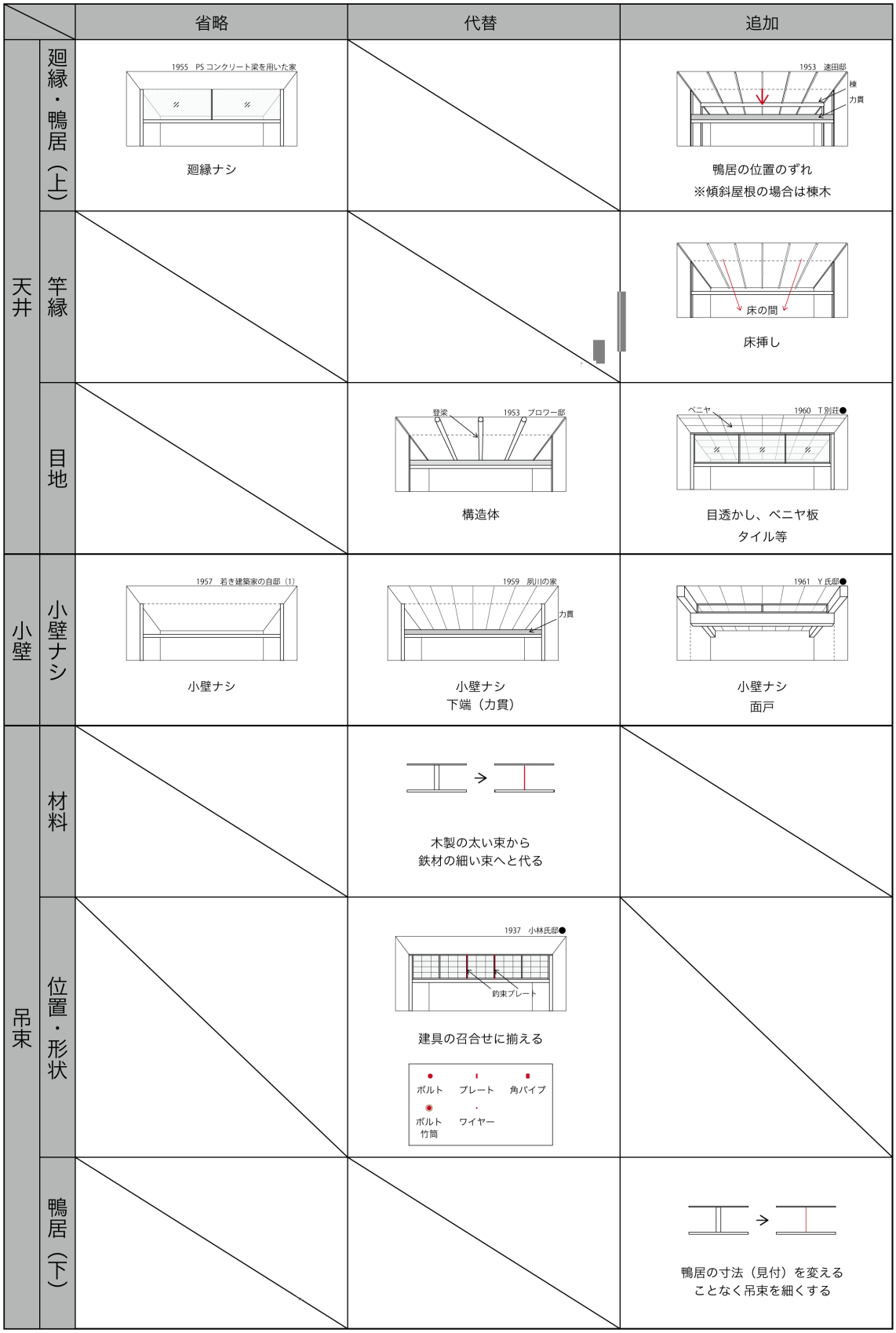


図 3-53：詳細図、記述による開放的な内法上装置の特徴

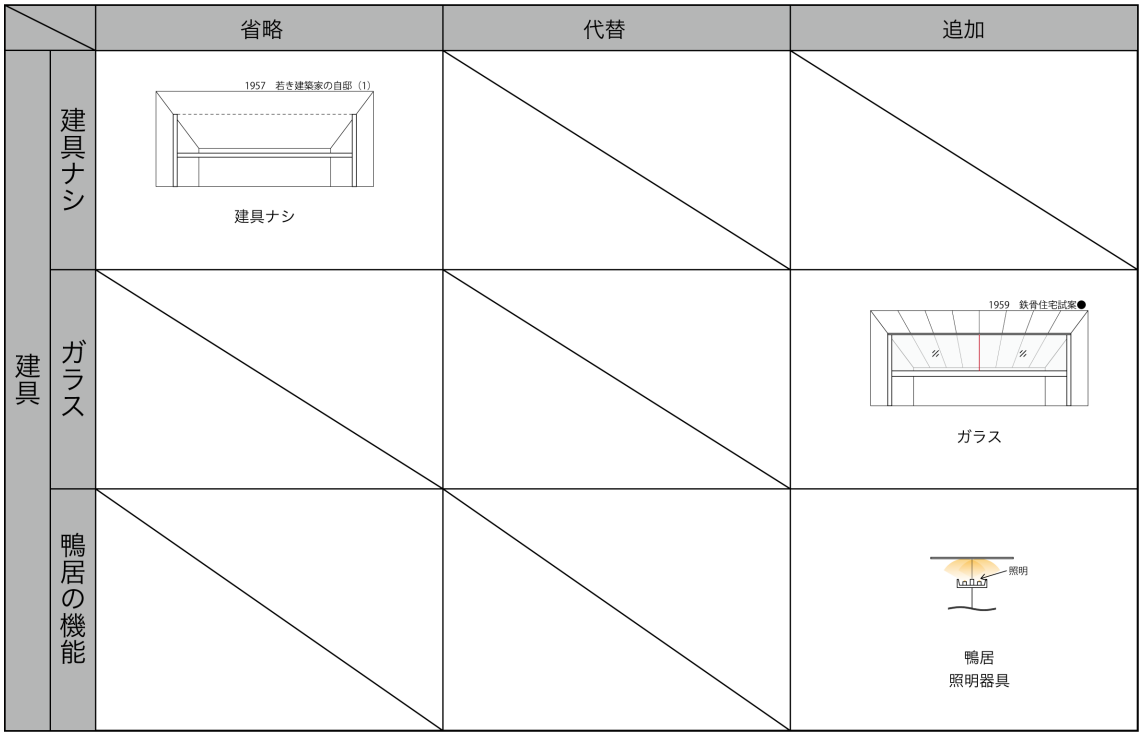


図 3-53：詳細図、記述による開放的な内法上装置の特徴

記述分析からは、開放的な内法上の設計意図をみることができた。その中で特に、プライバシーを保つために内法下は閉鎖的にしながら内法上は開放的に扱うことが明らかとなった。また、経済性から天井梁を表出させたことで、内法上が開放的になることも明らかとなった。

第 4 章　　結論

4 章　結論

1 章で確認した近世の開放的な内法上装置と 2 章および 3 章で分析した開放的な内法上装置の主な特徴を図 4-1 に示す。図 4-1 は近世と近現代の開放的な内法上装置を内法上の 4 つの要素に分けてまとめている。

まず天井についてみると、近世の古い民家は天井を貼らないため小屋組が見えた状態である。また、天井がある場合は竿縁天井の竿縁が隣室へ連続した意匠を持っている。これに対して近現代の開放的な内法上装置は、天井材の種類が竿縁天井だけでなく、目透かし天井やベニヤ板の天井など数多くの材料をみることができる。また、天井にある棟をみると、隣室間の建具がある位置とずらした意匠をみることができた。次に小壁をみると、近世は近現代と同様に小壁が全く無い作品をみることができた。ただし、鴨居を支える要素として、吊束あるいは力貫は必ず入れなくてはならない。また、近現代の小壁をみると、面戸にガラスをはめた意匠をみることができた。さらに吊束をみると、近世は鴨居を支えるために木製の太い吊束がつけられている。これに対して近現代の内法上装置をみると、鉄材による吊束をみることができる。鉄材による吊束は極めて細く、内法上を開放的にすることができている。最後に建具をみると、近世の開放的な内法上の建具は、建具が省略されている作品の他、竹の節欄間や筬欄間のように伝統的な欄間による意匠をみることができた。これに対して近現代の内法上装置をみると、建具が省略されたものの他、前面にガラスのはめ殺しがついた意匠がみられた。ガラスによって視覚的な隣室とつながりを維持しながら、暖房の空気や厨房の臭気を拡散させないようにできる。

以上の結果から、近世から近現代の内法上装置は明らかに変化していることがわかる。それらをみると、近世の内法上から近現代の内法上は 3 つの変化をみることができる。まず 1 つ目は、“材料の更新”である。近現代には天井材や吊束の鉄材、建具のガラスなど材料が多様化していることがわかる。2 つ目は、“小屋、天井の操作”である。屋根の架け方や天井の貼り方が多用したことで、内法上の棟をずらすことや構造体を表出するような新しい意匠をみることができる。最後に、“日本建築の禁忌に対する許容”である。日本建築では、畳の目地や竿縁天井の竿縁の方向が床の間へ向かう床挿が望ましく無いとされている。しかし、近現代の作品をみると、内法上の開放性や連続性のために竿縁や目透かし天井の目地が床挿になることが確認できた。つまり近現代の和室においてはこのような日本建築の禁忌は許容される、または重要視されなくなることがわかる。

このような変化は、居室のプライバシーや建物の経済性を保つことを背景として、戦後さかんになっていったと考えられる。

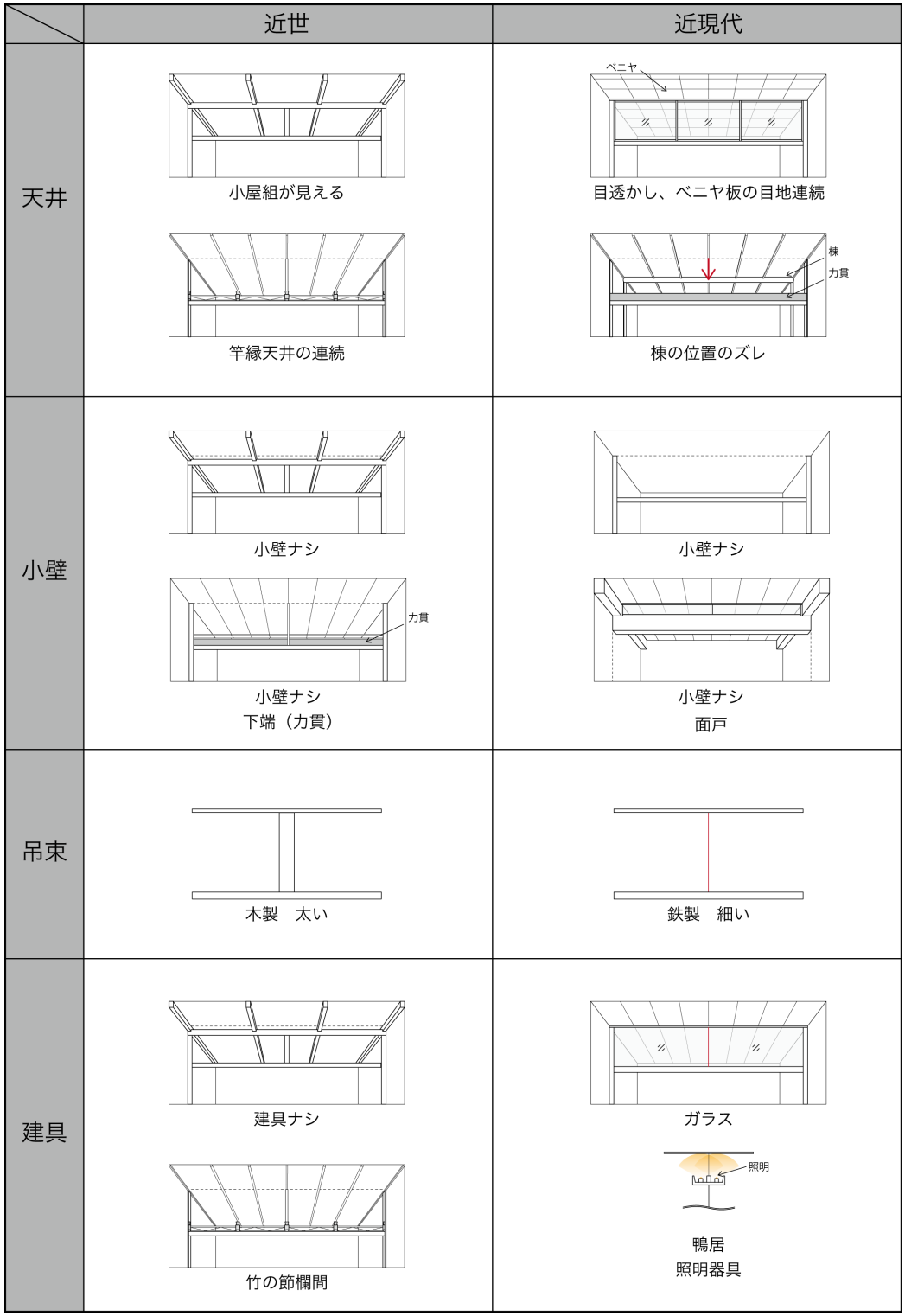


図 4-1：近世と近現代の開放的な内法上装置の特徴

参考文献

・『日本の住まいⅡ』（西山夘三,勁草書房,1976 年）
・『内法上の建築的装置に着目した＜座敷列＞に関する研究』　（光井渉,日本建築学会計画系論文集、2006 年 2 月）
・『初期書院造の空間構成に関する研究』（光井渉,2009 年）
・『方丈建築の空間構成に関する研究』（光井渉,2014 年）
・『桂離宮』（中村昌生、鈴木喜吉,小学館、1995）
・『日本の民家』（吉田靖,学習研究所、1981）

謝辞

本論文を作成するにあたり、ご指導いただきました三重大学 大井隆弘先生、大井研究室のみなさまには感謝の意を表すとともに厚く御礼申し上げます。

資料

『新建築』および『建築文化』から抽出した和室にある内法上装置について模式的な図にして整理した。図 5-1 はその例である。右上には掲載年と作品名を記載している。下にある数字は内法上のある開口の間口を示している。特徴的な部材や意匠については、適宜その場所と説明を加えている。

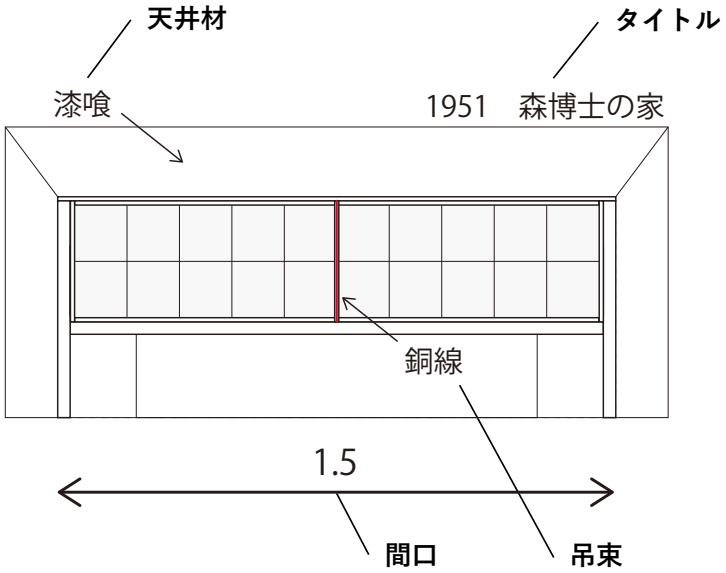
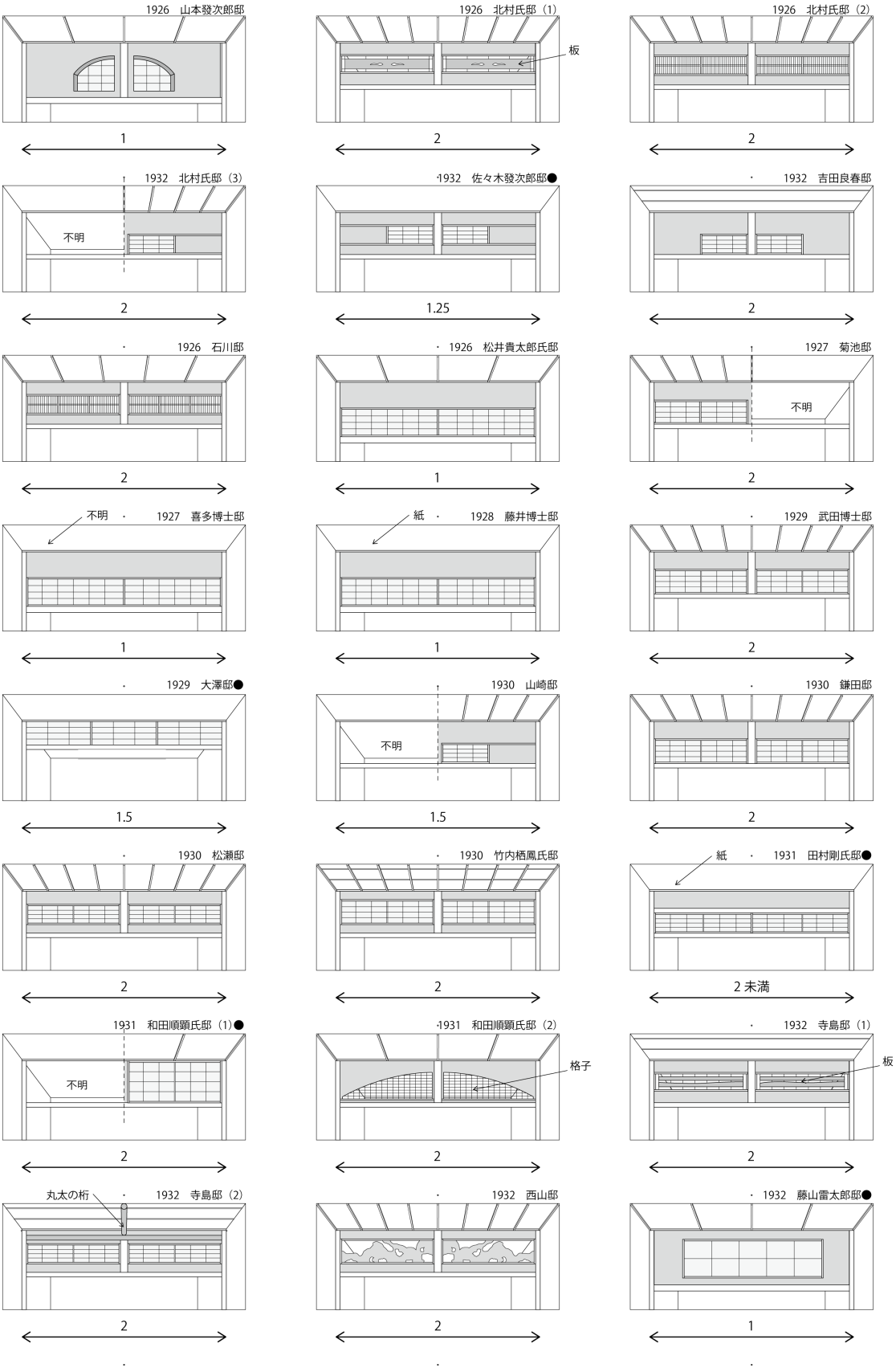
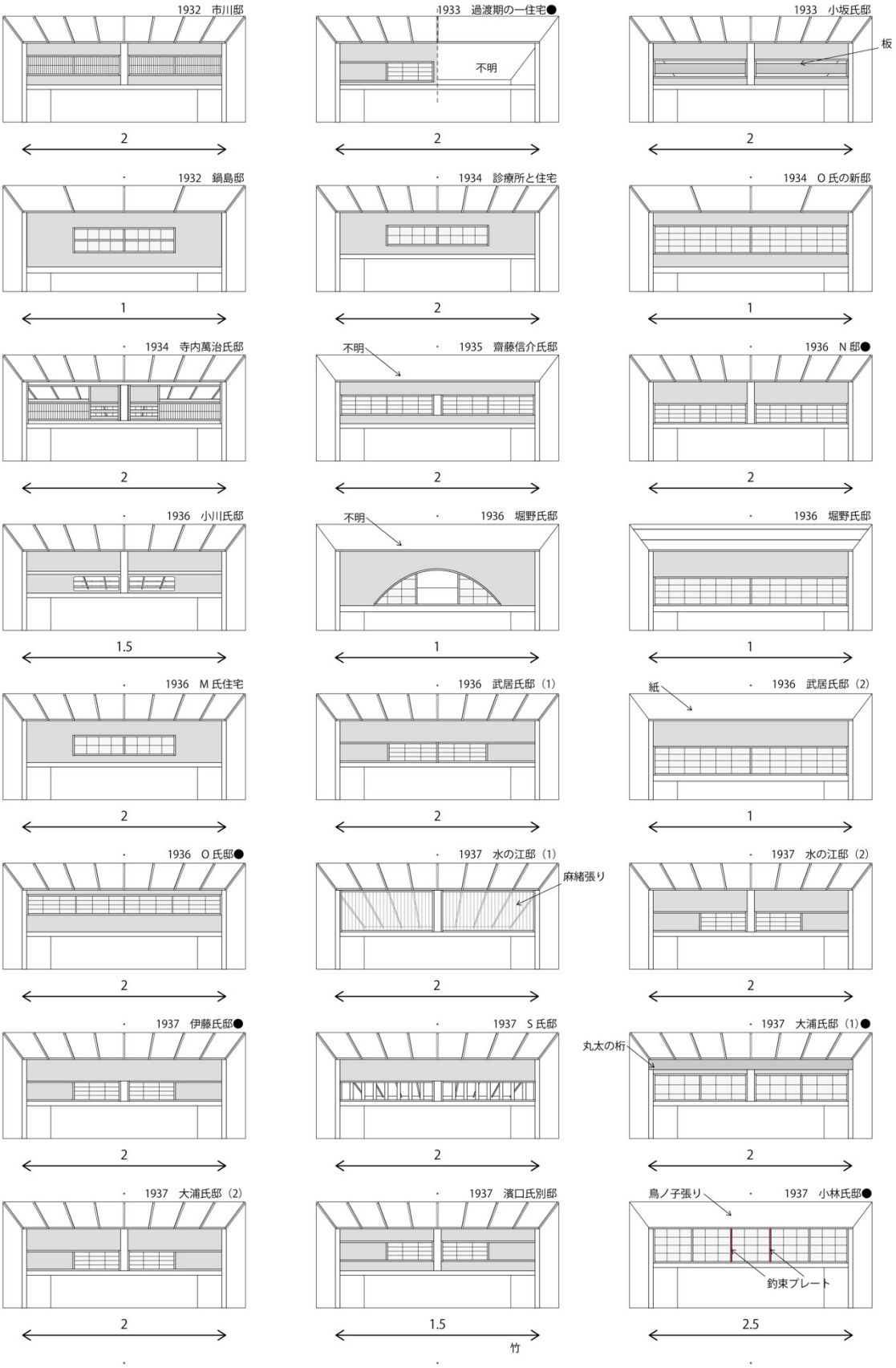


図 5-1：模式図の例

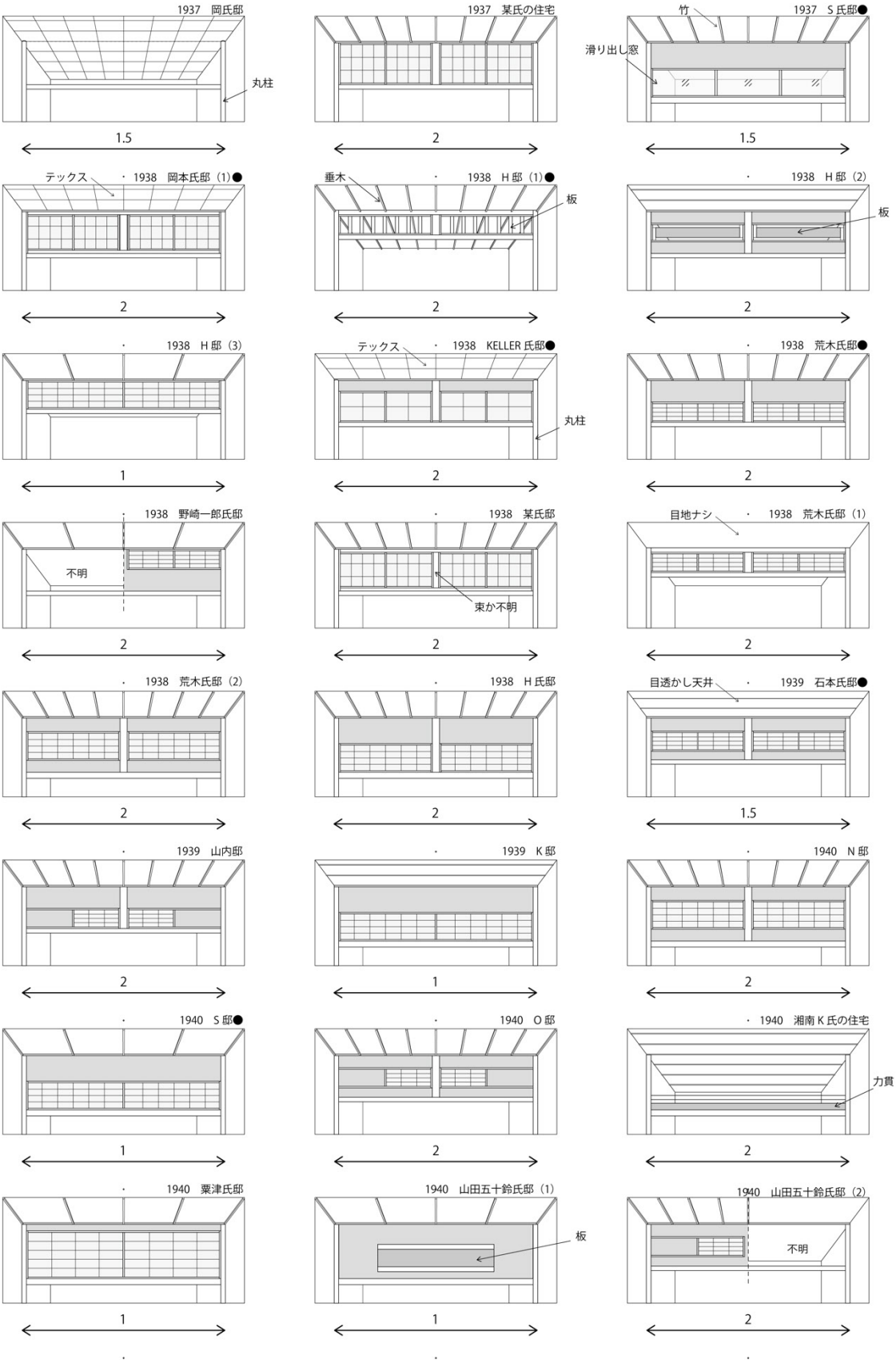
『新建築』


1926　山本發次郎邸
1
1926　北村氏邸（1）
板
2
1926　北村氏邸（2）
2
1932　北村氏邸（3）
不明
2
1932　佐々木發次郎邸●
1.25
1932　吉田良春邸
2
1926　石川邸
2
1926　松井貴太郎氏邸
1
1927　菊池邸
不明
2
不明
1927　喜多博士邸
1
紙
1928　藤井博士邸
1
1929　武田博士邸
2
1929　大澤邸●
1.5
1930　山崎邸
不明
1.5
1930　鎌田邸
2
1930　松瀬邸
2
1930　竹内栖鳳氏邸
2
紙
1931　田村剛氏邸●
2 未満
1931　和田順顕氏邸（1）●
不明
2
1931　和田順顕氏邸（2）
格子
2
1932　寺島邸（1）
板
2
丸太の桁
1932　寺島邸（2）
2
1932　西山邸
2
1932　藤山雷太郎邸●
1

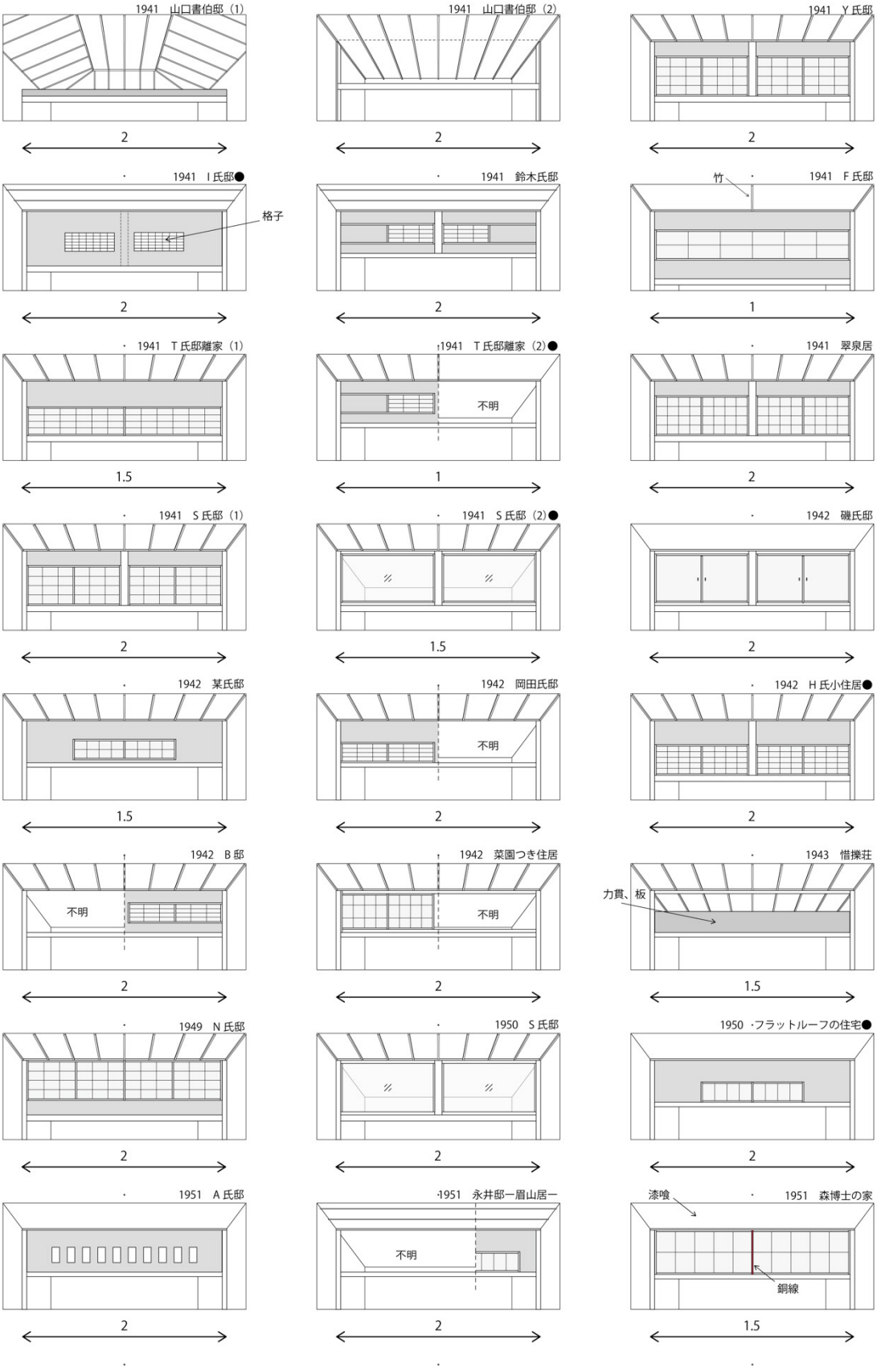
『新建築』


1932　市川邸
2
1933　過渡期の一住宅●
不明
2
1933　小坂氏邸
板
2
1932　鍋島邸
1
1934　診療所と住宅
2
1934　O 氏の新邸
1
1934　寺内萬治氏邸
2
不明
1935　齋藤信介氏邸
2
1936　N 邸●
2
1936　小川氏邸
1.5
不明
1936　堀野氏邸
1
1936　堀野氏邸
1
1936　M 氏住宅
2
1936　武居氏邸（1）
2
紙
1936　武居氏邸（2）
1
1936　O 氏邸●
2
1937　水の江邸（1）
麻緒張り
2
1937　水の江邸（2）
2
1937　伊藤氏邸●
2
1937　S 氏邸
2
丸太の桁
1937　大浦氏邸（1）●
2
1937　大浦氏邸（2）
2
1937　濱口氏別邸
1.5
竹
鳥ノ子張り
1937　小林氏邸●
釣束プレート
2.5

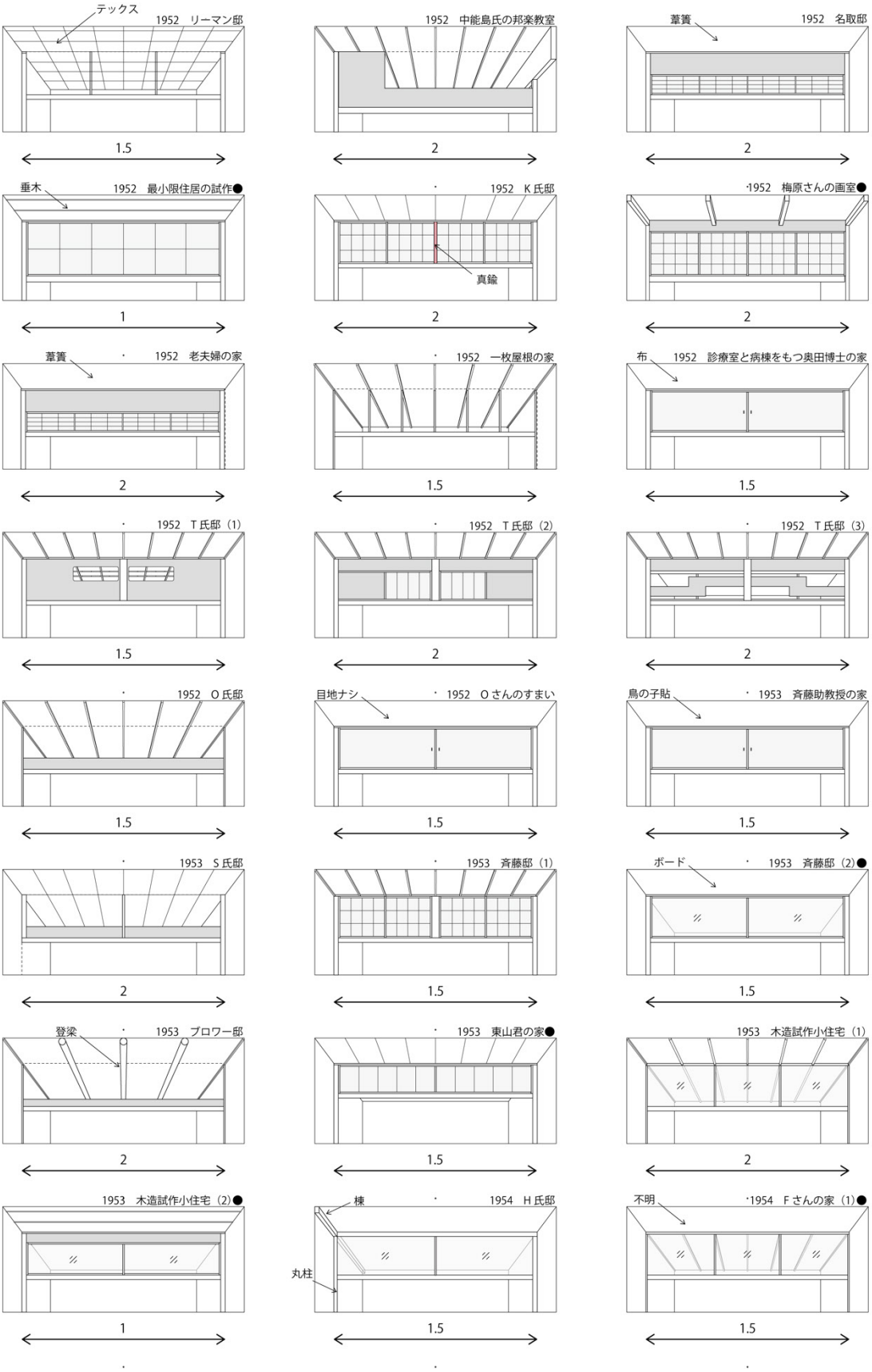
『新建築』


1937　岡氏邸
丸柱
1.5
1937　某氏の住宅
2
竹
1937　S 氏邸●
滑り出し窓
1.5
テックス
1938　岡本氏邸（1）●
2
垂木
1938　H 邸（1）●
板
2
1938　H 邸（2）
板
2
1938　H 邸（3）
1
テックス
1938　KELLER 氏邸●
丸柱
2
1938　荒木氏邸●
2
1938　野崎一郎氏邸
不明
2
1938　某氏邸
束か不明
2
目地ナシ
1938　荒木氏邸（1）
2
1938　荒木氏邸（2）
2
1938　H 氏邸
2
目透かし天井
1939　石本氏邸●
1.5
1939　山内邸
2
1939　K 邸
1
1940　N 邸
2
1940　S 邸●
1
1940　O 邸
2
1940　湘南 K 氏の住宅
力貫
2
1940　粟津氏邸
1
1940　山田五十鈴氏邸（1）
板
1
1940　山田五十鈴氏邸（2）
不明
2

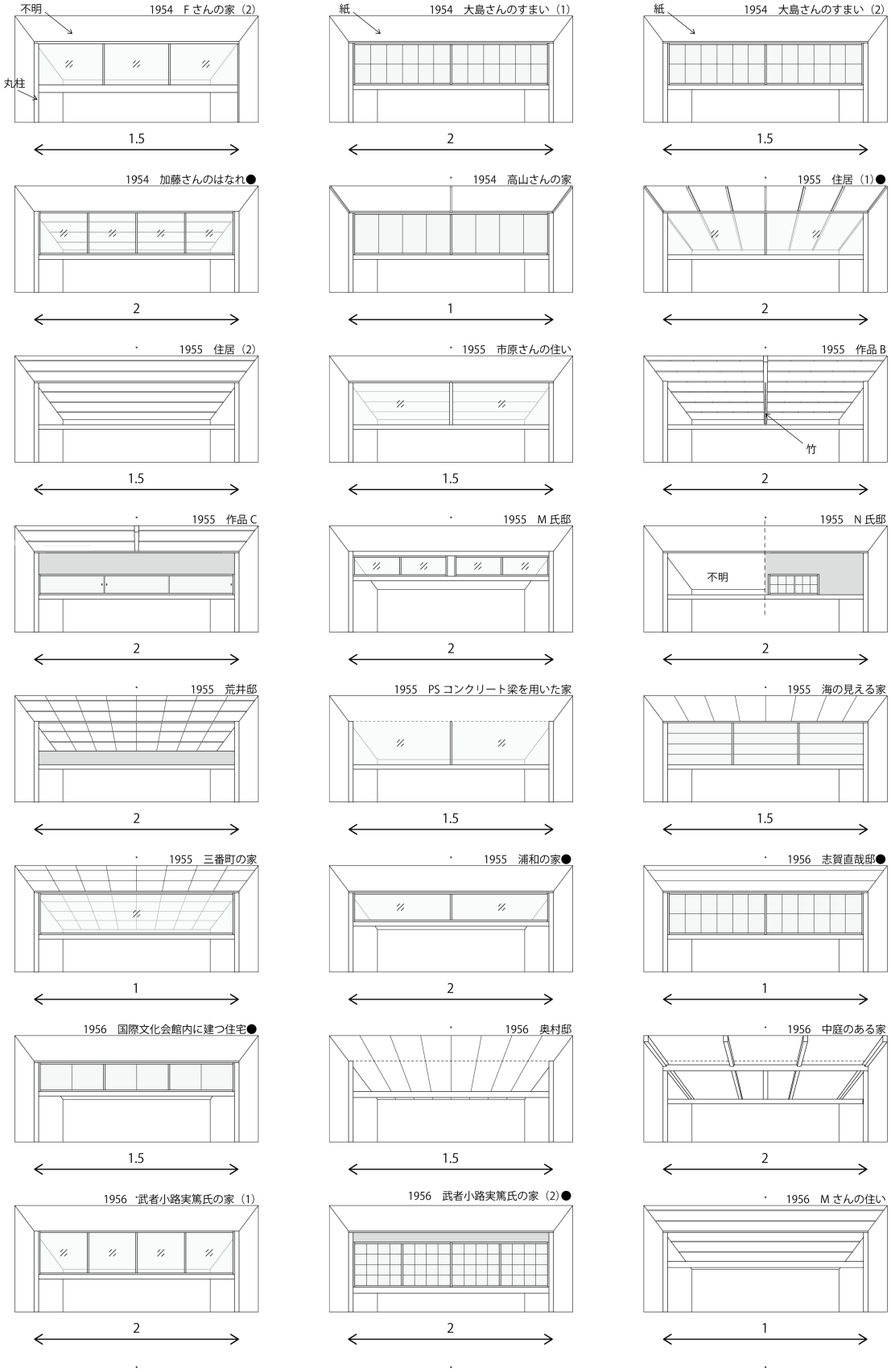
『新建築』


1941　山口書伯邸（1）
2
1941　山口書伯邸（2）
2
1941　Y 氏邸
2
1941　I 氏邸●
格子
2
1941　鈴木氏邸
2
竹
1941　F 氏邸
1
1941　T 氏邸離家（1）
1.5
1941　T 氏邸離家（2）●
不明
1
1941　翠泉居
2
1941　S 氏邸（1）
2
1941　S 氏邸（2）●
1.5
1942　磯氏邸
2
1942　某氏邸
1.5
1942　岡田氏邸
不明
2
1942　H 氏小住居●
2
1942　B 邸
不明
2
1942　菜園つき住居
不明
2
1943　惜操荘
力貫、板
1.5
1949　N 氏邸
2
1950　S 氏邸
2
1950 ・フラットルーフの住宅●
2
1951　A 氏邸
2
1951　永井邸ー眉山居ー
不明
2
漆喰
1951　森博士の家
銅線
1.5

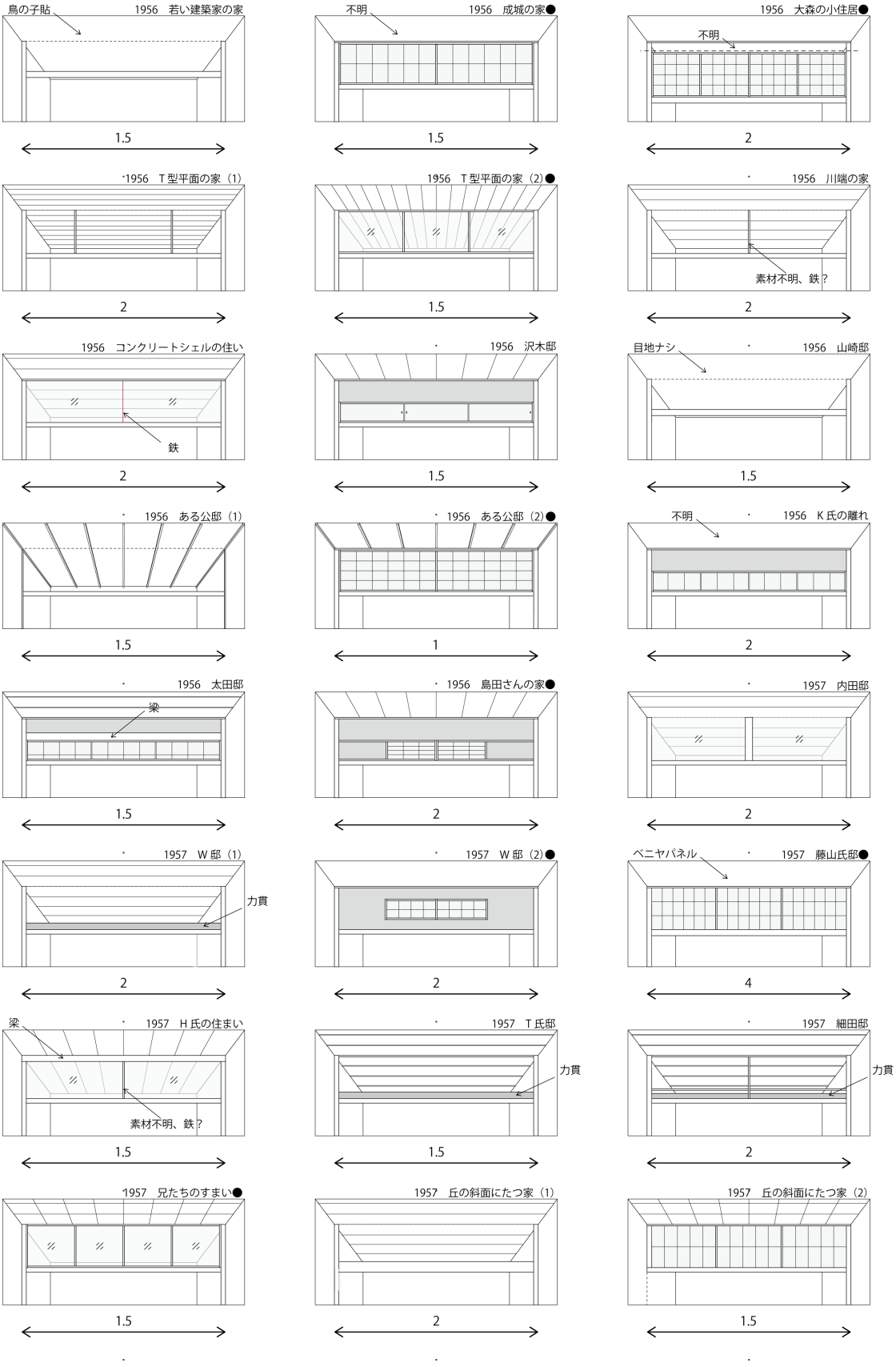
『新建築』


テックス
1952　リーマン邸
1.5
1952　中能島氏の邦楽教室
2
葦簀
1952　名取邸
2
垂木
1952　最小限住居の試作●
1
1952　K 氏邸
真鍮
2
1952　梅原さんの画室●
2
葦簀
1952　老夫婦の家
2
1952　一枚屋根の家
1.5
布
1952　診療室と病棟をもつ奥田博士の家
1.5
1952　T 氏邸（1）
1.5
1952　T 氏邸（2）
2
1952　T 氏邸（3）
2
1952　O 氏邸
1.5
目地ナシ
1952　O さんのすまい
1.5
鳥の子貼
1953　斉藤助教授の家
1.5
1953　S 氏邸
2
1953　斉藤邸（1）
1.5
ボード
1953　斉藤邸（2）●
1.5
登梁
1953　プロワー邸
2
1953　東山君の家●
1.5
1953　木造試作小住宅（1）
2
1953　木造試作小住宅（2）●
1
棟
1954　H 氏邸
丸柱
1.5
不明
1954　F さんの家（1）●
1.5

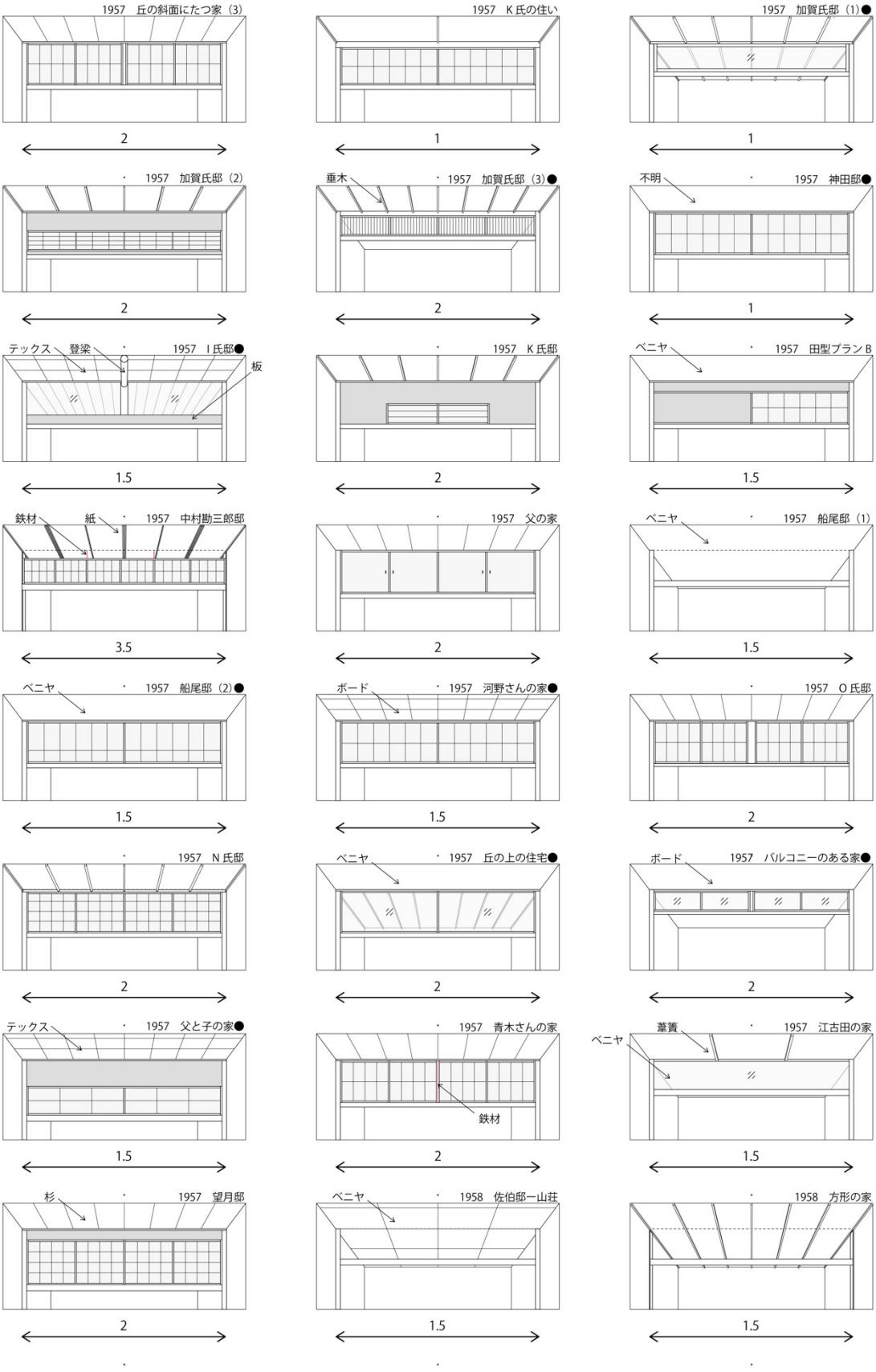
『新建築』


不明
1954　F さんの家（2）
丸柱
1.5
紙
1954　大島さんのすまい（1）
2
紙
1954　大島さんのすまい（2）
1.5
1954　加藤さんのはなれ●
2
1954　高山さんの家
1
1955　住居（1）●
2
1955　住居（2）
1.5
1955　市原さんの住い
1.5
1955　作品 B
竹
2
1955　作品 C
2
1955　M 氏邸
2
1955　N 氏邸
不明
2
1955　荒井邸
2
1955　PS コンクリート梁を用いた家
1.5
1955　海の見える家
1.5
1955　三番町の家
1
1955　浦和の家●
2
1956　志賀直哉邸●
1
1956　国際文化会館内に建つ住宅●
1.5
1956　奥村邸
1.5
1956　中庭のある家
2
1956　武者小路実篤氏の家（1）
2
1956　武者小路実篤氏の家（2）●
2
1956　M さんの住い
1

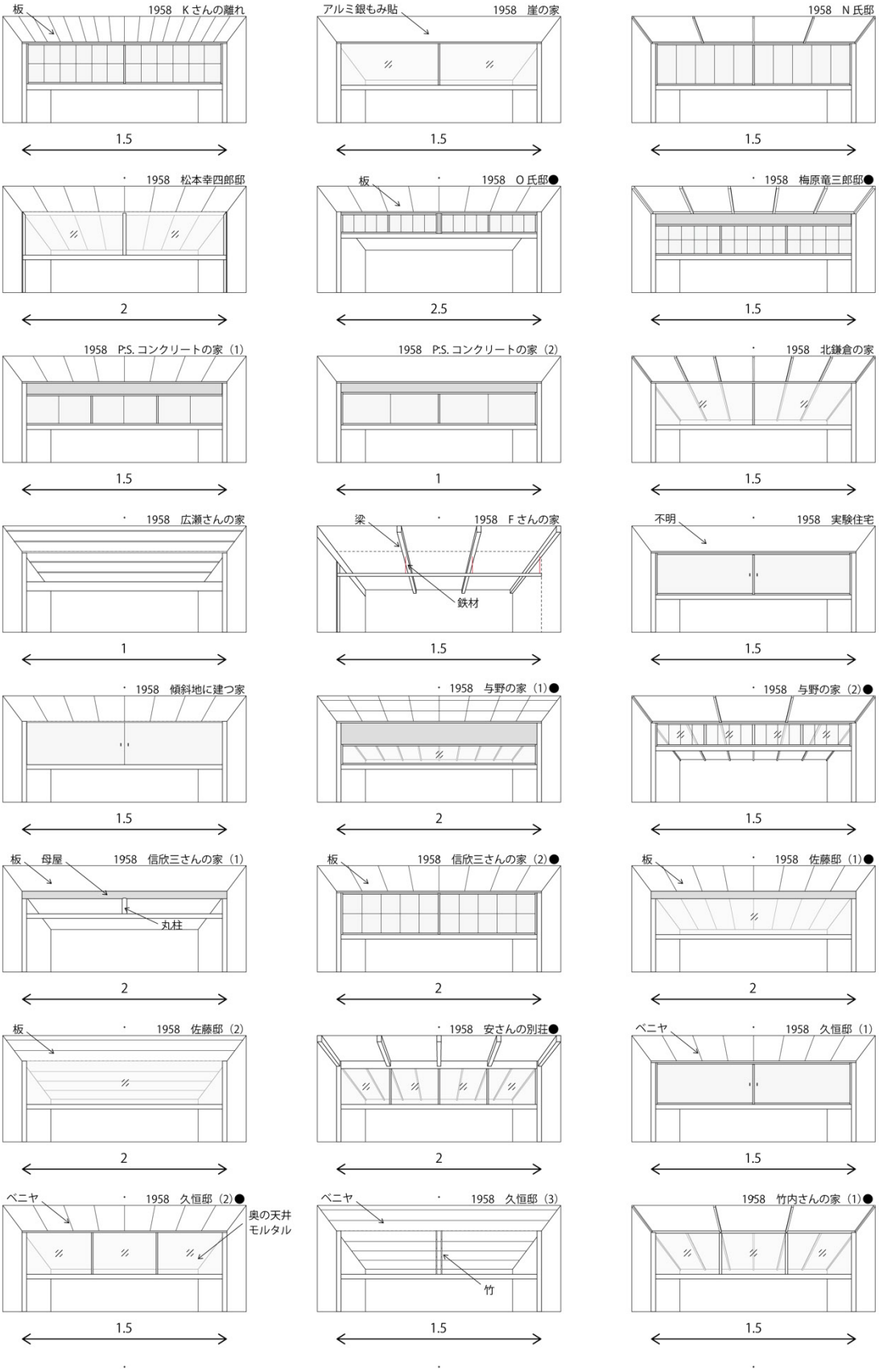
『新建築』


鳥の子貼
1956　若い建築家の家
1.5
不明
1956　成城の家●
1.5
1956　大森の小住居●
不明
2
1956　T型平面の家（1）
2
1956　T型平面の家（2）●
1.5
1956　川端の家
素材不明、鉄？
2
1956　コンクリートシェルの住い
鉄
2
1956　沢木邸
1.5
目地ナシ
1956　山崎邸
1.5
1956　ある公邸（1）
1.5
1956　ある公邸（2）●
1
不明
1956　K氏の離れ
2
1956　太田邸
梁
1.5
1956　島田さんの家●
2
1957　内田邸
2
1957　W邸（1）
力貫
2
1957　W邸（2）●
2
ベニヤパネル
1957　藤山氏邸●
4
梁
1957　H氏の住まい
素材不明、鉄？
1.5
1957　T氏邸
力貫
1.5
1957　細田邸
力貫
2
1957　兄たちのすまい●
1.5
1957　丘の斜面にたつ家（1）
2
1957　丘の斜面にたつ家（2）
1.5

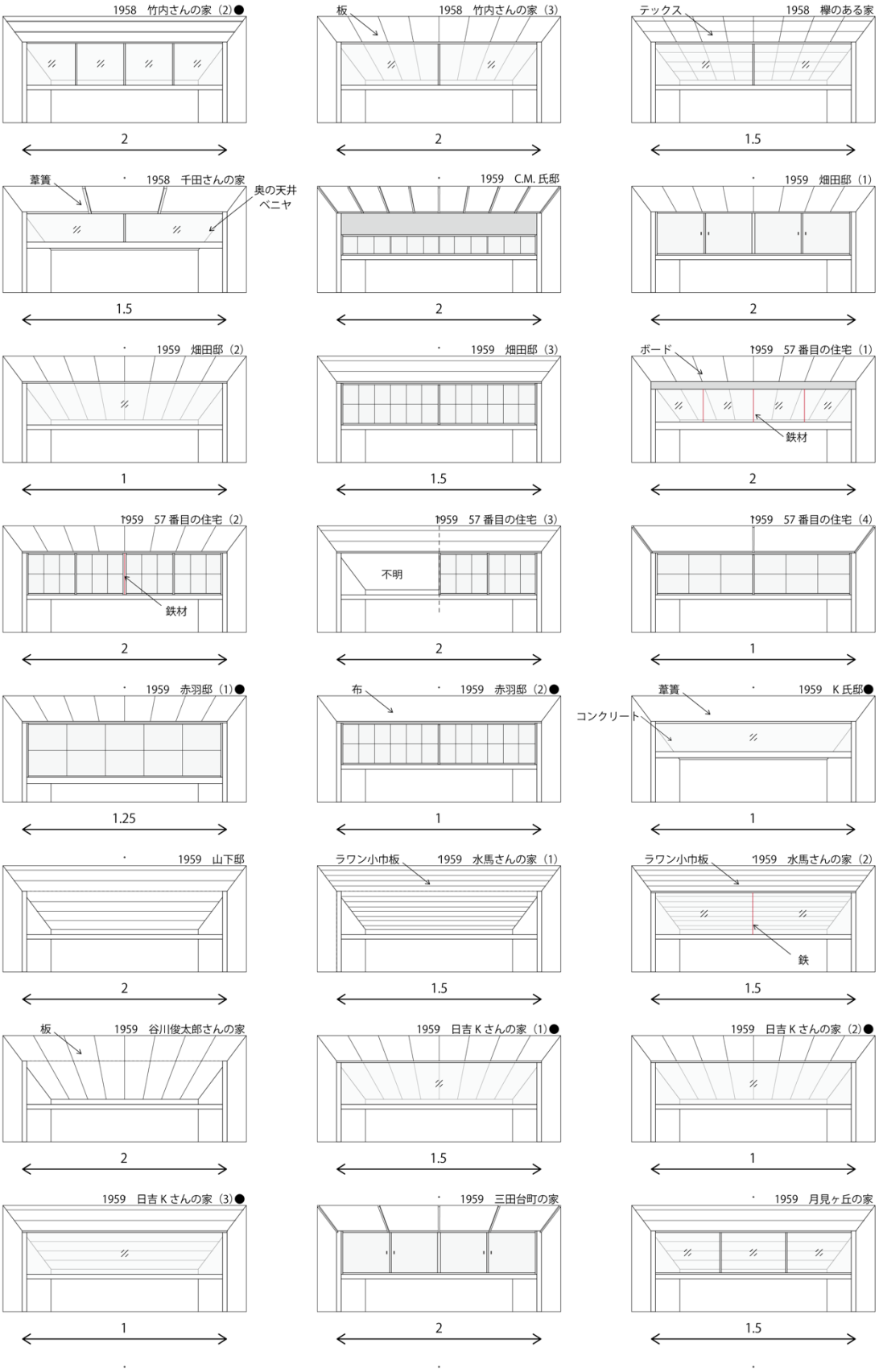
『新建築』


1957　丘の斜面にたつ家（3）
2
1957　K 氏の住い
1
1957　加賀氏邸（1）●
1
1957　加賀氏邸（2）
2
垂木
1957　加賀氏邸（3）●
2
不明
1957　神田邸●
1
テックス
登梁
1957　I 氏邸●
板
1.5
1957　K 氏邸
2
ベニヤ
1957　田型プラン B
1.5
鉄材
紙
1957　中村勘三郎邸
3.5
1957　父の家
2
ベニヤ
1957　船尾邸（1）
1.5
ベニヤ
1957　船尾邸（2）●
1.5
ボード
1957　河野さんの家●
1.5
1957　O 氏邸
2
1957　N 氏邸
2
ベニヤ
1957　丘の上の住宅●
2
ボード
1957　バルコニーのある家●
2
テックス
1957　父と子の家●
1.5
1957　青木さんの家
鉄材
2
葦簀
ベニヤ
1957　江古田の家
1.5
杉
1957　望月邸
2
ベニヤ
1958　佐伯邸ー山荘
1.5
1958　方形の家
1.5

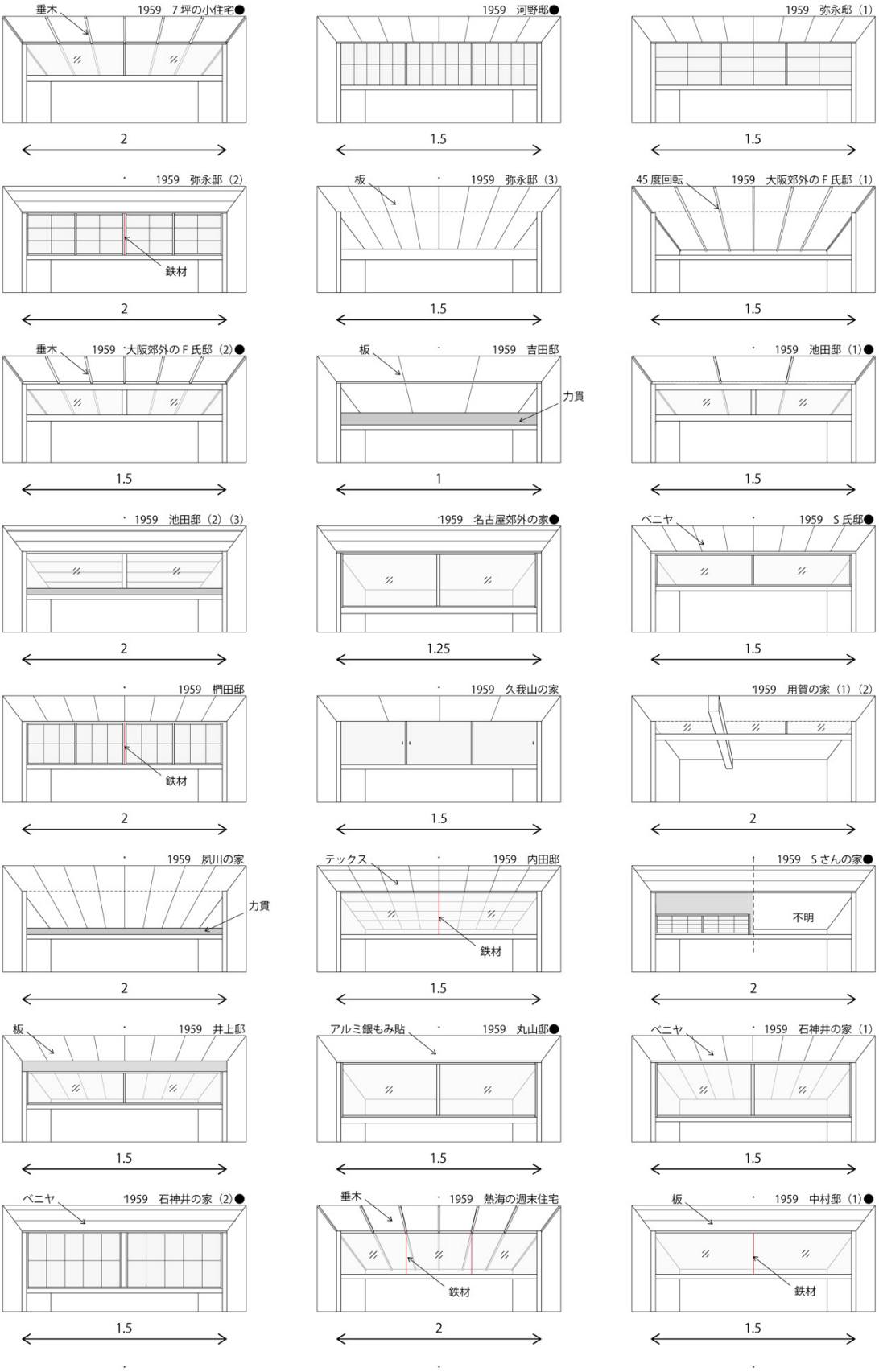
『新建築』


板
1958　Kさんの離れ
1.5
アルミ銀もみ貼
1958　崖の家
1.5
1958　N氏邸
1.5
1958　松本幸四郎邸
2
板
1958　O氏邸●
2.5
1958　梅原竜三郎邸●
1.5
1958　P.S. コンクリートの家（1）
1.5
1958　P.S. コンクリートの家（2）
1
1958　北鎌倉の家
1.5
1958　広瀬さんの家
1
梁
1958　Fさんの家
鉄材
1.5
不明
1958　実験住宅
1.5
1958　傾斜地に建つ家
1.5
1958　与野の家（1）●
2
1958　与野の家（2）●
1.5
板
母屋
1958　信欣三さんの家（1）
丸柱
2
板
1958　信欣三さんの家（2）●
2
板
1958　佐藤邸（1）●
2
板
1958　佐藤邸（2）
2
1958　安さんの別荘●
2
ベニヤ
1958　久恒邸（1）
1.5
ベニヤ
1958　久恒邸（2）●
奥の天井
モルタル
1.5
ベニヤ
1958　久恒邸（3）
竹
1.5
1958　竹内さんの家（1）●
1.5

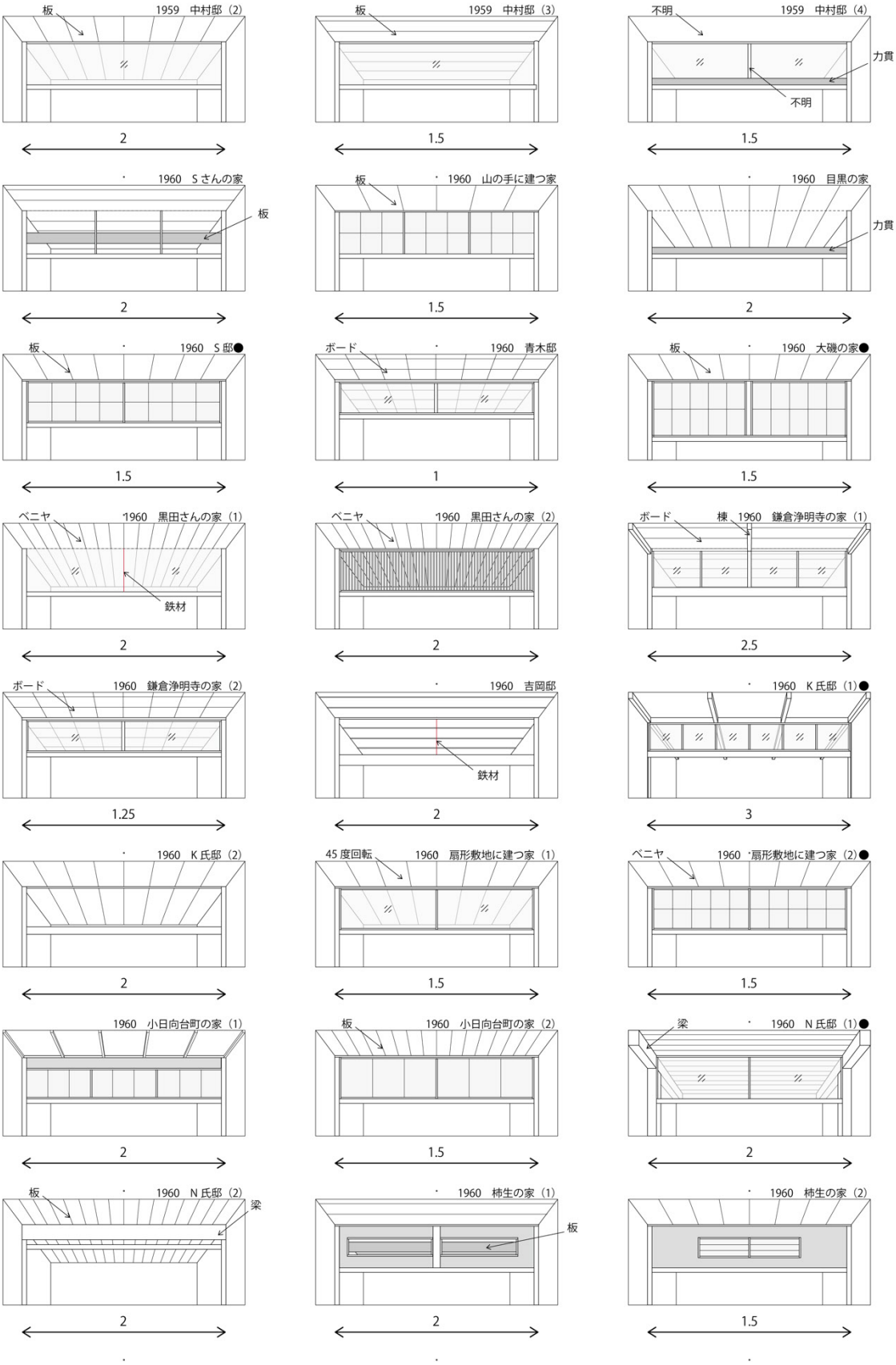
『新建築』


1958　竹内さんの家（2）●
2
板
1958　竹内さんの家（3）
2
テックス
1958　欅のある家
1.5
葦簀
1958　千田さんの家
奥の天井
ベニヤ
1.5
1959　C.M. 氏邸
2
1959　畑田邸（1）
2
1959　畑田邸（2）
1
1959　畑田邸（3）
1.5
ボード
1959　57 番目の住宅（1）
鉄材
2
1959　57 番目の住宅（2）
鉄材
2
1959　57 番目の住宅（3）
不明
2
1959　57 番目の住宅（4）
1
1959　赤羽邸（1）●
1.25
布
1959　赤羽邸（2）●
1
葦簀
1959　K 氏邸●
コンクリート
1
1959　山下邸
2
ラワン小巾板
1959　水馬さんの家（1）
1.5
ラワン小巾板
1959　水馬さんの家（2）
鉄
1.5
板
1959　谷川俊太郎さんの家
2
1959　日吉 K さんの家（1）●
1.5
1959　日吉 K さんの家（2）●
1
1959　日吉 K さんの家（3）●
1
1959　三田台町の家
2
1959　月見ヶ丘の家
1.5

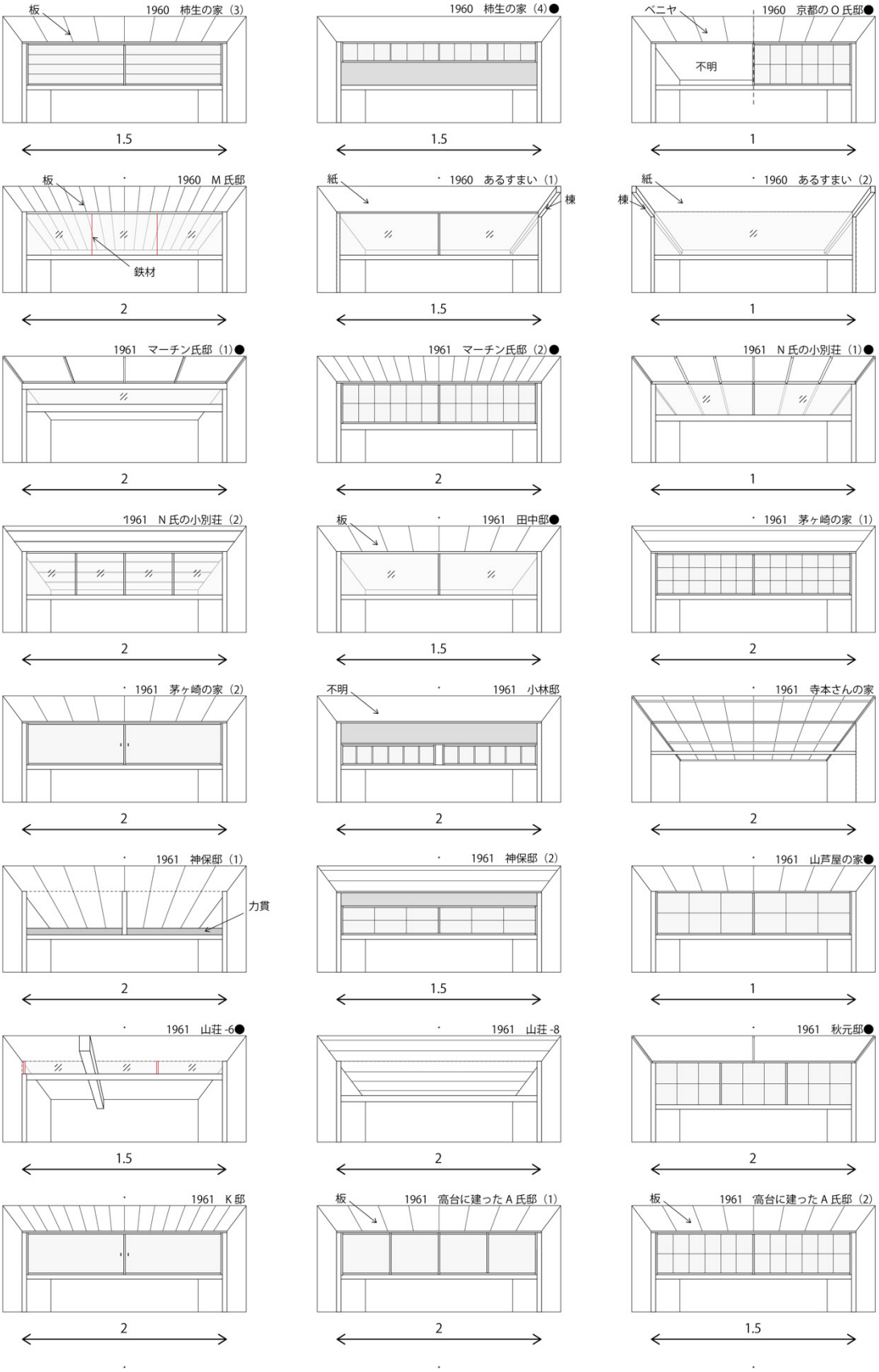
『新建築』


垂木
1959　7 坪の小住宅●
2
1959　河野邸●
1.5
1959　弥永邸（1）
1.5
1959　弥永邸（2）
鉄材
2
板
1959　弥永邸（3）
1.5
45 度回転
1959　大阪郊外の F 氏邸（1）
1.5
垂木
1959　大阪郊外の F 氏邸（2）●
1.5
板
1959　吉田邸
力貫
1
1959　池田邸（1）●
1.5
1959　池田邸（2）（3）
2
1959　名古屋郊外の家●
1.25
ベニヤ
1959　S 氏邸●
1.5
1959　椚田邸
鉄材
2
1959　久我山の家
1.5
1959　用賀の家（1）（2）
2
1959　夙川の家
力貫
2
テックス
1959　内田邸
鉄材
1.5
1959　S さんの家●
不明
2
板
1959　井上邸
1.5
アルミ銀もみ貼
1959　丸山邸●
1.5
ベニヤ
1959　石神井の家（1）
1.5
ベニヤ
1959　石神井の家（2）●
1.5
垂木
1959　熱海の週末住宅
鉄材
2
板
1959　中村邸（1）●
鉄材
1.5

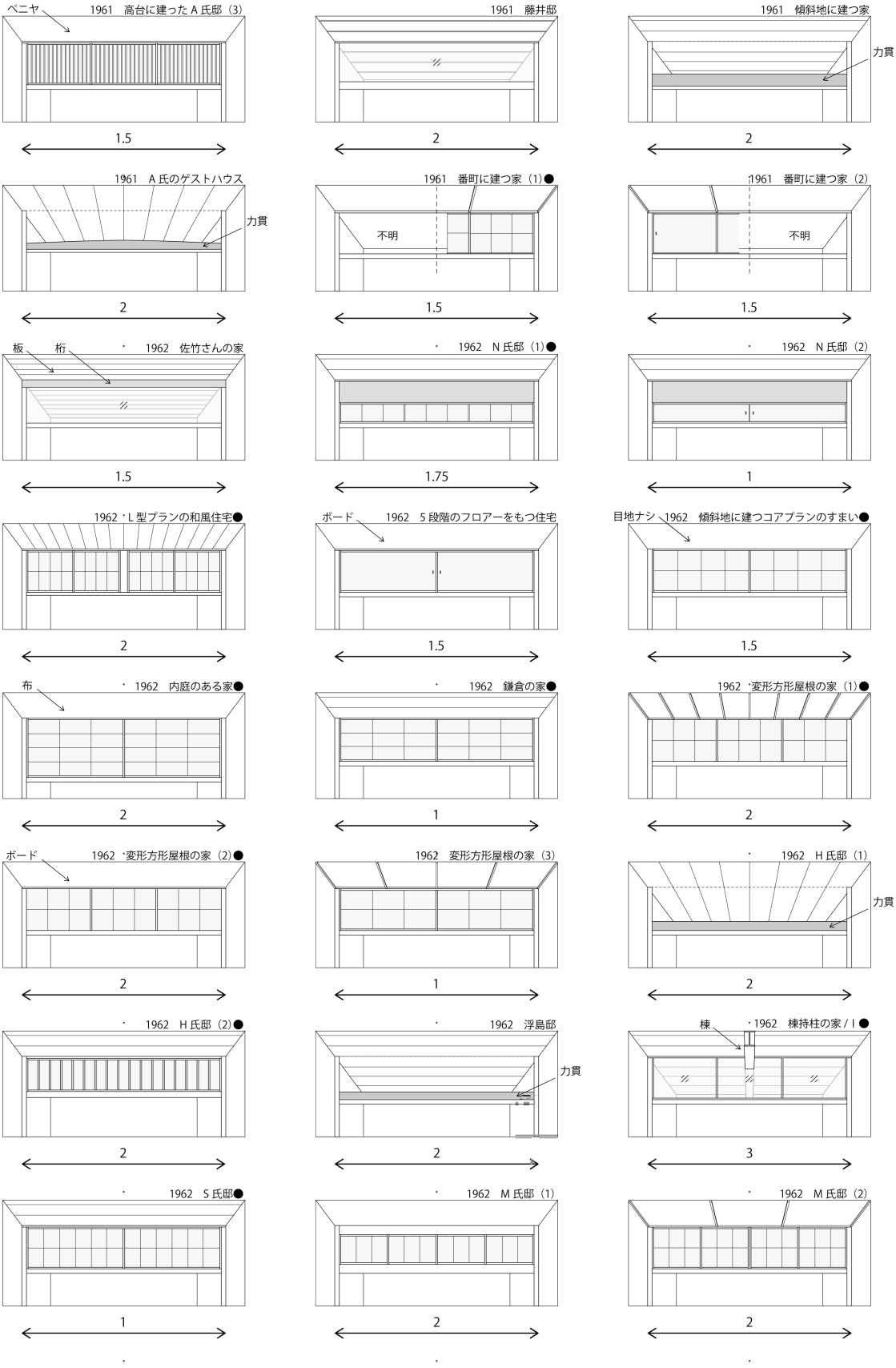
『新建築』


板
1959　中村邸（2）
2
板
1959　中村邸（3）
1.5
不明
1959　中村邸（4）
力貫
不明
1.5
1960　S さんの家
板
2
板
1960　山の手に建つ家
1.5
1960　目黒の家
力貫
2
板
1960　S 邸●
1.5
ボード
1960　青木邸
1
板
1960　大磯の家●
1.5
ベニヤ
1960　黒田さんの家（1）
鉄材
2
ベニヤ
1960　黒田さんの家（2）
2
ボード
棟
1960　鎌倉浄明寺の家（1）
2.5
ボード
1960　鎌倉浄明寺の家（2）
1.25
1960　吉岡邸
鉄材
2
1960　K 氏邸（1）●
3
1960　K 氏邸（2）
2
45 度回転
1960　扇形敷地に建つ家（1）
1.5
ベニヤ
1960　扇形敷地に建つ家（2）●
1.5
1960　小日向台町の家（1）
2
板
1960　小日向台町の家（2）
1.5
梁
1960　N 氏邸（1）●
2
板
1960　N 氏邸（2）
梁
2
1960　柿生の家（1）
板
2
1960　柿生の家（2）
1.5

『新建築』


板
1960　柿生の家（3）
1.5
1960　柿生の家（4）●
1.5
ベニヤ
1960　京都のＯ氏邸●
不明
1
板
1960　Ｍ氏邸
鉄材
2
紙
1960　あるすまい（1）
棟
1.5
紙
1960　あるすまい（2）
棟
1
1961　マーチン氏邸（1）●
2
1961　マーチン氏邸（2）●
2
1961　Ｎ氏の小別荘（1）●
1
1961　Ｎ氏の小別荘（2）
2
板
1961　田中邸●
1.5
1961　茅ヶ崎の家（1）
2
1961　茅ヶ崎の家（2）
2
不明
1961　小林邸
2
1961　寺本さんの家
2
1961　神保邸（1）
力貫
2
1961　神保邸（2）
1.5
1961　山芦屋の家●
1
1961　山荘 -6●
1.5
1961　山荘 -8
2
1961　秋元邸●
2
1961　Ｋ邸
2
板
1961　高台に建ったＡ氏邸（1）
2
板
1961　高台に建ったＡ氏邸（2）
1.5

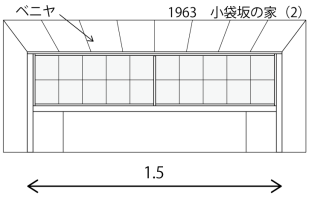
『新建築』

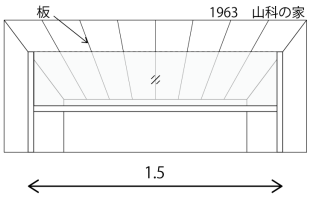

ベニヤ
1961　高台に建った A 氏邸（3）
1.5
1961　藤井邸
2
1961　傾斜地に建つ家
力貫
2
1961　A 氏のゲストハウス
力貫
2
1961　番町に建つ家（1）●
不明
1.5
1961　番町に建つ家（2）
不明
1.5
板
桁
・　1962　佐竹さんの家
1.5
・　1962　N 氏邸（1）●
1.75
・　1962　N 氏邸（2）
1
1962・L 型プランの和風住宅●
2
ボード
1962　5 段階のフロアーをもつ住宅
1.5
目地ナシ
1962　傾斜地に建つコアプランのすまい●
1.5
布
・　1962　内庭のある家●
2
・　1962　鎌倉の家●
1
1962・変形方形屋根の家（1）●
2
ボード
1962・変形方形屋根の家（2）●
2
1962　変形方形屋根の家（3）
1
・　1962　H 氏邸（1）
力貫
2
・　1962　H 氏邸（2）●
2
・　1962　浮島邸
力貫
2
棟
・1962　棟持柱の家 / I ●
3
・　1962　S 氏邸●
1
・　1962　M 氏邸（1）
2
・　1962　M 氏邸（2）
2
・
・
・

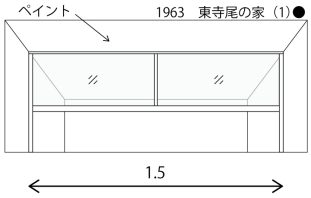
『新建築』

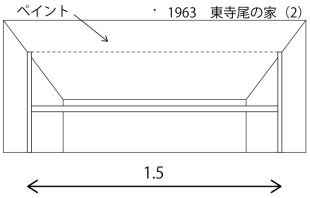
1962　M 氏邸（3）
1.5
1962　しいの木のある住宅●
2
テックス
1962　小平の家
1.5
1962　T 氏邸
力貫
1.5
1962　ボーンホワイトの壁の家（1）●
2
1962　ボーンホワイトの壁の家（2）
2
紙
1962　ボーンホワイトの壁の家（3）●
2
布
1962　カンティバレーの家
1
1963　山芦屋の家（1）●
1
1963　山芦屋の家（2）●
2
1963　山芦屋の家（3）
力貫
2
不明
1963　T 氏邸（1）
2
ベニヤ
1963　T 氏邸（2）
2.5
1963　S 氏邸●
1.25
ラワン
1963　野末邸
1
ベニヤ
1963　島沢先生の家
2
目地ナシ
1963・黒い建具と白い壁の家●
1.5
板
1963　K 氏邸（1）
1.75
板
1963　K 氏邸（2）●
2
目地ナシ
1963・ユニットプランの住宅●
1.5
ベニヤ
1963　上馬の家（1）（2）
2
1963　国立の H 氏邸（1）
2
1963　国立の H 氏邸（2）
1
ベニヤ
1963　小袋坂の家（1）
2

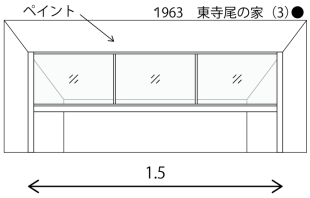
『新建築』

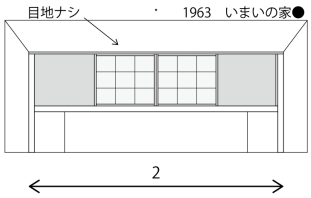

ベニヤ
1963　小袋坂の家（2）
1.5

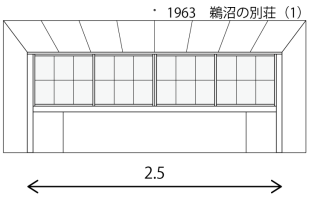

板
1963　山科の家
1.5

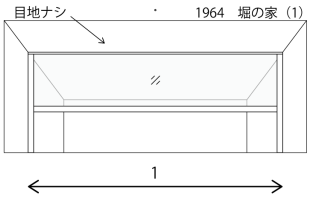

ペイント
1963　東寺尾の家（1）●
1.5

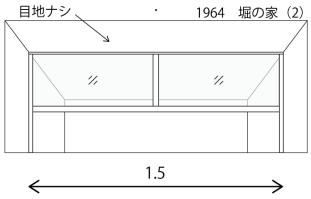

ペイント
1963　東寺尾の家（2）
1.5

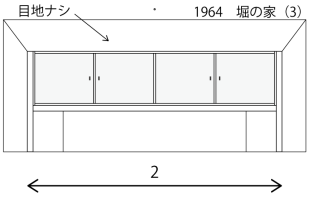

ペイント
1963　東寺尾の家（3）●
1.5

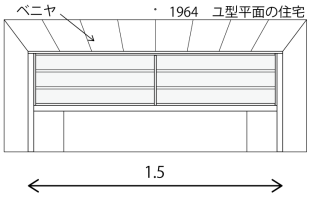

目地ナシ
1963　いまいの家●
2

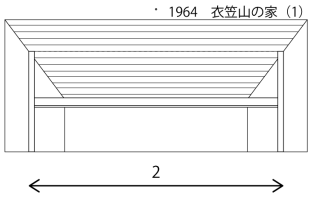

1963　鵜沼の別荘（1）
2.5

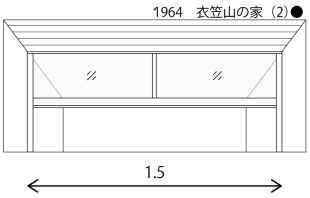

目地ナシ
1964　堀の家（1）
1

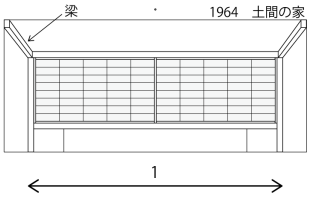

目地ナシ
1964　堀の家（2）
1.5

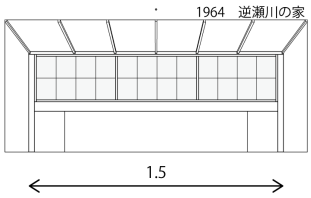

目地ナシ
1964　堀の家（3）
2

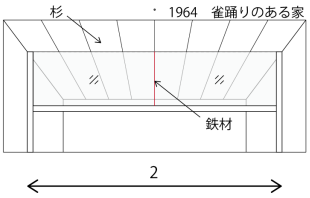

ベニヤ
1964　ユ型平面の住宅
1.5


1964　衣笠山の家（1）
2

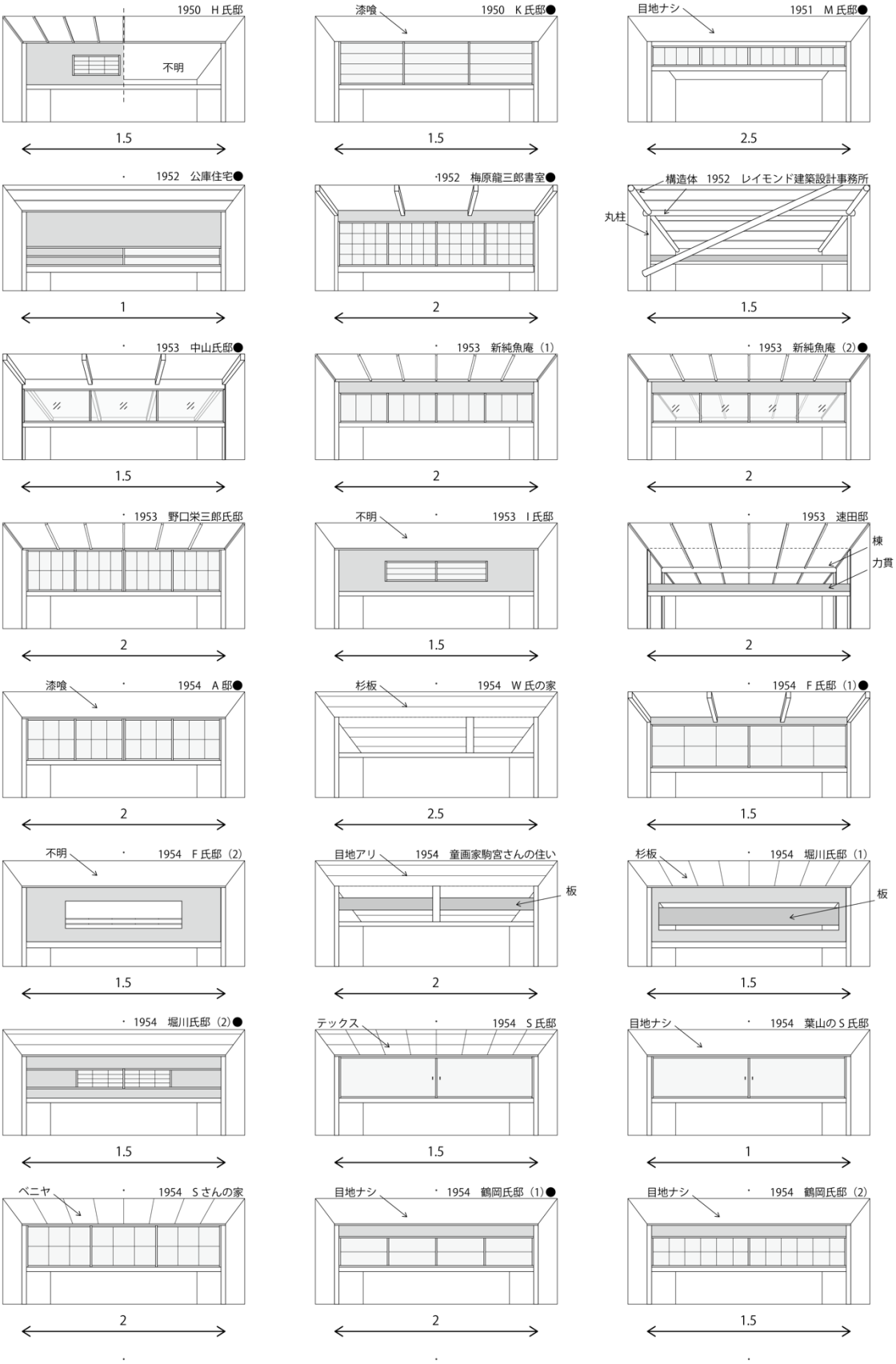

1964　衣笠山の家（2）●
1.5


梁
1964　土間の家
1

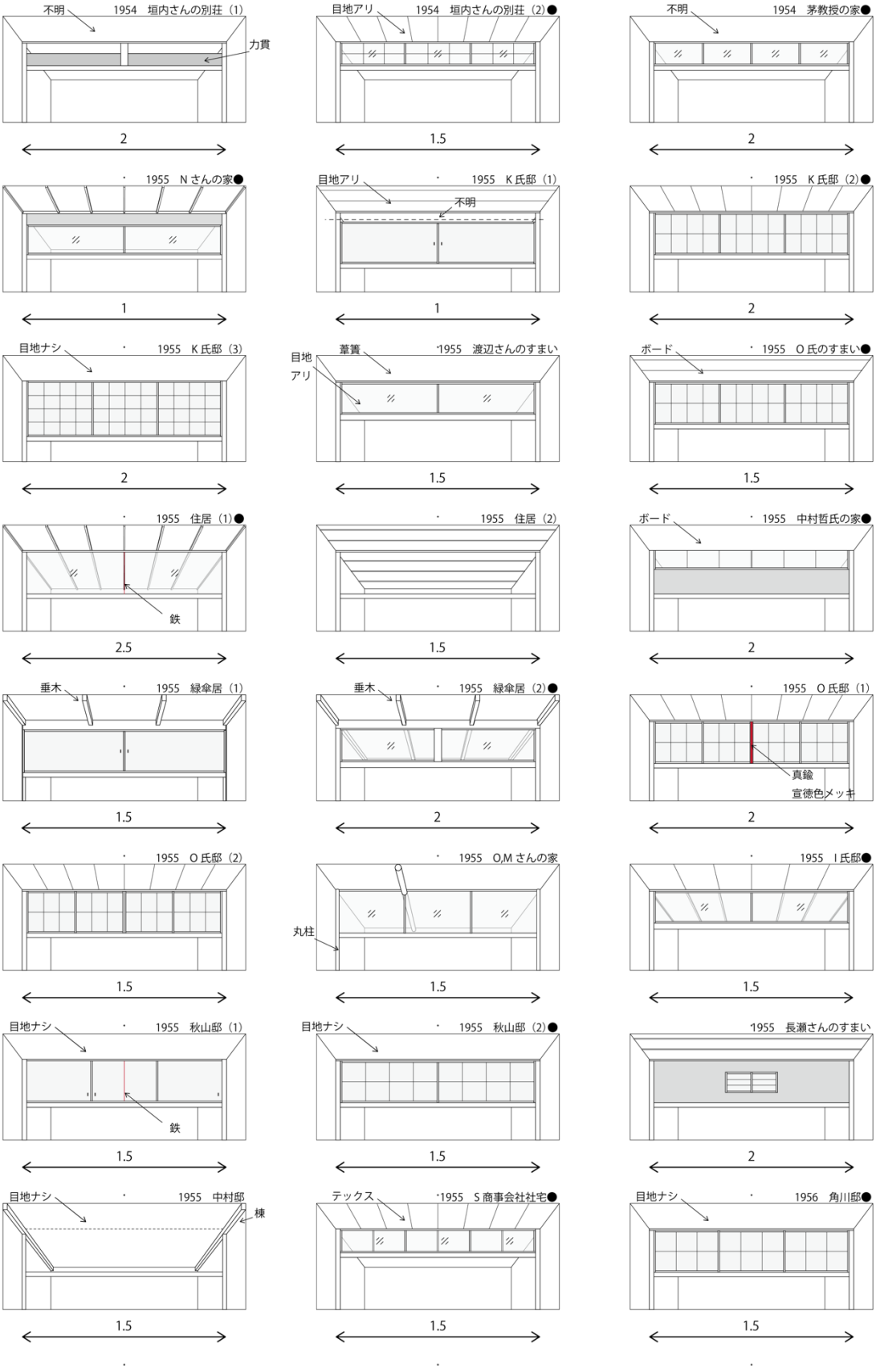

1964　逆瀬川の家
1.5


杉
1964　雀踊りのある家
鉄材
2

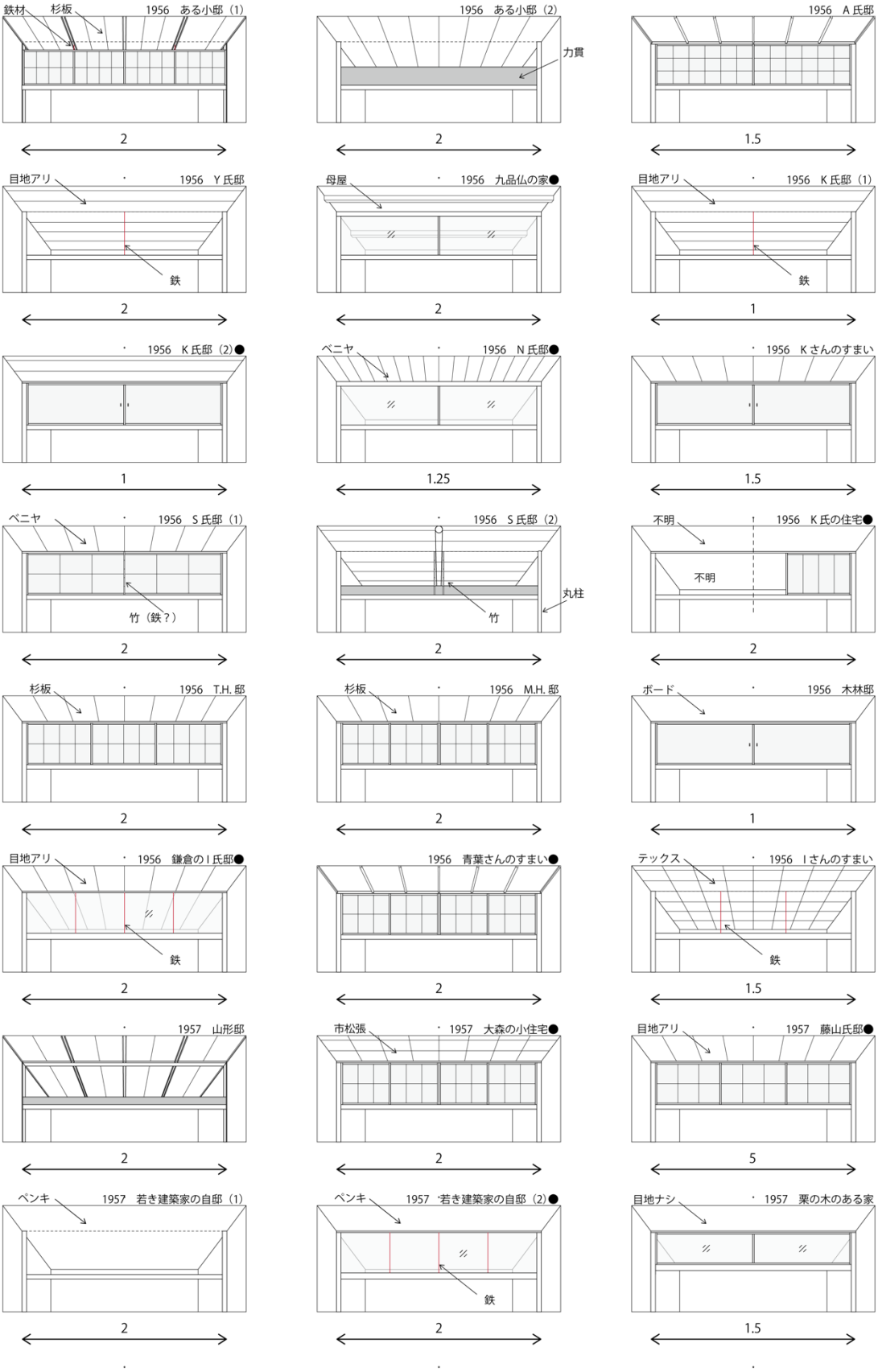
『建築文化』


1950 H 氏邸
不明
1.5
漆喰
1950 K 氏邸●
1.5
目地ナシ
1951 M 氏邸●
2.5
1952 公庫住宅●
1
1952 梅原龍三郎書室●
2
構造体 1952 レイモンド建築設計事務所
丸柱
1.5
1953 中山氏邸●
1.5
1953 新純魚庵（1）
2
1953 新純魚庵（2）●
2
1953 野口栄三郎氏邸
2
不明
1953 I 氏邸
1.5
1953 速田邸
棟
力貫
2
漆喰
1954 A 邸●
2
杉板
1954 W 氏の家
2.5
1954 F 氏邸（1）●
1.5
不明
1954 F 氏邸（2）
1.5
目地アリ
1954 童画家駒宮さんの住い
板
2
杉板
1954 堀川氏邸（1）
板
1.5
1954 堀川氏邸（2）●
1.5
テックス
1954 S 氏邸
1.5
目地ナシ
1954 葉山の S 氏邸
1
ベニヤ
1954 S さんの家
2
目地ナシ
1954 鶴岡氏邸（1）●
2
目地ナシ
1954 鶴岡氏邸（2）
1.5

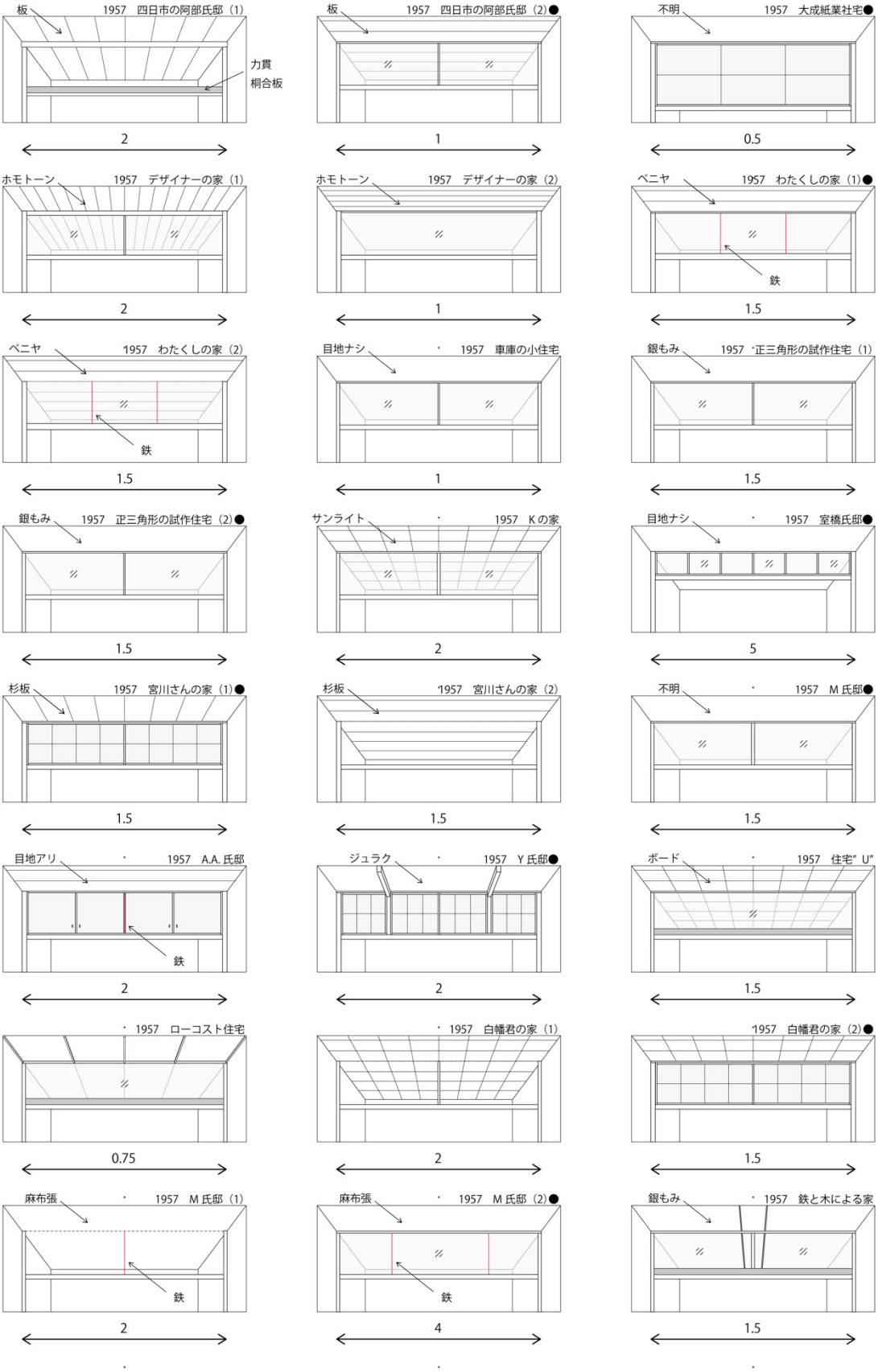
『建築文化』


不明
1954　垣内さんの別荘（1）
力貫
2
目地アリ
1954　垣内さんの別荘（2）●
1.5
不明
1954　茅教授の家●
2
1955　N さんの家●
1
目地アリ
1955　K 氏邸（1）
不明
1
1955　K 氏邸（2）●
2
目地ナシ
1955　K 氏邸（3）
2
目地
アリ
葦簀
1955　渡辺さんのすまい
1.5
ボード
1955　O 氏のすまい●
1.5
1955　住居（1）●
鉄
2.5
1955　住居（2）
1.5
ボード
1955　中村哲氏の家●
2
垂木
1955　緑傘居（1）
1.5
垂木
1955　緑傘居（2）●
2
1955　O 氏邸（1）
真鍮
宣徳色メッキ
2
1955　O 氏邸（2）
1.5
1955　O,M さんの家
丸柱
1.5
1955　I 氏邸●
1.5
目地ナシ
1955　秋山邸（1）
鉄
1.5
目地ナシ
1955　秋山邸（2）●
1.5
1955　長瀬さんのすまい
2
目地ナシ
1955　中村邸
棟
1.5
テックス
1955　S 商事会社社宅●
1.5
目地ナシ
1956　角川邸●
1.5

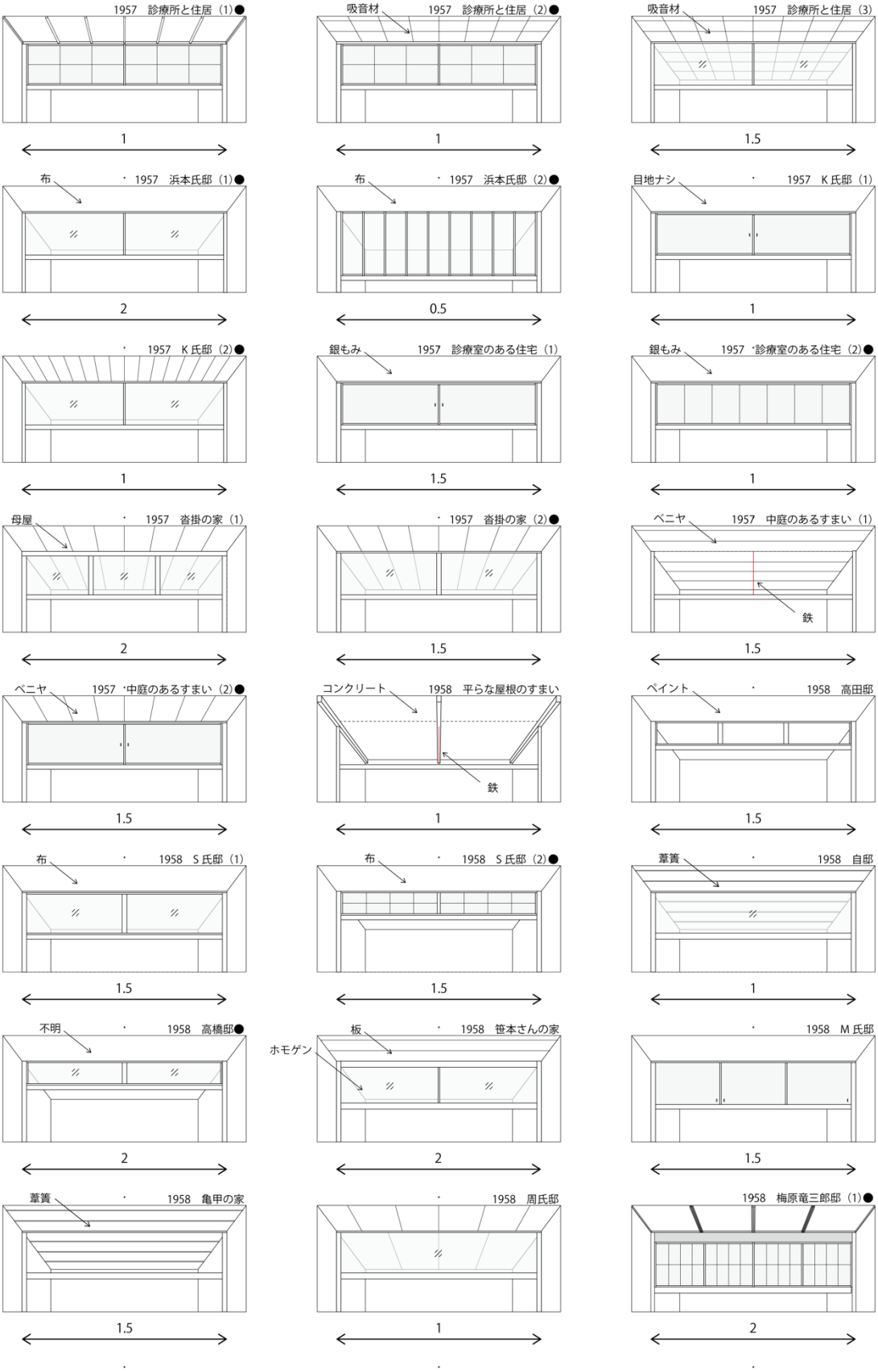
『建築文化』


鉄材
杉板
1956　ある小邸（1）
2
1956　ある小邸（2）
力貫
2
1956　A 氏邸
1.5
目地アリ
1956　Y 氏邸
鉄
2
母屋
1956　九品仏の家●
2
目地アリ
1956　K 氏邸（1）
鉄
1
1956　K 氏邸（2）●
1
ベニヤ
1956　N 氏邸●
1.25
1956　K さんのすまい
1.5
ベニヤ
1956　S 氏邸（1）
竹（鉄？）
2
1956　S 氏邸（2）
丸柱
竹
2
不明
1956　K 氏の住宅●
不明
2
杉板
1956　T.H. 邸
2
杉板
1956　M.H. 邸
2
ボード
1956　木林邸
1
目地アリ
1956　鎌倉の I 氏邸●
鉄
2
1956　青葉さんのすまい●
2
テックス
1956　I さんのすまい
鉄
1.5
1957　山形邸
2
市松張
1957　大森の小住宅●
2
目地アリ
1957　藤山氏邸●
5
ペンキ
1957　若き建築家の自邸（1）
2
ペンキ
1957　若き建築家の自邸（2）●
鉄
2
目地ナシ
1957　栗の木のある家
1.5

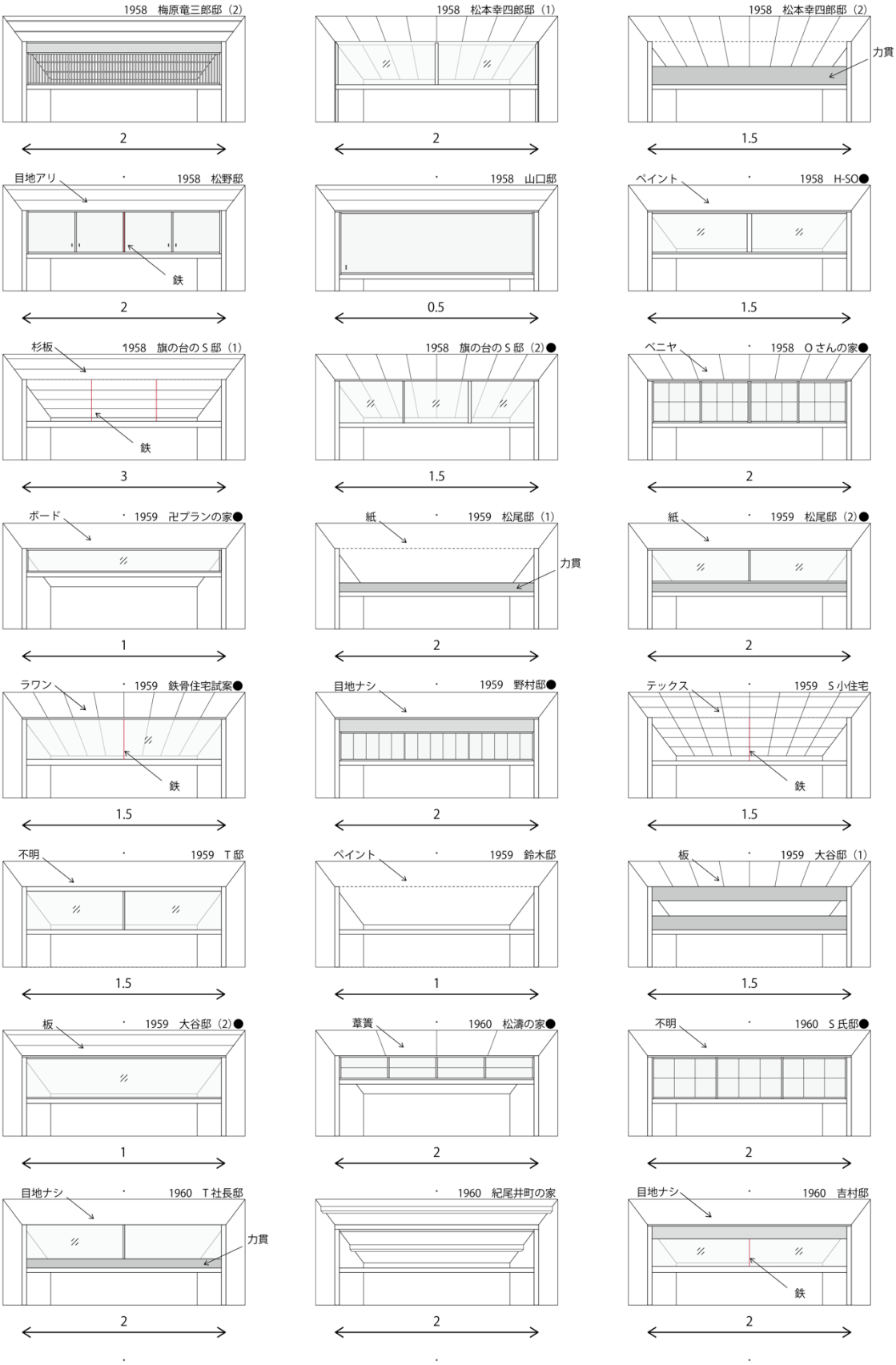
『建築文化』


板
1957　四日市の阿部氏邸（1）
力貫
桐合板
2
板
1957　四日市の阿部氏邸（2）●
1
不明
1957　大成紙業社宅●
0.5
ホモトーン
1957　デザイナーの家（1）
2
ホモトーン
1957　デザイナーの家（2）
1
ベニヤ
1957　わたくしの家（1）●
鉄
1.5
ベニヤ
1957　わたくしの家（2）
鉄
1.5
目地ナシ
1957　車庫の小住宅
1
銀もみ
1957　正三角形の試作住宅（1）
1.5
銀もみ
1957　正三角形の試作住宅（2）●
1.5
サンライト
1957　Kの家
2
目地ナシ
1957　室橋氏邸●
5
杉板
1957　宮川さんの家（1）●
1.5
杉板
1957　宮川さんの家（2）
1.5
不明
1957　M氏邸●
1.5
目地アリ
1957　A.A. 氏邸
鉄
2
ジュラク
1957　Y氏邸●
2
ボード
1957　住宅″U″
1.5
1957　ローコスト住宅
0.75
1957　白幡君の家（1）
2
1957　白幡君の家（2）●
1.5
麻布張
1957　M氏邸（1）
鉄
2
麻布張
1957　M氏邸（2）●
鉄
4
銀もみ
1957　鉄と木による家
1.5

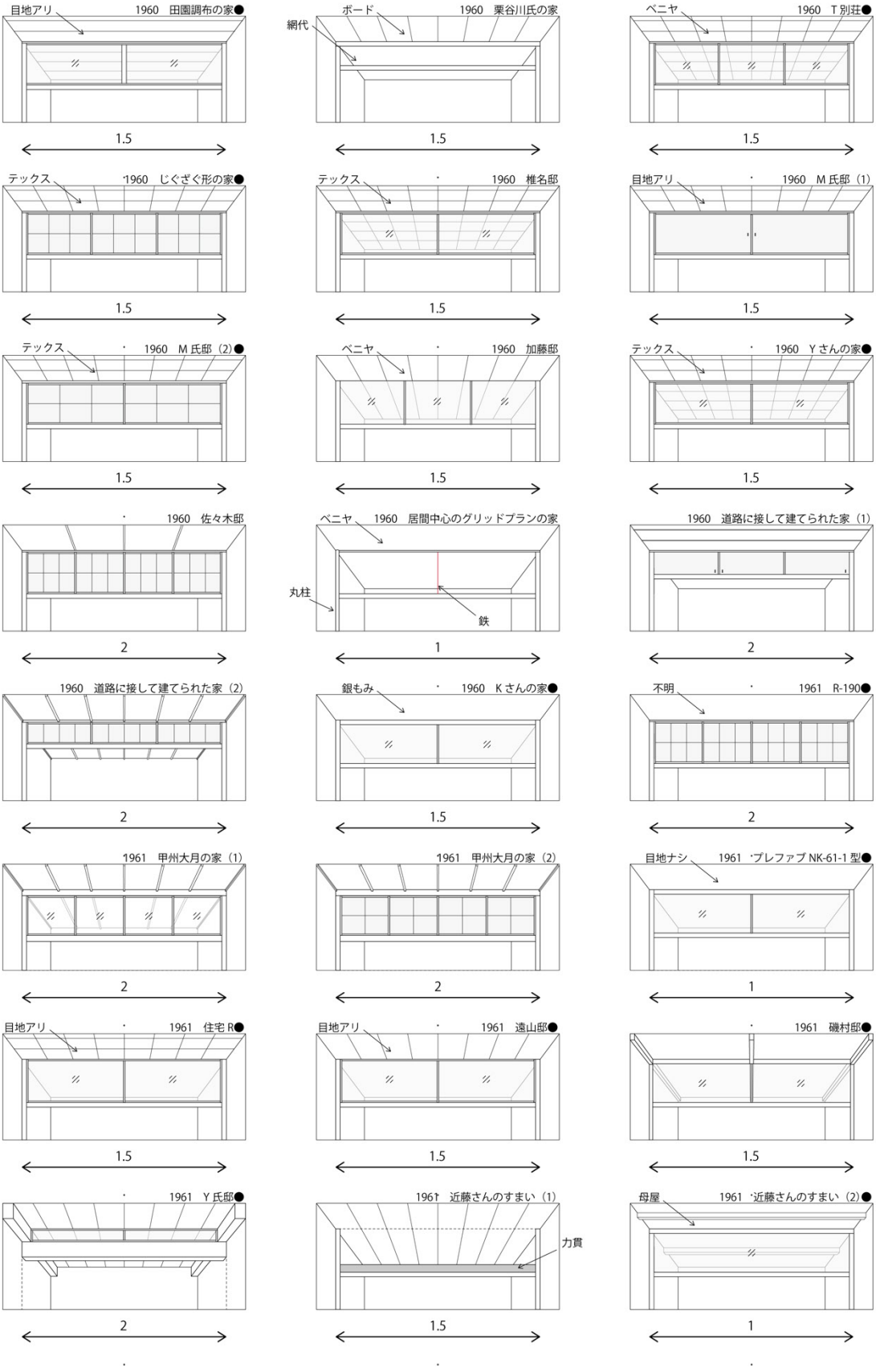
『建築文化』


1957　診療所と住居（1）●
1
吸音材
1957　診療所と住居（2）●
1
吸音材
1957　診療所と住居（3）
1.5
布
・1957　浜本氏邸（1）●
2
布
・1957　浜本氏邸（2）●
0.5
目地ナシ
・1957　K 氏邸（1）
1
・1957　K 氏邸（2）●
1
銀もみ
1957　診療室のある住宅（1）
1.5
銀もみ
1957　診療室のある住宅（2）●
1
母屋
・1957　沓掛の家（1）
2
・1957　沓掛の家（2）●
1.5
ベニヤ
1957　中庭のあるすまい（1）
鉄
1.5
ベニヤ
1957　中庭のあるすまい（2）●
1.5
コンクリート
1958　平らな屋根のすまい
鉄
1
ペイント
・1958　高田邸
1.5
布
・1958　S 氏邸（1）
1.5
布
・1958　S 氏邸（2）●
1.5
葦簀
・1958　自邸
1
不明
・1958　高橋邸●
2
板
・1958　笹本さんの家
ホモゲン
2
・1958　M 氏邸
1.5
葦簀
・1958　亀甲の家
1.5
・1958　周氏邸
1
1958　梅原竜三郎邸（1）●
2

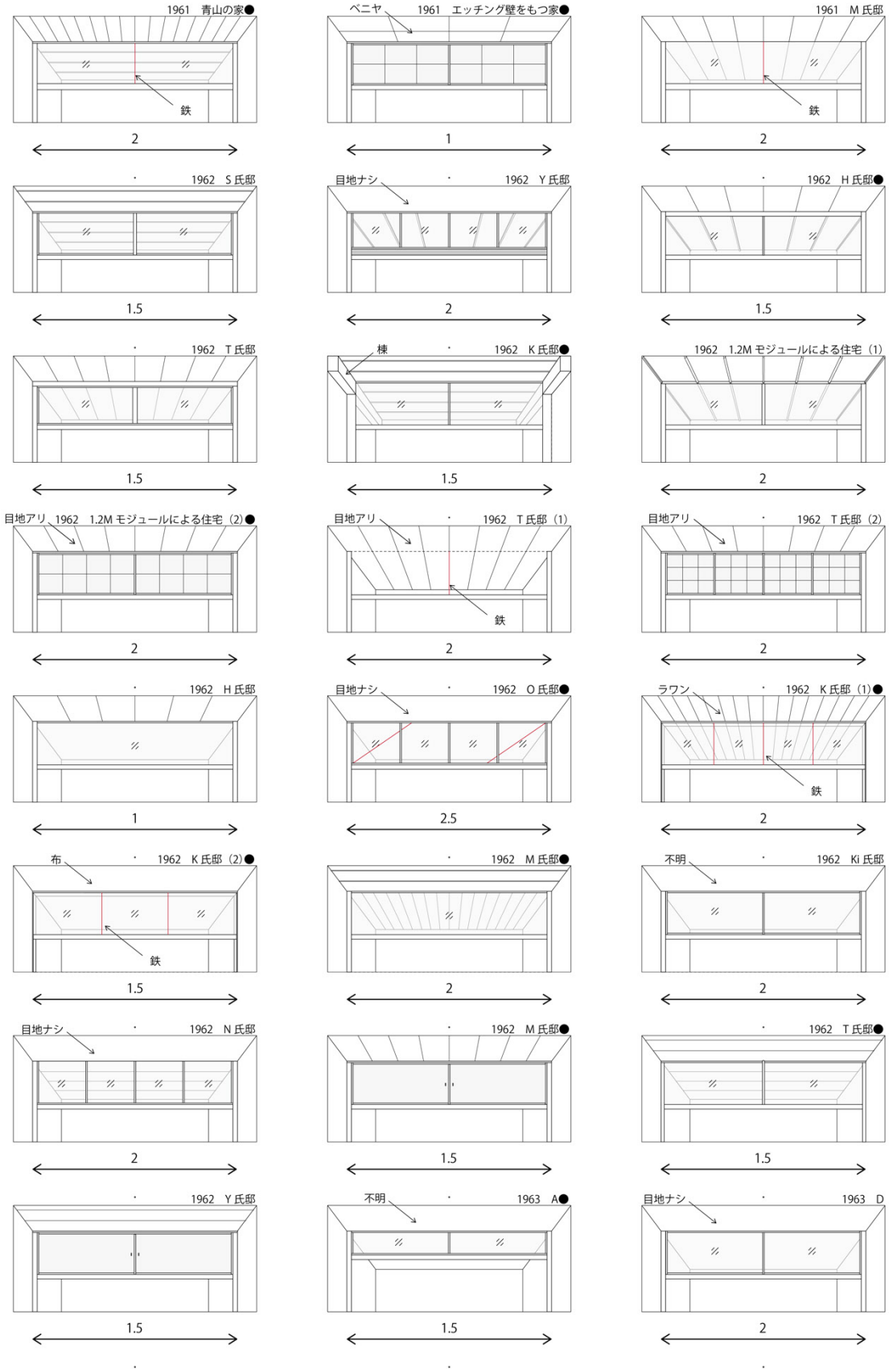
『建築文化』


1958　梅原竜三郎邸（2）
2
1958　松本幸四郎邸（1）
2
1958　松本幸四郎邸（2）
力貫
1.5
目地アリ
1958　松野邸
鉄
2
1958　山口邸
0.5
ペイント
1958　H-SO●
1.5
杉板
1958　旗の台のＳ邸（1）
鉄
3
1958　旗の台のＳ邸（2）●
1.5
ベニヤ
1958　Ｏさんの家●
2
ボード
1959　卍プランの家●
1
紙
1959　松尾邸（1）
力貫
2
紙
1959　松尾邸（2）●
2
ラワン
1959　鉄骨住宅試案●
鉄
1.5
目地ナシ
1959　野村邸●
2
テックス
1959　Ｓ小住宅
鉄
1.5
不明
1959　Ｔ邸
1.5
ペイント
1959　鈴木邸
1
板
1959　大谷邸（1）
1.5
板
1959　大谷邸（2）●
1
葦簀
1960　松濤の家●
2
不明
1960　Ｓ氏邸●
2
目地ナシ
1960　Ｔ社長邸
力貫
2
1960　紀尾井町の家
2
目地ナシ
1960　吉村邸
鉄
2

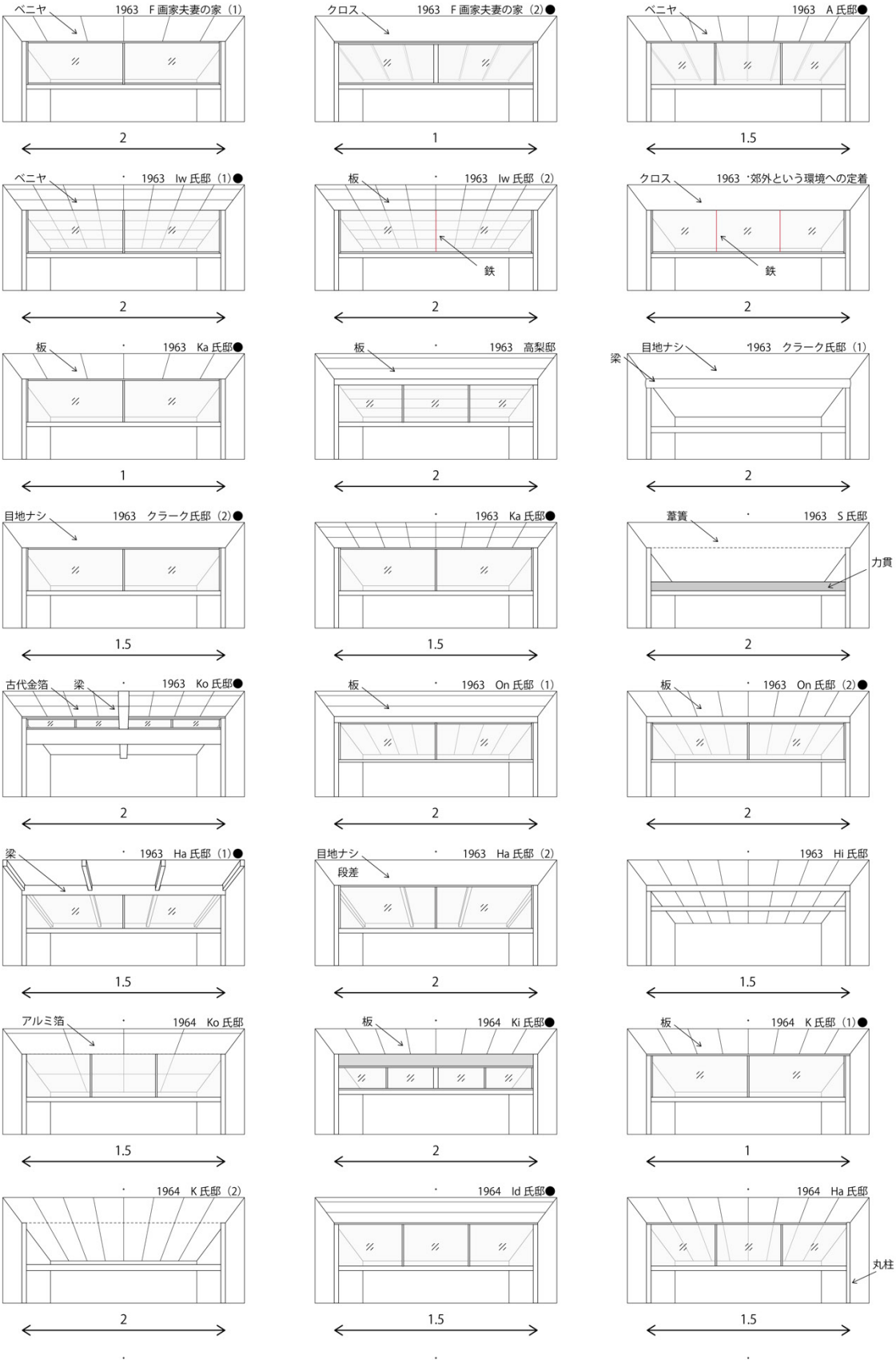
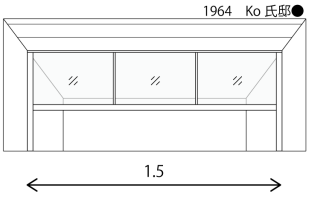
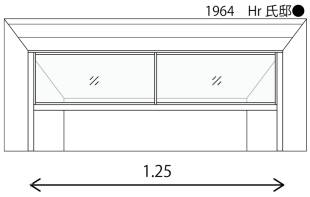
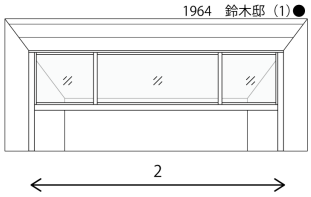
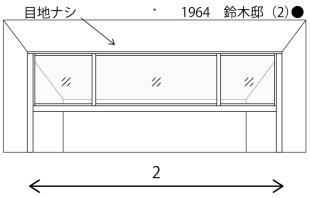
『建築文化』


目地アリ
1960　田園調布の家●
1.5
ボード
網代
1960　栗谷川氏の家
1.5
ベニヤ
1960　T別荘●
1.5
テックス
1960　じぐざぐ形の家●
1.5
テックス
1960　椎名邸
1.5
目地アリ
1960　M氏邸（1）
1.5
テックス
1960　M氏邸（2）●
1.5
ベニヤ
1960　加藤邸
1.5
テックス
1960　Yさんの家●
1.5
1960　佐々木邸
2
ベニヤ
1960　居間中心のグリッドプランの家
丸柱
鉄
1
1960　道路に接して建てられた家（1）
2
1960　道路に接して建てられた家（2）
2
銀もみ
1960　Kさんの家●
1.5
不明
1961　R-190●
2
1961　甲州大月の家（1）
2
1961　甲州大月の家（2）
2
目地ナシ
1961　プレファブNK-61-1型●
1
目地アリ
1961　住宅R●
1.5
目地アリ
1961　遠山邸●
1.5
1961　磯村邸●
1.5
1961　Y氏邸●
2
1961　近藤さんのすまい（1）
力貫
1.5
母屋
1961　近藤さんのすまい（2）●
1

『建築文化』


1961 青山の家●
鉄
2
ベニヤ
1961 エッチング壁をもつ家●
1
1961 M 氏邸
鉄
2
1962 S 氏邸
1.5
目地ナシ
1962 Y 氏邸
2
1962 H 氏邸●
1.5
1962 T 氏邸
1.5
棟
1962 K 氏邸●
1.5
1962 1.2M モジュールによる住宅（1）
2
目地アリ
1962 1.2M モジュールによる住宅（2）●
2
目地アリ
1962 T 氏邸（1）
鉄
2
目地アリ
1962 T 氏邸（2）
2
1962 H 氏邸
1
目地ナシ
1962 O 氏邸●
2.5
ラワン
1962 K 氏邸（1）●
鉄
2
布
1962 K 氏邸（2）●
鉄
1.5
1962 M 氏邸●
2
不明
1962 Ki 氏邸
2
目地ナシ
1962 N 氏邸
2
1962 M 氏邸●
1.5
1962 T 氏邸●
1.5
1962 Y 氏邸
1.5
不明
1963 A●
1.5
目地ナシ
1963 D
2

『建築文化』


ベニヤ
1963　F 画家夫妻の家（1）
2
クロス
1963　F 画家夫妻の家（2）●
1
ベニヤ
1963　A 氏邸●
1.5
ベニヤ
1963　Iw 氏邸（1）●
2
板
1963　Iw 氏邸（2）
鉄
2
クロス
1963・郊外という環境への定着
鉄
2
板
1963　Ka 氏邸●
1
板
1963　高梨邸
2
目地ナシ
梁
1963　クラーク氏邸（1）
2
目地ナシ
1963　クラーク氏邸（2）●
1.5
1963　Ka 氏邸●
1.5
葦簀
1963　S 氏邸
力貫
2
古代金箔
梁
1963　Ko 氏邸●
2
板
1963　On 氏邸（1）
2
板
1963　On 氏邸（2）●
2
梁
1963　Ha 氏邸（1）●
1.5
目地ナシ
段差
1963　Ha 氏邸（2）
2
1963　Hi 氏邸
1.5
アルミ箔
1964　Ko 氏邸
1.5
板
1964　Ki 氏邸●
2
板
1964　K 氏邸（1）●
1
1964　K 氏邸（2）
2
1964　Id 氏邸●
1.5
1964　Ha 氏邸
丸柱
1.5

『建築文化』